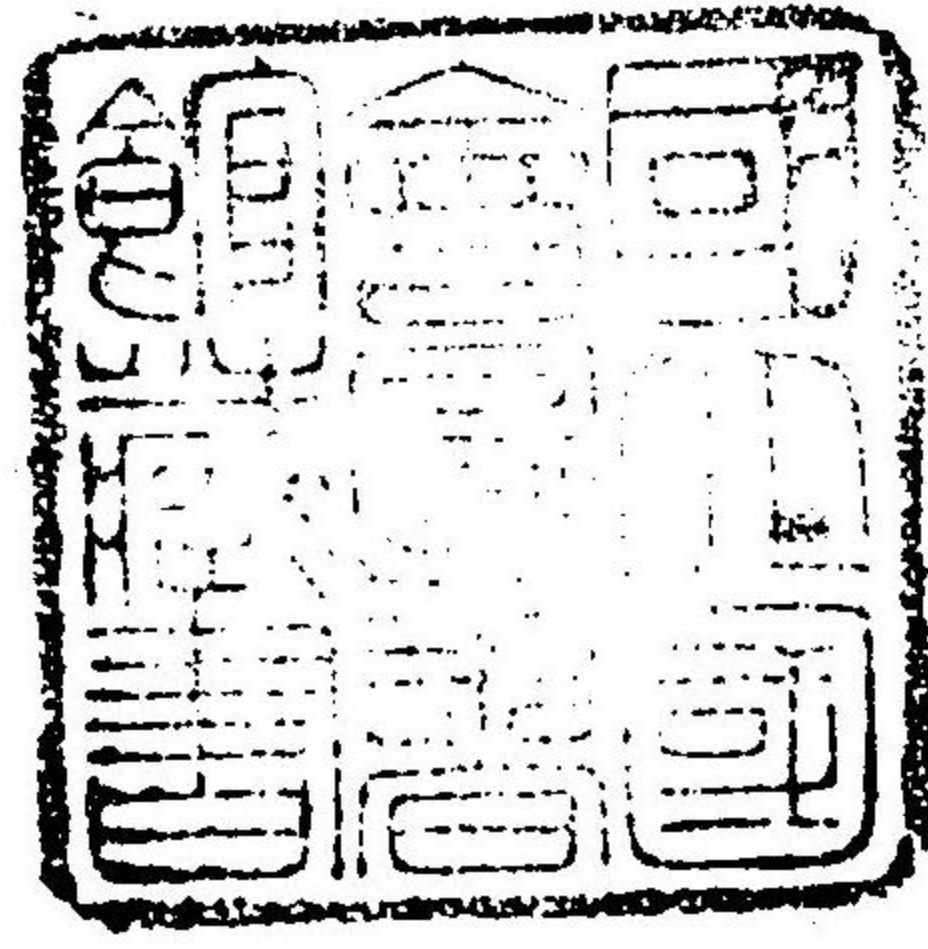


913.6M355a

目録  
一、序言  
二、百味齋の成立  
三、百味齋の発展  
四、百味齋の没落  
五、百味齋の復興  
六、百味齋の没落  
七、百味齋の復興  
八、百味齋の没落  
九、百味齋の復興  
十、百味齋の没落  
十一、百味齋の復興  
十二、百味齋の没落  
十三、百味齋の復興  
十四、百味齋の没落  
十五、百味齋の復興  
十六、百味齋の没落  
十七、百味齋の復興  
十八、百味齋の没落  
十九、百味齋の復興  
二十、百味齋の没落  
二十一、百味齋の復興  
二十二、百味齋の没落  
二十三、百味齋の復興  
二十四、百味齋の没落  
二十五、百味齋の復興  
二十六、百味齋の没落  
二十七、百味齋の復興  
二十八、百味齋の没落  
二十九、百味齋の復興  
三十、百味齋の没落  
三十一、百味齋の復興  
三十二、百味齋の没落  
三十三、百味齋の復興  
三十四、百味齋の没落  
三十五、百味齋の復興  
三十六、百味齋の没落  
三十七、百味齋の復興  
三十八、百味齋の没落  
三十九、百味齋の復興  
四十、百味齋の没落  
四十一、百味齋の復興  
四十二、百味齋の没落  
四十三、百味齋の復興  
四十四、百味齋の没落  
四十五、百味齋の復興  
四十六、百味齋の没落  
四十七、百味齋の復興  
四十八、百味齋の没落  
四十九、百味齋の復興  
五十、百味齋の没落

◎百味齋集發行趣旨



337066

913.6M355h

日進文明の時に際し百事の出版俱に盛なる實に今日を以て未  
 曾有とせり特に神史小説に至りての政治文學哲學教育或の歴  
 史或の理學其種に仍て愚意あり其物に因て諷刺あるの著者各  
 々得る趣向に依て巧妙あり蓋し稗史小説の教育の捷徑にして  
 世教に裨益あるの今更だ多言を要すべからん然れども百事日新  
 を競ふの餘り昨非今是の流弊徒らに玉石を混じ爲に當代に著  
 作を空しく筐底に埋むるもの少からん是の一の世に出して衆目  
 に觸れ一の出版保續して永く後世に傳ふるの法なきに由るな  
 り眞に遺憾の至りと云べし今日世上に其積を尊み西鶴を稱美  
 するもの何ぞや往年胡の業盛ならんして名著空しく絶へ  
 しを以なり是に依て本社に茲に百味譚集と題せる一集誌を出

○百味譚集發行趣旨



337066

版し主として明治年間の著述を収め毎月二回は発行して永  
く今代の稗史小説を后世に保存するの法を全ふせんとすその  
載する所の政治にまれ翻譯にまれ滑稽にまれ人情にまれ荷く  
も小説の範圍にある傑作を集め日ならせして百味の譚集坐右  
に備るの趣意なれば第一號の發行を侍て諸君御購求の程希上  
候敬白

因に記す大方の諸彦本書出版の舉を賛し御所藏の珍書佳藉  
を投寄せらるゝことあらば本社に相當代價或は百味譚集を  
送致仕り候間幸ひに貴藏の投與あらんを希ふ

むしる國を由教庵の面をむ  
海を渡る舟の帆を川を渡る舟  
舟の帆を川を渡る舟  
はるかな

版し主として明治年間の著述を収め毎月二回は發行して未  
 今代の神史小説を后世に保存するの法を全ふせんとすその  
 載する所の政治にまれ翻譯にまれ滑稽にまれ人情にまれ奇く  
 る小説の範圍にのる傑作を集め日ならずして百味の讀具坐右  
 に備ふるの趣意が第一號の發行を待て諸君御購求の程希上  
 候敬白  
 因に記す大方の諸君本館出版の事を御以御所察の珍書佳稿  
 を採擇せらるゝことの際は本館の相宜代價或は百味讀具坐  
 送致仕が候願事々に貴館の出版から本館を御購求の程希上

小説の出版

むらさきをむねの面とせ  
 海ももねわらねおのる雲も  
 下流の空にうかぶ雲と  
 ねまひはる舗



圓魂雲井の一瞥目録

第壹章 天下如麻乱英雄世顯	第拾三章 飛田松原二賊挑小夏
第貳章 賢女解良夫欲得二世嗣	第拾四章 壯士斷惡漢暗結赤繩
第參章 材子爲三朋友頻薦三良醫	第拾五章 五八欺次郎藏薦復讐
第肆章 診察得三其度救三助思者	第拾六章 情婦爲三掛次敵探居動
第伍章 詣三祇國會三不計看三佳人	第拾七章 天以三毒手又殺三毒惡人
第陸章 鴛鴦同衾情合日日密	第拾八章 俠客惡三不義放三遂定三
第柒章 離合有時情婦怨三歸鄉	第拾九章 聞三父母死一定三歸三故鄉
第捌章 佳人迫情獨到三天津驛	第廿章 以三百圓金殿村試三曲直
第玖章 材子誤三一言散三千金花	第廿壹章 寡婦解三惡夫頻薦三毒計
第拾章 智識救三壯士警三前途	第廿貳章 節婦自殺千歲遺三芳名
第拾壹章 材子病三神經坐三暗鬼	第廿三章 姉妹愛女等咸死三劍難
第拾貳章 狡子去三故鄉走三東海道	第廿四章 孝子仁助謀報三父母仇

目録終

人情 滄談 蜀魂 雲井の一瞥

東京 松村櫻雨 著

雲井の一瞥

佛門に謂る因縁の善惡ともに巡來る浮世の所業を是非もなく去ればや聖の教化し如く堅き善事の傲ずとも惡事の假にも傲すべからずと實なる哉是は之世に珍しき仇讐討の一言を綴り一冊の草紙となして解出さん 抑徳川家將軍たりしより貳百餘年代の泰平に打續き治に居て乱を忘れざる 武門の警めありといへば弓の袋に納まりて鎧と謂へども又然り歳の始めの床飾り先祖の武功を輝かす鏡餅を祝ふなる門の松が枝幾春も代らずとのみ思ひしも嘉永六年丑の六月亞米利加合衆國の軍艦相模國浦賀の港に來着し船將「ペルリ」氏自國大統領の國書を携え通商貿易の條約を結ばんと意趣を幕府へ通せしより幕府の混雜一形ならず數日評議と凝せしうへ先兎も角も亞米利加の使節に一應面接し事の可決に及んと幕吏數名を浦賀に派出し又幕府には諸侯を召し逐一意見を訪るゝなんぞ國事俄に多端なり扱浦賀にての談判も思ひしより之難澁ならず彼の通商の一條は篤と其筋の評議をへずは何分即答成難きと事情巨細に陳しかり開は又止を得ざるの場合と使節「ペルリ」氏の決答の期限を約し間無く浦賀を抜錨し本國に歸りしが是よりして英佛之云ふも更なり追々各國の軍艦を浦賀に寄せ通商の約を促す事甚だ急なる勢ひなれり幕府に於ても猶豫ならず非常の備へを嚴重にし且つ我國の武威をさへ視さんものと諸侯へ命じ浦賀は固より近海に兵士を繰出し發揚を築き外國我より謂ふを聽かず無法の所置を爲るに及ばゞ只一撃に打碎かんと勇氣の日頃に十倍すれども泰平無事に結きたるに多き諸侯の其中に武具大砲の準備なく狼狽するも趣からず恚して此度の大事件を其儘にして止む時ならねば逐一朝廷に奏

上に及ばれしに百官百司は衆評を凝し終に外艦再び寄れば擧拂ふべきに決議なし天機如何に  
 と窺はれしに敵慮も是を聴させ玉ひ其旨幕府へ達せらる此時にあたり幕府の親藩にては水戸の  
 烈公越前の春嶽侯國守にては島津毛利山内の三諸侯及肥前の閑叟公豫州宇和島の老公なんど朝  
 議を補け幕府を勉まし共に掃蕩の建言せられしかば幕議は何時外國と和議する事に決せしにや  
 其建言も水泡となる而已ならず件の諸侯は幕府の首尾さへ宜しからず甚しきは隠居を命じ又  
 は蟄居の咎めを蒙る幕威の勢ひ熾んにして慷慨義烈の諸侯も攘夷の事に至つては口吻に含  
 みて云ふ者なく這は是時の大老職井伊掃頭直弼主が皆前出にしなりとぞ然るに井伊大老に  
 は櫻田に於て水戸浪士等が爲めに殺害せられしより幕府の武威も大老在世の時と同じからず且  
 つ外艦掃蕩の朝命は屢下り其躊躇りを責問あること嚴かなるに幕吏は内外の多端一朝に迫り  
 其所置に苦しみたるを薩長土の三藩公武の間を周旋し朝命を奉り幕府を鼓舞爲る其が爲めに三  
 藩の勢ひ稍盛んにして積日の如くならず内裏九門の警備さへ三藩に命じられけるにより強倍忠  
 勸を盡し公武御合體の爲め將軍家へは上洛のうへ朝議に與り掃蕩の巧を奏されし度と東西の間  
 を周旋せられし事は三藩ともに同一にて勝り劣りはあらざれども尤も長藩の謂る所始終朝廷  
 の覺目出度に依り幕府は固より藩主にては内心長藩の武威を妬み能き折あらは長藩の失策  
 を看顯し一ト泡ふかせて退けんと有心同意の薩藩さへ密に苦慮を巡らすとは神ならぬ身の長藩  
 は夢にも察知よしあらざれば尙も敵慮を對敵なさんと八幡の宮へ行幸の請を申し薦め續ひて裏  
 夷の御祈願に大和の春日へ幸を再び建白せられしに幕府に於ては其議を忌憚長はん表に精義  
 を唱へ公武の間を周旋なすとも其精意は大いに異存密に天下の浪士を隨陰謀なすとの風説あ  
 り若事なるに及んで勢々しき國家の大事なれば油断は實に大敵なりと朝廷へ讒言を入れ朝と

長藩の間を裂んと種々策容を施すに幕府は固より薩藩さへ共に長藩を誣しけるより衆評終に敵  
 する事能ずと譬への如く朝廷にても長藩を厭ひ思ざる旨ありて文久三年亥の八月十五日長藩の  
 受持なる堺町御門の警備を免せられ當時在京の長藩人は留守居役名と下役の者を殘し其餘は  
 殘らず歸國なすべしとの御達しを蒙り藩人大いに驚きつ、係りの役員派出なし事のやうすを問  
 ひ合すといへども固より朝議の變せしとの而已にて深きやうすの知れざれば止む事を得ず長藩  
 より參朝の取締りとして先達てより在京なせし吉川監物益田右衛門の介を始め同勢大略千餘名  
 餘義なく京師を率き拂ふ其時精義の公卿三條美卿以下六卿の方々も朝議の俄に變せしかば危  
 き位置に居んより時運の再び開かんまで一ト先長州に下らん旨を吉川益田に議せられけるに  
 氏も七卿の御愛苦を深く察し遂に同日の夜半に至り長藩の諸有司の七卿を警護し京洛を跡に  
 の尾の長門の國へぞ下りける此時諸藩の浪士等も暫時望みを失なひて花洛に止まり居んよりと  
 是も同志と語りひて續ひて長門に落ける夫より長藩に於ては朝廷へ歎願を奉り故の如く入  
 京せんと或は大藩の中精義の聽にある國に寄り種々辨解を尽されければ入京の義は聽されず恚  
 て歲月を過す中長州にては諸隊の兵士等事の遅々するを怒り遂に翌年文久三子の七月國を脱し  
 京師洛外に屯集なし尙書を以て朝廷に歎願する事敗回に及ぶも更に御沙汰のあらざるより同  
 月十九日直ちに禁闕へせまり奉り嘆願に及ぶべしと嵯峨山崎伏見にありし兵士ども福原越後國  
 司信濃を大將として隊伍を亂さず押出せしを關東方にはすはや長藩兵士の奴原粗暴の所置に及  
 びしど油断を傲して者どもを御所の構へに入ると時勢の勢々しき掃蕩の事もあるも知れず夫討留よと  
 烈き下知に遂に大戦争となりたるに長はんの兵士等は固より戦争の場敷を踏み猛勇ならぬは無  
 けれども續く新隊のあらざるより總敗軍とはなりしなり是より長藩は朝敵の汚名を蒙り近きに



將軍も上浴し朝敵追討の軍議あるべしとの朝議にて今ハ防長の者として町人百姓に至るまで京大坂へ登る事をへならざるやう最嚴重に幕府より沙汰せしかば長藩にては京師の舉動探索する事不辨にて再び施す手段に尽き困難限り無きと云ふ風説灰に聞えしより今長州は奸臣賊手の實中に陥り一時朝敵の汚名を蒙りしも時運近きに開かざれば止むべき恁なる時に王政の復古するの難きにあらざる我も積年勤王の御爲ならば命だに吝ざりし此時なり率や是より朝廷と幕府との間を探索し事情を委敷長藩へ遷さんものと決心せし精義勇士は誰なるや次の條下を讀みて知らん

第二章 賢女解三良夫一欲得三嗣子

數眼の大和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花の櫻は色よく咲盛て又潔く散る物も道徳を武士のうへに譬へ花は作樂樹人は武士と賦なる哉御國の爲め粉骨細身の苦難を怕れず終に決心なしたる近江の國賀郡尾花川の里に住み家祖傳來の田圃も多ク代々郷士を以て其名を近國の人に知れたる河瀬太宰則ち是なり抑河瀬の人となりは徳厚温純の生質にて祖父の教へを能く節り上を尊敬ひ下を憐れみ義に進んでは財を吝す薄命者流のありとし聞は宜しく之を撫育なし更に徳色を顯さず去ばにや諸藩の浪士等勤王の志しを起し諸一一致せざるより故郷を脱し諸邦を漂泊ひ遂に旅費さへ空懐なり果て復せん術を失ひて河瀬が許に音信來て事實を巨細に物語れけ幾年月も食客れさ又目的を達せんとて立去る者へは賂用の金さへあてて送り遣はずなんど頗る俠氣ある人物ゆゑ芳名速くも長藩の有志の耳底に止まりたる事河瀬も疾に承知なれば突然長州に下れば迎さずまで彼の國の嫌疑もあらじと思ふ物から京攝の事情を探り長州へ下らん準備を急ぎける茲に又河瀬太宰の妻を靜江と呼び唯容顏の宜しき而已か探は眞實心は優しく朝夕夫に侍

井の聲

使るさへ行儀正しく立働くを夥多の奴僕下婢までも教ゆるにはあらざれば勤學院に異喰雀は彼の蒙求を嘲るとか聲の如く何時と無く靜江が行ひ立振舞を自然に見習らふ故なるべし昔忠意に働くにぞ内輪の最も睦まじき目出度宿にも愛世の傲ひ一個叶へん又一個と謂へる外の事ならず靜江が河瀬に嫁せしより五ト歳餘りになりぬれぬれいまだ一子も擧げざるを河瀬はさまでに想はねど靜江は是のみ意に蒐け明暮れ胸を痛免つ、或る時靜江の我夫に向ひ最難かしの事ながら能折りわれればと今日までい謂で過して胸に而已思ふ女の愚痴とやら若れ此れがあらふとも又其時は幾重にも恥詫びをなさんと其賓客のないのを僥倖ひに願ひまうす事こそあれど何時に變りて云ひ出る靜江が辭の不審しさを河瀬は聽て答ふるやう開は何事か知ねども夫婦の中に何にまれ隔意無きこそ堪りなるを今日に限りて汝が言葉斯改めしと如何ぞや咄して聽せね篤聞ん亦愚餘くと胸に而已思ふは體の爲めさへ悪き物から氣を注意して思ひ付ひたる事あれば必ず包含事かへと憤しき答へに靜江は喜悅び开も私がか宿へまいり早五とせを過せしかど不具心者と殊更に教へ諭され朝夕に傳き侍りて何壹個不足としてしもあらざるは嗜しき事の限りなれども唯明暮に欲と而已想ふは子さの事也けり五とせ餘りも運添ひて子を擧げぬは女の不幸爾迎之は千早振る神にも祈り石山の佛に願ひを上げたて身に授けらぬ物ならば一生子無きは樂しみの尠なきばかりか血縁の絶るは家の不幸とやらましてや人の子を持つて還へは立てよと養育ぬる其垂乳腰の添俯した川と云ふ字にねぬる夜は嘸や樂界き事ならんと思ひ餘りしに願ひと世嗣ぎの祀種を諸けん爲め妻女を壹個抱へんやうお許しあれば不束ながら氣象像しく末終まで敵手にせま欲しき其人柄は精一杯に立立まふしてこれ側に置へ出入の多き客の時も勝手座敷の都合も宜く開は兎も角も日頃から子無きを憂さに思ひ居る妻が胸も月の雲晴る、心地に

なりもやせん何ぞを願ひまふす事許しあれと秋深き尾花が末の露はとも妬嫉心のあらずして  
 語るを篤と聞ながら河瀬の片頬に笑みながら何をか云ふと思ひしに子の無き事を心に掛け妾を  
 抱けよと薦むるとも子のある無しと出来不出来は是皆造物者の業にして五年七年添へい迎子無  
 きは世間に多き物復は一ト夜の仇夢を結びて計らず儲けるもあるを想へは汝とてもまだ年若き  
 盛りなれば我に子種のあるなれば年月暮す其中には墾子に限りし事のあるべき抑七去の中に  
 女三年にして子無きは去るべしと云へれと固これ子種は男子にありて女にありと謂ふにあらぬ  
 は獨女の過ちならず爾れば妾を持て迎男に子種は男子にありて女にありと謂ふにあらぬ  
 ば汝とても子無きを左まで憂患事か先夫よりは此程より京師の摸樣も品を代え手を尽しつゝ  
 探索せしかば近日長門へ出立せんと既に決着なせしかば柳馬場(地名なり)の森先生には昨日の  
 夕刻伏見へ出で夜舟に乗りて大坂まで一足先へ下りつゝ、我下るのを彼の地に待ら受け俱に長門  
 へ下らんと約束なせまうへからい遅くも明日の午後から此地を發足するにより旅の準備を疾く  
 急ぎぬ固より忍びの羈旅なれば奴をも運ぬを能しとせん森先生と兩個連れ膝栗毛にて船路を往  
 けの道中還つて意易く彼の地へ下りて用向は強て手間取事にあらぬば年立ち飯り正月の中旬頃  
 には歸宅せん是より暮に差遣れば何くれ事の繁ぎなれども開は咸汝が擔當けて歸り来る日を待  
 こそよけれと聞て靜江は打驚き開は又餘り至急にて何から申して宜しいやら胸蕪きて前後も知  
 れず如何なる急ぎ御用か知らぬぞ此の寒空の御旅行は日頃から来て御持病のあるのに體の御爲  
 には宜しくあるまいとお察じまうせは春まで御待ち遊ばせと留むる辭を理當もと思はざるには  
 あらぬぞも折角聞得し京師の舉動を後れて長門の山口へ報知するも六日の菖蒲十日の菊となる  
 時は有司の者には皆指さるばかりか我と我意に愧る所あれば斯首途の場に臨み婦女子の情に

惹るしは噫我ながら愚痴なりきと靜江に向ひ調る、通り持病もあり来る春暖氣に起きて兼而下  
 向の意なりしも此年の冬は去年と代り身体も餘程健康なり且ッ先生も一所ゆる爾迄苦勞にせ  
 らずとも能く又留守中は壁固に守り苦我行先を問ふ人ありとも長門へ下向せしなんぞ假初にも實  
 情を語るべからず開の外なからず方今は長州加磨の者といへば事情の有無は糾さずして縛して  
 是を獄屋に繋ぎ無名に有志を殺害せず幕府の粗暴あればなり故に其處らを注意して殊更心を付  
 け置ずは後悔する事あるべしと語る折しも冬の日の哺脚短き彼是時響くは三井の暮の鐘諸行無  
 情に吹きつくる比叡山風の雪混り今宵は殊に肌寒き夜飯を仕舞何時より早く寝みて留守の事心  
 得なかせん其爲に寝の語をなさばやと其夜を添寝の余波とは神なからぬ身の二個ども知るよ  
 しなければ朝疾く起き靜江は急ぐ旅仕度に速くも午後になりしかい多くの奴婢を始免として皆  
 夫々へ留守中の所用を巨細に教へ置き妻の靜江は兼而より男魂ある質ゆえ胸には餘る別れの  
 涙も人目繁きに露だも見せず見送る門の枯柳まねけは何時か逢阪の關路を差して送り行く奴僕  
 も此所に別れを告げかへるを暫時見返りて河瀬は假に世を潜ふ隠れ簀笠見輕の裝束伏見を差し  
 て急ぎ行く夫より河瀬は長門に下り幾程も無く飯り來て幕吏が爲めに捕へられ遂に憤死をする  
 に及び靜江も自殺なすに至る最も哀れなものの語りは追々に本章に記すべし此一段は文久三年亥  
 の十一月より元治元年の春までの事なりけり是よりは靜江がいまだ産生ざりし往古其父親の咄  
 しに移り因果應報の巡々で靜江は素より妹珠も變死をなす二拾八年の長もの語り序次に住境  
 に入りぬべし

第 三 章 材子爲三朋友頻薦三良醫  
 笹々浪や志賀の都の遺跡ある近江の國滋賀郡大津の驛の東海道宿中にて屈指の大宿なるがゆ

江國一圓より都へ入るの咽喉なり你れば日々に大津より運送する米穀は更なり布晒しの類は是を牛車又は車力にて逢坂の關を打越え運ぶ事幾莫と云ふ限りを知らず又は湖水より産出する魚類も漁獵の所の六七部は都に送るを以て大津の盛んなる事は他の驛路も及ばずと云ふ尤も此驛にて第一賑しきを濱通りにして隨つて巨商も雲を並べたり其濱通りの湊町に殿村治左衛門といへる商人あり伊勢近江兩國の大小名へ金圓を貸附ける事を家業とし餘多の藏元をなすをもて其が貸附の利金にハ諸侯方より米穀を引き受け是を水車に掛け白米に精製し西京の米屋仲買に送るを側の商法とするがゆゑ頭手管も隨つて多く召抱に最賑はしく暮しけり然るに主翁治左衛門に一子あり名を治三郎と呼び其年廿四歳の壯者なれを憐る大家に生立ちし壹個男子の事なれハ其父母は限より大事に云ふが隨意々々育生しが反つて其身の不幸にて兎角に病弱がちにして他の若者のやうならず眼前に老柳の花はあれども一朶だにも手折りト事なく樹しも病弱の怠りたる日は窓垂れ雨し書齋にありて書籍を友に日免も暮暮を樂しむとなす内氣のゆるにか出入の者の誰彼が訪ひ音信て春の日は石山または花園の櫻見なんどと驚先るも辭退云ふて隨はず固より人の蘆る毎に治左衛門は云ふも更なり兒にまた甘き母親之側から俱に薦むれど外面に出るを嫌ふがゆゑに氣を腦まてぞ至りけり茲に又同じ濱道り米屋前に穀物仲買を活計とせし丸屋定吉の長男に定助と云ふ者あり親定吉の存生中より殿村許立入て無二の出入りにありしかば今定助が繼代となりても續ひて出入りを許されて日に幾度と無く往來しつ此定助も治三郎と同年輩の壯者なれを世才に賢く立働き商法先を廻りても治三郎まじりの世間咄を程能くなして賣物やまた買物の直組さへ意外に廉く算盤の玉さかならぬ儲けあれば父定吉が眼鏡にて賞

ちふて置きし女房のね松と二個一生懸命に稼に追付く食乏なしと世の諺にさへ謂ふが如く餘る世帯となりしかば壯年なれど仲間にも下目に觀られぬ氣轉の象にて治三郎とは身のうへに甲乙なきにはあらざるも意に隔ぬ友垣なれば兼ては内氣の治三郎さへ彼が訪ひ來て物語り爲る日は笑ひを催して面白そふに見ゆるに治左衛門さへ是を喜こび少し意の鬱氣しとて寢る事在は定助を呼びては侍勤を頼みなせして内輪の者と異ならぬ執しき中ゆゑ定助が商法筋にて金圓の俄に入用なる時は何時でも其間を涉し遣はし々意の眞を顯し年日變らず音信ける憐りし程に治三郎ハ歳頃身体の虛弱なるに此頃風邪の熱に犯され一時の餘程の危篤なしも藥劑看護の手配の宜いので日ならず全治いせしものも胃熱の爲免に肺肝を強く痛免しものなるか夫より後は俗に云ふ勞症の容体に轉じけん人に對しても云ふ事を厭ふてなるべし一ト間に籠り垂込めてのみ過さず二親の心配一ト形ならず又定助も兼てより恩を受けぬる出入先夫のみならず治三郎とは交誼厚き中なれば家業をさへも休業して戀々を勵まし朝夕に氣を惹き立んと今日もまた音信來たり治左衛門夫婦が居間に通れバ二個は悦び定さん今日の日例時より出が餘り遅いゆゑ家婦も俱に心配して小僧を向ひに遣りましたが近い道でも道草を採るのが小僧の持前で今だに飯つて來ませんが一所に家裡へ出のかへ夫はさふでも跡のを先定さんに茶を煎出しなれ菓子子は 日は無しなのか昨日一度伏水まで宜いれ便りがありましたで駿河屋の羔煉を取つて置きましたよ夫は宜かつた夫じやア其羔煉を此所へれ出しな併し定さんは左組で菓子御用がなぬのだらう何に私のは宮本流で酒と餅との兩刀を遣ひますから駿河屋のと聞いた日には是も唯では通しませんハア、オホ、オホ、是は之と片寄ないで總て何事にも商人ハ兩刀を用ひるのが金儲けの種になる事があるもので定さん杯は黒用だから其邊は退さないのだ實に感心な者サ

へ、いふ致しまして時に若旦那の御心持は今朝は如何で入つしやりますかどふも相變らずにやア入りませう嘸定さんを待て居ます事でせうか早く往て下さりませ今日若旦那の御病氣を全快させん事に就き若輩ながら氣附の筋を逐一旦那に申陳べん扱今朝之何時より疾起き出て川岸通りを用達しながら歸路市場で見付し中鯉は此程稀なる肥ものにて味ひさこそ思ひ升ゆゑ取て參つてお勝手の生洲へ放して置ましたを洗ひに料理をして貰ひ若旦那へお上申しお伽を

乞ながら定助も一徳頂戴致しませう是れ定さん毎事ながら大層氣發たれ見舞者親父も仲間に入て貰はん其れ兎も角も唯今の咄しをどふの聞せて下さいア、老翁の至急なのに困つた物じやど打笑へん定助小膝を進まして氣附と申し上げ升も外の事でふりませんね案じ申す若旦那の病ひは日に増し手重く見え土地の醫師も手を尽し治療に油断はありませまひが現が見えぬ全快は十に九個覺束ない先を案じる素人了簡さふして見ると念の爲め醫者を代るも當座の氣轉隨分高手の御醫者でも多くの中の時として見立て違ひもある物なれば今のお醫者に咄しをなすつて違つた方に願つて見たなら療治も變つて宜ろしからんと聽て合點く治左衛門私も折角其事を思はざるにあらねども能い醫者さまを思ひ付ねば遂今日までも延した旨儀定先ておまへは良

第四章 診察 得共度一救二助 患者一

今定助が物語る京都の良醫大村達吉といへるは祖先より連綿たる醫者の家にて達吉も業を幼き頃より父に學び稍漢法の奥旨を辨へ其名は人に知られしかど當時蘭法の療治長崎に開け初めし

を遠吉疾く是を知り折節彼地に下り合して其の療養を受けたる者より聽く度毎に漢法より緯威密際にして藥功尤も著るければ下りて療治を學んど彼地の摸樣を問ひ試に此程まで蘭人にて妙手の醫師の舶來せしかど今は本國へ歸りしなりされど此醫師に附き蘭法の醫業を學びし人僅に二名ありて各終に彼法を熟達せり其人々には佐藤尙中青木周彌緒方洪庵の三名にて佐藤は生國下総に業を開き青木も生國長門の萩に開業し緒方は大坂にありて是も盛んに門戸を張り其名も稍聞えんと爲る由を聞傳に達吉の喜悅大形ならず(但し我國現今西洋醫方盛んに行はるしも彼の三名の醫師が始めて長崎に至り蘭國の醫師「ヒェラント」に學びしを嚆矢と謂ふべし此事本文に關らざるといへども未だ醫師の洋法を尽く悪口せし往古のさまを移せしかば是も又一興とならんかし)我蘭法を志させども孰の師に附き學びて能けんとも人に問ひつ考へるに佐藤緒方は外療を専門とし青木の内療を得意として這を専門と爲るよしなり素より達吉も内療をこそ好むなれ長門に下り青木に附き學ぶを宜と決心せしかば此事父某に篤謀り遂長門に下り青木の塾に入學する事五ヶ年の間日夜も分ず勉強なし京師に販りて開業せしに其頃京都廣しど雖も大村の外誰壹個西洋治療を爲る者なければ仲間の漢家いふも更なり頑固の輩は是を罵詈一時の得意の病家さへ門戸に跡を絶断しかど適々來りて治療を乞ふ患者の全快するを聞き始めの程は罵詈し病家も今の基に販り患者日に増し出入り烈しくまた諸國より入學の書生も多くなるに附けいまは京師の醫師にて肩を並ぶる者さへ無く最も盛んな評判を兼てよりして定助の聞知るゆゑに治左衛門に前の順序を物語り摘んで咄しまふしても随分長い効能書笑ひながらの輕口治左衛門も笑壺に入りそふ謂ふ妙手のお醫者があると聽ひては暫時の間でも猶豫なすべき場合ならねばお出をどうか願ひたい其先生をね招きまふす使ひを速く遣たいにも使

者振慈き手管では困つた物と小首を捻り考へ居るに定助の其お使ひは甲乙と御心配に及びませぬ私如き若輩が氣附を早速御承知を下さるるに面目なれば是から直に参りませやう實に手堅いお家裡では古風計りを喜んで洋流醫者を薦めませすと何時もお首尾が悪いのに流石に旦那は感心なり先此辭を若旦那にも聞かせて置て参りませやうと治三郎が居間に至り始終の事を語りしに治三郎も定助が實義に感じ頼むとの返辭と聞ひて再また家主の所へ立ち戻れば治左衛門は金三兩を紙に載せ是は駕籠やら何かの手當不足の所の跡でまた入用丈は支出として先此金をと差出すを定助金を手にも載せ僅か京都まで三里の道程餘慶なものが入るでは無し頂戴せすとも夫だけは奉公するのが當然なりと返せば家主も受取らず是非と謂れてせん術なく金を戴き定助の其儘此所を飛び以だし追分道で達者の駕籠を頼んで道を急ぎつ、彼の有名なる大村の屋敷へこそは至りけり此時大村達吉の住居の京都柳馬場二條下りし西側にて最廣やかなる屋敷の構へ今定助が来りし頃は道を急ぎし事なれど正午まへゆゑ玄關より次の間かけて病人と藥取りどが幾人とも威順指にて先生の前に進みて診察を願ふもあれば藥局で藥劑を貰ふ真中なれば彼の定吉も名を出し其順指を待受けたる漸く一時と覺し頃順番なりとて呼るゝにぞ取次らしき書生に向ひ來意の趣き云々と陳れば由を取次けん先此方へと診察所へ案内されて打連れぬ大村病者の容体を委しく聞けて扱云ふやう貴所が云はる、如きなれば随分手重き容体なれどまだ壯年の事なれば療治に心と尽さんには全快せんとも云はれまじ遠路の所へ態々と訪れしゆゑ兎も角も往きて診察致すべし幸ひ今日の後刻より山楳の宮へ参上されば其所より直に殿村へお見舞致すことにせんと疾くも承知ありしかば定助のよろこび譬へんやう無く天へも昇る心地にて早速承知の禮を陳べまじ取次に何や彼や手管をくわしく聞合せ大津へかへり殿村夫婦へ逐

一様子を語りけるに定助が骨折を賣し俄に座敷の掃除をなし酒肴を調なへ先生の來るをゐろしと待受けたり恠て大村達吉は其日の五時と覺し頃山科より大津にまはり殿村が家裡にきたり治三郎が容体を篤と診察なして、設けの座敷に打ち通れば想ふに増たる豪商の結構床に掛たる軸物を始め飾物花瓶は云ふも更なり其所に陳列し茶器の類或は支那物日本古物一品として凡俗ならず時に家主の治左衛門は定助諸とも大村に病者の容体先生の御見込如何と窺ふにそ今篤診察仕るふ是迄觀療し醫者達はなんど謂れて居るのは知ぬと今達吉が考へには全く肺症の病ひにて御家でいへる勞症なれば随分大事に致されよ併し是より療治のまやうでまだ手後れと謂ふにあらねば全快の日を見る事あるべし附ひては今日より藥劑を調合なして進ずべしと聞て喜こぶ治左衛門夫婦今大村がト言は地獄で佛に邂逅といふ譬への如く喜びつ、手厚く酒肴の設けをなし夫婦は固より定助も同じ宴筵に列なりて饗應等閑りなかりけり恠て大村先生も主翁振の深切なるを挨拶ひ馳て歸京に及ばれしが名に負ふ豪家の事なれに當座の謝禮も夫々に往渡りたる計らひゆゑ京都よりは道里の隔はあれ先醒も月の中には幾度か見舞に音信られければ流石に手重き客体なりしも追々全治に趣しは殿村一家の孝福なるべし

等五章

詣三祇園會不計看住人

却説殿村治三郎は加養手厚々其歳は暮て向ふる春景色軒端の梅も雷を断り笑ひ初免たる庭の面谷の戸出て鶯も朝な夕なに音信て里賑しき如月の春も過半に成にけり或時大村先生は治三郎に謂る、には固此病癘の原因を申さは氣鬱せしより起りしものも持薬は尤も専要なれども側ら意を慰む時は藥の利目は速かなり先斯打俯して居んより空長閑なる日和には前裁なんぞを遊歩なしましたは駕籠にて遠里を歩行は殊更藥りなり兎角物事氣に掛ず山水花月に眼を喜ばせば全

快するの速かなれば怠らずして勉められよと教へを受る。側より主翁も進みて先生の仰の如く存ずるゆゑ行歩がてらに此程より屋敷内でも逍遙のが治養にならふと薦めても薩張夫を致ぬに困り升ると云ふを打聞き大村勘し小首を捻りさふ謂ふ譯なら御子息には京都へ出来て養生せられよ木屋町あたりの川附に能き貸席のある事なれば夫に咄しを極るが宜しい第一京都は當地と變り風土の工合は云ふも更なり空氣流通も適度に川へは氣鬱の症には妙而已ならず朝夕見舞に近ければ歩行まながら拙宅へお運びあれは夫にても聊か氣鬱を散すべしと薦めに病者は喜びて先木屋町の貸席へ出養生とはなりに見憑て一日二日を過ぎ治三郎は番頭手管を引き連れて彼木屋町にて奇麗なる座敷を借受け滞留せり去れば反て多人敷より羨炊きに意利ひたる奴僕と小僧壹個で事足ば送り來りし番頭手管は残らず大津へ飯しけり茲に又定助は治三郎が出養生せしを喜こび固より送り來りしが家業の都合もある事ゆゑ長く留まる譯にも往ねば四五日ぶりに尋ね來て或一泊または二泊と間を見合せては音信ける兼てより定助と治三郎とは相交なるゆゑ親兩個より頼依に何まれ悴が好む事ならぬの入るのは厭はぬかられまへの意で能いやうに計らひ吳どの趣もある事なれば殊更に注意けて氣の晴る趣向を密に考へける實に西京の木屋町となん云へる所の住居の裏表に流れを受けり表は高瀬川の水清く裏手に負ふ加茂川なり彼の貸席の二階より首を北に巡らせば叡山の峯高く一ト根杉も打霞り麓に近く見ゆるの若玉寺の樹立隙無く岡崎の里神樂の岡黒谷吉清水の森山又山の峯嶺逢阪山や白川の流れは白く布圍着て寐たる姿の東山椿春の日の長樂寺花の吹雪に差と云ふ其傘の花頂山祇園に續く八阪の塔清水寺は木屋町より東南の間に觀へ眼下に渉せる三條の橋の往來の賑しき實や三都の其が中にて尤も名所に富りしは西京をこそ第一ともふべは花の色競へ二條新地や先計町風に傳

へる絲竹の調べも絶えず聞かされて雅俗を交し木屋町に出養生する治三郎は我家の奥に閉籠り居し時とい事變り朝疾く起ては山水に睡氣を覺し定助が強ひて運出し名所古跡を案内するを始先の程と三度に度度は断りしも序次に病ひが怠れ之内居するより散步を好み言葉敵の定助が大津へ販りて訪ひ來るを待ては俱に運動に歩行をこよ無き樂しみと爲るに隨ひ此年の夏の初旬に至りし頃は色艶直り肉付きが稍健康になりしをば兩親の喜び大方ならず又治三郎も今之疾家に販りて父母にも長らくものををれもはせし不孝の罪を詫びなんと其由巨細に書認め便りに付けてをくりしかば定助間無く音信來て此程手紙のまいりし時坂宅の旨を治三郎よりまふし越しが定助の此年は去年の夏どちが暑さが殊に烈しいから寧ろ冷氣しい西京に居て夏を過してかへるが能は西京とかかり湖水のそばでも大津と空氣が能く無いと日外大村先生から聞かすふしたとさへあればれまへが西京へ出の時悉くはなして吳よとの御兩親の思召しゆゑ貴君も其氣で冷風の吹き來る頃まで是からは氣の保養をなさるが肝心先口上は件の如しと跡は何時もの滑聲咄しに其夜の俱に明しけり茲にまた京都上京の総氏神と齊き祭る祇園牛頭天皇の祭禮は例年水無月七日より十四日に至るの大祭にて是を祇園會と唱へける氏子の町々より山鉾を練出すに長刀鉾と云ふを第一番に惹き出す抑此鉾に立たる長刀は三條小鍛冶宗近の銘作なりと云ひ傳其外數拾本の鉾に至るも或は結構或は銘作執劣りはわらざりとぞ其の中にも祇園町は彼の山鉾を出さずして踊り屋臺を幾本か出すを古例とする由は此地固より花街なれば多くの藝妓あるがゆゑに其容顏の美くしさを撰みて是を踊子とし毎年趣向に新規を競ひ衣裳は名に負ふ京染めにて美を盡さずと云ふ事なければ凡そ祭りの前ひろより踊り屋臺の番組と其が踊り子の名まへを書きたる四五枚續きの摺物を手廣に諸方へ配布するにぞ山鉾よりも踊り屋臺を見物せんと諸

方より集る人の山を傲し最賑はへる祭禮なりけり  
 却説祇園の祭禮も十三四日の日取となり四條通りの賑はひは最目覺しきに今年は藝妓屋臺も例  
 年より其數さへも多ければ群集をなせる評判に彼の定助も木屋町の治三郎許音信れて藝子の踊  
 りを見物せんと午哺りより二個は打連れ道丁近き祇園に詣で表門より八坂の方を右の大路へ歩  
 行往くに今しも屋臺を繰込来て踊も既に始まりたる能い最中ゆゑ二個は喜び見物するに都合  
 能き軒場を暫時イみたり折しも練來る踊の番組或は地唱の高唱なる玉川布晒の手を盡し或は意  
 氣な江戸唱に白き肌重を顯すあり唯觀る今日の踊妓に美人ならぬは一個も無く海棠雨に臨るあ  
 れば桃花春風に笑ふあり神女羅浮に月を踏めば西施湖邊の揚柳に眠る其機風致更に風流ならざ  
 る無し實に深山樹に咲く花の大津女郎に競べては雪か墨かは白絲の寄るとは無しに二個とも屋  
 臺間近く進みける此時踊る一個の美人年紀の十か廿歳にはまだ奈良阪の手柏葉や調ふる絲に  
 舞ふ胡蝶露になまめく扇の手拍子一ト際目立つ容貌に今見る男の魂は皆中空に漂泊ふめり  
 ては堅き治三郎も憚る乙女を一目して何しに意の狂はざるべき想はず持し扇を落すを眼速く觀  
 て取る定助さへ俱に意も忘然たり憚て夫より序次に練來る屋臺の數々看尽して涼風そよ吹く夕  
 間暮貸座敷まで飯りしが治三郎は祇園にて見し踊子の面影が眼に遮りて忘却す想ひ面に顯れて  
 物思はしきを見取る定助もし一若旦那あなたは動かなされましたか今日は先刻の飯りよりもの  
 想はしき其御様子はまだやつと丹精して漸々全快したものをまた愚禮出しては六日の萬蒲幸ひ  
 今日祇園會なれば勘しつた浮れなさいやと云ふは最前治三郎が扇を落せし素振と云ひ體氣  
 であるの那の藝妓に想ひを掛し物ならんと察するゆゑの當座の氣轉申し若旦那の者には兎も

角も此定助に體氣程を案じなさる因縁を證明ないとい聞へませんナニ夫りやア尤もな譯サ男  
 と生れて出た甲斐にやアあんな美人の二個や三個自由にするが出来ないやうじやア申せば智恵  
 の無い譯サ定さんねまへは何を云ふのか私は女の事や何かは毫毛も案じはまないのでヨ不知を  
 断ちやアいけません其機に包み隠さないで胸にある事判然と兎に角證明して見なさいませ僕が  
 察しが齟齬はしまひと星を差れて打笑ひ實はねまへの察しの通り随分那の妓は能おやアないか  
 ハ、ハ、ハ、漸々尻尾が顯れます時に旦那夫なら夫で案じる事はありませんせ向ふは知れた  
 商賈人金さへ出せば咄しが分りどふでも自由になる身体是が大家の深窓どが云へハ手輕く出来  
 ないと我慢も無理から爲るにもせよ矢先の見れた祇園の藝妓此所にて物を想はんより快氣悦  
 宴を兼帯で今から直に繰り出しませやう定さん夫の夫として旦那の名前がわからないねへ其  
 所に女材がありますものか祇園祭りの二番目は大略こふと狂言のすぢは其時承知してあふぐ團  
 扇にかき付けし近江屋の秀雅と確正に觀認めておきましたア、名前は知れて居からるよいが  
 落ち着く茶屋いぢふしませしやうか矢張大和橋の柳家かイヤ、那の柳家は親父が折々樺門な  
 んぞで往く家ゆる我家へ知れるは必定なれば私は知らない茶屋でも能ひからませへの懸念な所  
 にまやうア、なる程夫もまふか併しな若旦那をふせ遊びと極つた日にやアル茶屋は何か  
 不自由だから井筒屋へまいるやしやう井筒屋の家へは五六度得意先の振舞で参つた事ありま  
 せからど咄し極つて二個俱燈火頃より木屋町を出て急げは東の間に眞葛茹るて祇園の通り彼  
 有名なる井筒屋に揚れば夫と定助を見知りの仲居は走り出チャア大津の旦那さん能ふこそ  
 出なされましたオヤね連様も御機嫌能ふサア二階へぞ仲居は伴ひ風入れの能き高樓へ二個も  
 俱に登りけり憚て仲居は定助を次の一ト室に招きつゝ藝妓の名差しや酒肴の注文聞くと其儘二

階より降んとするをよ、と呼び留め今日案内せし那の方は大津の濱通では豪家にて殿治と云へる旦那なれば随分此方の客にして爲免にならふと思ふゆゑ其氣で宜しく頼み申すと聞ひて仲居は打合點能ふマアに連れ下さりました孰れ様でも變り無く大事に致そは眞伽なれども又格別の汚客柄心を附けて龜末の無以やう何にも氣轉を利しましやうふして旦那に煤酌れた妓名差しをなつて下さしナ夫は先刻もそふ謂つたソレ近江屋の秀鶴だヨ秀鶴さんは外の妓さんど變つて甚し氣むづかしので何時でも客が結局には怒憤で跡で困りませがと小首を捻り考しが併だんなが美貌いのに秀鶴さんも思ひしよりも手輕に諾と云ふかも知れねは唯今直に知らせませやうそふして貴君は何さんでしたか一所に知らし成さいませしなホ、今日だんなの取巻故色氣は薩張大禁物夫より酒を早くえねへな、唯今と入り變り運女着も座付きの昆布に包む辻裏の文句も君をまつと云ふ意の裏ぞ樂もしき折から知らせし申乙の藝妓と俱に揚り来る彼の秀鶴はる躍の姿を其儘に仲居が指圖に治三郎が隣りに座居挨拶も辞少く奥床しきは都育ちの常ながら最前遠眼に觀し時さへ胸蕪さしを眼の邊り見れば彌増戀風の颯吹き來るゑんの際卷上簾に軒高く掛し忍ぶの露の間も恁る美貌佳唄女と飯寐の夢を結すばんには實千金ものかはと心を懸す此所では座付きに彈く都の四季唄ひ廻しの由此も愚痴と恍惚をこそ雜て浮れ調子の三下り追々巡る盃に酔ひの潤環りて定助は日頃嗜む隠し藝ゆきの調べに堪さを忘れ最さんさめく座敷の賑はひ折を見て取る仲間の氣轉耳に口寄せ秀鶴に聞かせ合點く笑ひの顔容仲間夫と定助に能い返辭と私語つ、彼是する間に夏の夜のそや四ッ過ぎか九ッの鐘を乘りに此方へと案内まられて六疊の離れ小席は今夜の伏床に望み叶ひて治三郎は愉快に思ふ蚊帳の裏うちや床しき秀鶴も固より美男の治三郎を見初し時より憎からず想ふものから打付

けに契りし事が未終に身に振り掛る惡縁となるとは夢にも白明來る短き夏の後朝を兩個は俱に怨むなるべし

第七章

離合有時 情婦怨歸郷

明る説しき桂氣の神なら無くに秀鶴と治三郎とは筒井筒振分け髪に往古より結びし縁にあらねども一ト夜契りて兼言に暫時が隙も離れかね今朝ハ飯さじ歸らじと留て止まる意、裏は切ならぬにはあらざれどまた定助の手前もあれは晩には確然との約束を互になして其朝十時と覺し頃をひに定助諸とも木屋町の貸座敷へぞ飯りけり朝寐髪我は梳し馨しき妹が手枕ふれてしど古歌の意を誠なる兼ては堅き治三郎も離れて間無き其日の午後所用多しと定助は辭去て大津に飯りしに今は氣を配く者もなければ小僧を井筒へ走らまて彼の秀鶴を呼び向へ終日遊び暮しつ、幾日重ねて秀鶴も宿へは更に飯もせず側を離れず治三郎が座右の用事を深切に足すも意の誠より爲る事見えて愛らしき又或時は秀鶴を伴て糺の納涼や宇治の螢を見物に往てハ彼地の萬碧樓に二日三日も滞留なし遊ぶに月日も速く過ぎゆき頃しも八月の下旬秋風そよ吹く頃としなれと飽ぬ別れと治三郎は大津に飯る事をさへ忘れし如く見えしかば折々尋ねる定助も始め薦めて遊興しを後悔すれどもせん方無く井筒の拂ひその外にて散財するさへ追々に多分の金の入用を繰廻してハ治三郎に送り來せしが今ハはや定助獨の工面では取手も付ぬに常感し去迎是を證明に治左工門には相談出來ず這は無理からでも治三郎を連れて歸るが上分別と秀鶴仲居の居ぬ間を見ては歸宅を促せども馬耳東風で薩張り開かず困つた埋屈と定助は漸やく胸に浮んたる工風と謂ふも外ならず或日殿村に至りしに治左工門は公用ありて代官不原の屋敷に至り幸ひ留守の事なれば能い折からと四方山の咄に附けて治三郎も固の身体に直つて見れば長く彼地に置くよ



りもど一ト日も疾く戻しあつて旦那もあなたも御苦勞になすつた事を忘れ草若旦那を留守居にして丁度時候も能い時なれば越川あたりへ御遊歩をなすつて鶴飼や能登川の私月でも御覽なさいまし若又若旦那も御本復にて木屋町邊の小意氣な場所へ長く遊んで御在では男の美貌の優しので還つて御爲めに能く無いと案じ申すも不風流のやうだが何れも事の出来な中に疾く御戻しなさいましと聞ひて笑つ、母親は實定をいながら云ひの通り私も久しく逢ないから明日にも此地へ飯をやらうにふか都台をい下さいなさい仰やれ直の事明日とは謂はず今からでも直に西京へお迎えに参りますのは厭ひませんが日頃からして若旦那今日は迎に参りましたサア御一所に戯談を云ので眞顔な明日でもまた戯談かどれ想ひなすつて一所に出来なから無いサア困りますら手紙を頂戴致してまいりませう又晩程に紙手紙を頂戴なすひますと返ると聞ひて治左衛門も公用果て歸宅せしかと妻の琴と定助が云々謂ふて飯りしと一部始終を語るを聴きア、定助は年壯なれども中々利功な男じゃアはへ未だまへにも咄しとせぬが治三郎の祇園會頃より秀鶴とか云ふ祇園新地の藝妓に馴染先繁々と遊ぶ様子之風の便りに聞ひて居たれどあの兒の病病は癖が常の癖よりして肺病とまでなつたゆゑ掛位遊蕩をせぬが治三郎の時と謂ふてあらふと取越苦勞併餘り捨て置ては還つて爲先になるまへから手紙を認め定助を迎ひに遣るが上分別そふでは無いかと相談も酔ひ辛ひと噛み分けし夫婦の意を床しけれ恠て又定助と其朝治左衛門より手紙を受け取り木屋町に至りつ、母親よりの口上と手紙を出し是非今日之れ供を致し飯らんと談話を聞ひて治三郎は打驚のぬにあらねども固より親に孝心厚き生質なれば秀鶴と離る、事の本意なきも想ひ直して諸共に歸宅すべしと聞ひて一ト間に打附しつ、忍び音になく秀つるも兼ては何時か分る、事のあると想ひいせし物の今を限りに

戀人と引分れては又何時が嬉しき逢瀬のあるべきぞこゝ愛としき歎きせんには契り初めざる往古こそ中々心易かるを親御の仰せと謂ひながら壹個勝手に飯るとは氣強はれ方と云はへに謂ふぬに胸を焦しけり治三郎の秀つるが歎き泣く音を察しつ、一ト間に至りコレ秀つる響へ大津へ飯れは逆再び逢ぬと云ふではあるまじく遠くもあらぬ大津と此地月の中には二度三度必ず逢ひに来る事の難きにあらぬ事なるを死別れでも爲るやうに泣いて之私も氣になるから暫時の離れに機嫌を直し鳥渡一杯催ふさん此方へお出と定助も俱に慰む離盃の酒盛折から井筒の仲居さへ立悦ひと送り物其所あたりへ陳列つ、お近中につきつと又お出を待申し升杯と何時の紋切形鬼角する内日も哺て七ツ時にも間近なれいと促去立て治三郎を駕籠に乗せつ、定助と奴僕小僧に至るまで彼の貸席を立ち出れい秀はる仲居も跡に次ぎ三條通りを大層のあなたの方まで見送りける恠て治三郎は其夕刻恙もあらで歸宅せしに治左衛門夫婦は云ふも更なり親族別家の甲乙も治三郎が春の頃と打て變つて色艶よく健康なるに喜び逢ひ先悦宴を開きける夫より病中見舞呉れたる人々に赤飯を配り或は招きて馳走する杯彼是する中一ト月ばかり遠夢の間に過ゆしに彼の秀つるは治三郎と堅く契りし旨の葉と忘れぬことを別れてより文章の便りを定助に頼みて幾度かなせしかと一ト度返辭を送りしのみにて其後便のあらざる之意變りか増花の出来なならんと秀つるは獨胸のみ焦せしが治三郎も都の夢を忘れしどにあらねども歸宅の彼は病中と違つて内外の要用繁く是まで物を思ひせし親の心を慰めんと一ト際勉強するのみならず費用ならでは假初にも表へ出る事さへせざれば時節を待て其中に秀つるをしも逢ひ見んと送る月日に關守なく早其年も時雨降る神無月になりし頃定助が妻お松と男子を擧げ親子産後の日立も能ければ其喜び云はんやうなく親定助の一字を取り定三となん名けつ、夫婦は掌裏の玉の如く愛

いつくしむ一家の賑ひを聞傳は殿村夫婦も早く治三郎に嫁取りして能ひ初孫を設けなば樂しからむと思ふ物から親族懇意の人々へ此事頻りに委ねつゝ、良縁をなん急ぎける

第 八 章 佳人迫情獨到大津驛

恁て殿村にて治三郎が花嫁を頻りに探し索むるに壹個周旋する者あり或日殿村許尋ね來て嫁の咄しに及びける此大津より程遠からぬ同國神崎郡近藤村に番場忠右工門といへる者あり這は國産の布晒を鬻ぐを以て商業とし家には多くの手管を遣ひ毎年春の始免より江戸大坂は云ふも更なり中國九州の果てまでも日々に荷物を運搬する事幾百箇と限りなき恁る手廣の商人も又江戸大坂にも出店ありて其繁昌は云はん方なく神崎郡の中にては一と云はれて二ト下らぬ富貴の間に高かるのみが家長忠右工門は子福者にて男女許多の子を持てり开が中にて第三女なるを小雪と呼び今年十九の花の姿に其心ばえ最も優しく田舎とは謂へ大家の事ゆゑ絲竹其他の師匠に都で名ある人と呼び寄せ教えものから女の道は何壹箇だに不足なき生質伶俐の小雪が事を聞き傳えては諸方より早くよりして縁談を云ひ越す平の多けれとも兎角に長し短かしのて頼に相談整さりしが所謂の神の業なるか大津で有名殿村にて嫁を索すと云ふを聞き番場の方より仲人と依頼で今日しも縁談を云ひ込み來るは殿村にも嫁の身元近江にて一二を争ふ豪家とひ嫁子の器量も媒酌人の十八ならぬ評判を灰に聞し事さへあれは治三郎にも云ひ聞かせ親族中にも談合せしに咸喜びて縁組を薦めるものから相談の思ひしよりも疾く纏まり番場の方へ其よし返辭に及びけり恁て其年十二月に至り小雪は殿村へ興入せしに素より顔容の宜しきのみか親に仕えて優まけられ治三郎との夫婦の中も最睦しきに兩親の喜ひさこそと知れけり茲に又秀つるは斯なりしと露程も且て知る由わらざれば唯旦暮に彼方の空を打詠めて泣音さへ袖に隠

して今日と過ぎ昨日と暮して治三郎が音信をのみ待くらせど千束の文章の返り辭一度せし限り其後は絶て返辭のあらざれば態と飛脚を仕立つし兼て知りたる定助の家へ遣はし容子を聞けど悉しき事の辭傳せず且那は又も御病氣も急に返辭も出來ぬと云ふ素氣無き返辭を眞と思は早く全快あるやうにと清水寺の觀音に懇絶なして祈誓を掛け歩行を運ぶ女の一念恁秀鶴が治三郎を戀ふ意を定助も酌み分ぬにはわらねども折角嫁を貰ひたる當座にこんなに來た文章を旦那に残らず見せたらうへで若し簡が違つた日には御兩親に之心配させ小雪さんにも苦勞を掛け話らぬ事と彼是を案じて其儘打過ぎしに治三郎も此程の小雪と中の睡ましきに彼の秀鶴と末までの契ひも今は打忘都の夏に夢にだも想とぬ程になりけり話し代つて秀鶴の都の春の賑はしきも胸に想ひのある身には面白からぬ手鞠唱歌數算で大津の音信を待ても無し飛脚も今今意に遺瀬なく寧こふして案より大津へ往て定さんを頼んで旦那に逢して貰ひ是まで尽せし意の裏を明して旦那の胸を聞き若や意が變つたなら今日が日までも姉さんや家裡で恍惚氣を云たのが氣恥かしめて片時も生て居られぬ我身の詰り外の男の知らぬも旦那に限つて偽りの約束したり氣變りのすると云ふ事あるまいに斯して居るはせん無以事幸ひ明日と約束の座敷もあらねば午前より例ものやうに清水の觀音さまへお参りの積りで家裡を抜け出し伊勢まいりを爲た時に覺えた道の遠からねば蹴上を茶屋から駕籠にして往にしかじと心を定め其翌日は如月の中旬過たる春の色梅は軒端にはころびて春告鳥の聲音さへ空長閑なる眞午頃家裡を出つゝ秀鶴は白川橋まで來掛りしに丁度大津へ歸り駕籠に急いで参りましやうと薦先らるゝを幸ひに價を取り極め乗る駕籠の計らず秀鶴と大津の宿に着くと其儘米屋町にて丸屋と尋ね定助が宿所に至るに折よく在宅せし由にて早速面會なしつれど出入繁き商買からにて道で咄しもなり難き

場合もわれは久々にて其所で一猪口催ふして緩々咄しを囁ひまゝやうと潮水を見晴す濱側の小料理茶屋へ運行つ、酒肴を頼む其中に定助思按を巡らせやう思ひ掛け無く秀つるが仲居も運す壹箇にて尋ねて茲まで来りたる意は眞實若だんなに恍心て居るには違ひは無いが夫を慈然と推慮して逢した日以後日に至りぞん苦勞が出来るか知れずいつを嘘談でも秀つるを許して返すが上分別と胸に淨んで素知ぬ顔附き時に秀つるさん能ふア尋ねてお呉れであつた其後どもか隙を得て氣の洗濯に出京して井筒の二階で一杯遣りたまへさんをも尋ねやうと思つて居るが此春之種々用事が吳駄付にて遂々今日まで延した譯去年の秋から春へ掛けたまへの文章の來る度にだんなへ確かに届けたが何を云ふにも病みの再發時に着も出来たから久振りにて緩寛と香で咄しを始めやう定さん賦に有難ふそふして今日私がお尋ね申した其譯之と云ふだんなに逢して貰ひ互の胸を開いたうへ昔や旦那の私意が變つて居れば仕方が無いあら又其時はかふ爲ると覺悟を極めて居ますから鳥渡で能いから今直に就連れ申して下さいますな夫はだんなが此世にあれは何にも雜作は入ないが何を謂ふにも冥途の旅立ち定さん夫は本眞ですかと顔色變て秀つるは餘りの事に當惑なせしかものをも云はず定助が顔を見詰めて忘然たり實はだんなの死去た咄しを爲て之能くないと思つたゆゑに体能く云つてたまへさんば飯そふと此樓まで連れて來たものは是非ともだんなに逢してとたまへさんから頼みに今更包み隠されずだんなもたまへの身の上之案じて在在の事と見れば今はの際に私を呼んで此一品は秀鶴に紀念の印に遣はずから私が死た其跡で必ず届けて下さいとたまへさんに渡した一ト品は確かに金金の包みのやうだが大事に仕まつて持つて居るから今にもたまへさんに渡しまゝやうが私が爲めにも大切なだんなを殺して力が扱たと聽ひて再び驚く秀はる堪へ忍びし溜涙涙今人目も厭へばこそ喚叫計りに泣

き俯すも理りせ先て哀れなり

第九 章

材子誤二一言散千金花

却説く秀鶴は前後も知らず稍暫時泣き打臥て居たりしを定助是を慰めて囁やたまへも未始終爲免にならふと想ふた方に死れて見れば哀しからうと私も察して氣の毒だが今更幾量嘆いた迎未來世に往れた若旦那が飯つて來なざるものでも無したまへだつても十九廿歳で今が花なら若だんなに心を殘して嘆くのは義理に取つちやア尤もだが夫でい佛も冥途の障りになつて定助されまいから臆是前世の約束事と薩張さつと觀念免て晩にならぬ其中に早く飯るが能以トやアないかたまへが此所出て來たのを家裡では承知か知らないが若又無言で來たのなら嗚今頃は心配して探して居るに違ひない併し凡錄飯るのは局が悪いと思ふのなら出入の駕籠やに委細を含ませ家裡まで送つて進せましやうと譯を譯分たる定助が辭を聞ひて秀つる漸々涙の眼を拭ひ謂ふて飯らぬ事などは女の愚痴な意でも承知まながら胸迫り泣き、れない程哀しひのでたまへさんにも種々の苦勞を掛まふしましたがたまへさんに通りに飯りますから私が一ト箇のお願いをせよか叶て下さいましナ夫りやアたまへさんの事だから私で出来る筋なれば用捨をまないで咄しなさい外の事ではありませんがだんなが遂に悪くなつたは何時の何日でありましたか夫は確に本月の三日だつたか判然私も覺えないが今日が彼是三七周日位の佛事に的と思つて居るが確乎な所は其中にたまへさんの家裡まで知らしませう夫に私のお願いを定さん後生とれ思ひなすつて今から旦那のお墓のある寺院へ詣り申すゆゑ一所に連れて下さいナ家裡へ飯れば改めてお墓の所に來る事が何時出來かも知れない身の上今日が此世の余波と思へば責てお墓の塵を拂ひ

影向するのが未だの土産定さんあなたいか否であらふか寺院へは連れなすつて手向をさ  
 せて下さいましと聞ひて驚く定助は固より匠みし偽りならず無事を計つて秀鶴を飯す積りの出  
 籠りが誠となりし此場の仕規困つた物だと當惑すれども今更旦那の死去たを實之嘘談だと謂れ  
 めせず寺院へ一所に往事を兎や角云ふて遁るれば忽ち尻が割るばかりか此息込なら秀鶴が必死  
 になつて殿村へ振込兼ざる容子に見ゆれば詐偽序次に一所に出かけ寺院で論じて飯さんと意な  
 らずも思案を窮せ旦那の墓へ案内をしろと云ふの尤もゆゑ直に一所に往のは能く先刻も鳥  
 渡咄したやうに紀念の品が宿にあるから夫をねまへに渡したい待て在でと立ち上るを定さん  
 旦那の紀念の品の金に違ひの無のなら今貰はずとも亡き跡の供養の足に勾夫りやア秀鶴さ  
 ん何を謂ふのか勾ア其れ金は西京へ飯つた跡で届けて貰ひ申すが反つて私の勝手ゆる夫  
 なら無理に今此所で渡さなれども其中に確平に届け致すとして勾定さん寺院へ参りまじやうと  
 堰立てられて定助も今は遁るゝ道も無く彼の料理やを立出て町はずれへと歩行く思に殿村一家  
 の菩提寺の萬松山善通寺とて同じ大津の下百人町にて知恩院派の浄土宗一二を争ふ大精舎なり  
 當時の住職元譽上人といへるは頗る智識の聰は高く其名宗派に隠れ無く隨喜の信者も多かりき  
 間話休憩の丸屋定助は迷惑云はん方なけれと藝妓秀鶴を伴ひて善通寺まで来りしが固より  
 殿村治三郎の死去せし事の實ならねば新不塔のある山無く夫ゆゑ足も杖み兼しが最ふなれば  
 破れ破れと度胸を褌えて秀鶴の先に立ちつゝ門内へ進み入りしが其儘に墓所に連れ行き殿村  
 の一家で此程死亡し新不塔のあるを見出して是が旦那の墓也る澤山影向を爲るが能い花に  
 水は今直に私が持てまいるから待てお在と定助が聞なく持来し一ト枝の櫛と手桶を秀鶴は受  
 取てまた眼に涙落るを袖もて布きながら別れ申して間もないのに恁淺間しき姿になり果た

まひし亡魂の苦むす下にあるなれば死遣りたる秀鶴が思ひ焦れるゝ此胸を察しなされて下さ  
 りませと口の中に幾度か繰返しては阿伽の水手向て合掌念佛を暫時唱えて居たりしが叫喚一  
 ト聲泣き叫び其儘土地へ俯轉ぶを補け起して定助はそんなに泣くと秀鶴さん影向が濟たら飯  
 としやうねまへが泣たり哀しんだり爲るの佛の爲めならぬ夫に兎や角手間取つては飯りが  
 遅くなるだらうから確平な駕籠のある所迄私が送つてあげる故サア、一所に在なと急ぎ立  
 るを秀鶴の定さん眞に濟ませんが私一ト晩此所に居て通夜の影向を致してから夜明けに一個  
 で飯りまずと聞ひて驚天定助が秀鶴さんおまへは動かまやア玄ねへか此物凄じ墓原で通夜を爲  
 るどの飛でも無い事異化の出ないにした所が夜半になりやア狐や狸がどんな變動をするかも知  
 れねへ併其緯位の騒ぎは恐愕のないと云はれても私が承知で女一個をさふして此所に置れる物  
 か是さ秀鶴さん私をそんなに困らせないでも急ぐ一所に在なさいそふ被仰ると濟ません譬何  
 様のお辞でも私の爲めには二個と無い大事な旦那の墓の側で通夜をするのを兎や角と被仰る  
 か方か聴えません定さん何にも謂ないで捨て飯つて下さいと常に代りし秀鶴が一心凝たる強情  
 を又押返して定助が云ふを構はず敷石の上に座居て合掌し見向きも遣らぬ女の一念折から春の  
 長き日も早暮近き彼是時遠寺の鐘と本堂にて夕勤めする鉦の音も序次に暮に物淋しく定助今更  
 出過たる計らひ振に捨も置れずまふ斯なれば眞を白し連て往ふか夫よりも旦那に逢て成行きを  
 咄して幾層も仕やうがあらうと拔足しつゝ樓門まで来ると其儘一目散に走りて直に殿村の店の  
 者にも挨拶さへ鼠狐くにして治三郎を聴けば今日しも正午頃より草津の出店へ見廻りに在在  
 なすつて留守との事ア、残念や夫迎も捨てられけぬと表へ飛び出し辻駕籠雇ひ草津に至り治三  
 郎に面會し今日秀鶴が来りしより墓参の始終を物語りてふ謂ふ中にも意が堰く何は兎もあれ今

直にだんなど一所に飯つた上片を付ねば大變だと聞ひて驚く治三郎暫時も出でざりけり  
 第 十 章 智識救三壯士警前途  
 恚て殿村治三郎は差蒐りたる難題に當惑いん方ぞ無く去迎打捨置んに又秀鶴が身に取  
 如何なる椿事の出来るも知れず我を構ふて定助が計らひ過た不足はわれども夫を茲にて兎や角  
 と謂ふ場にあらねば今直に善通寺まで駈附けて論し宥めて返すが肝要定さん夫とア何かの事  
 は向ふで咄しを爲るとして秒間も速く參るべしと俄に二個の駕籠を備ひ大津の道を急ぎつ、稍  
 善通寺まで來りし頃にはや東雲の明近く鳥も聒を放る、にど二個は時刻の後れしものから安危  
 の程も氣に掛ければ駕籠より出て樓門に來りて見れば扉の締り潜り門のみ明けてあり寺内は役  
 僧奴僕等が墓所へ駈り厨庫に走りて狼狽爲るは唯事ならずと思へば胸も打轟きしが止むべき事  
 にあちされば寺内に入りて素知らぬ体で容子を夫と尋ねしかば役僧ども、常をより治三郎は檀  
 頭の息子株ゆる丁寧に挨拶なして扱謂ふやう今朝新寺院の取込みて狼狽爲るは唯事ならず年  
 だ壯き一個の婦人が貴所御一家の墓所に於て自殺をなせし死體を朝疾僕等が見出せしより斯の  
 如くに騒げるなり然るに死體を改めたるに書置やうのものは更なり其他に何を一箇として所持  
 して居ぬは女の素姓を詮穿せんにも手蒐り無く去せ貴殿の御一家方の墓所で事の出来し物もえ  
 一應異變を知らず申し心當りがありもせんかと折角使を立んとする能い折柄の事なれば死  
 骸の見分致されよと聞ひて二個は南無三方後れた計で殺せしかと治三郎より定助之打驚きて物  
 さへ得云ず顔色忽ち青染しを彼の役僧は二個が事情を固より知る由あらざれば壯士に似合ぬ億  
 病者と思ひながら二個を導き墓所に至れば二個とも氣も魂も身に添はず無慙や藝妓の秀鶴之  
 定助よりして聞し事夢偽りと想はねは狭き女の意より取逆上しかさは無くて兼て覺悟のありし

物か準備の髪二箇を合せ咽喉深く掻切て身体も崩さず石塔に向ひし儘に果たりしは女に似  
 氣無き際期の姿見るに附ても治三郎は愛世の義理の柵みにて音信こそぞ做さざりしが心に想ひ  
 絶わざり其面影を今茲に見るも果敢無き蕩抜の壳慙然な者と取絶り詫辭せんには役僧の手前  
 を憚る此場の愁傷讀む人宜く察すべし茲に又定助は最前より一言の辭も出ず秀つる死骸に  
 向ひ合拿し佛の御名を唱え居しが何想ひけん秀つるが前に落せし髮剃を取る手も疾く我ど我咽  
 喉を突んと爲るを觀て二個は狼狽定助の其手を押へ髮剃を扱取りながら役僧はコレ壯衆には何  
 をなさる一個自殺があつてさへ大体で無い迷惑なるに又もや茲で死れた日には何程に布施があ  
 れば迎追付事じやアありません短氣をするにも法圖がない併れまへが今茲で死ふと爲なざる容  
 子では死れた婦人と入組だ仔細があるのの但し又俄に意の狂ふたのか氣を落附て死ふとした容  
 子を悉しく語られよと謂ひつ、側を見返れば治三郎も聲を勉し定さん何を血迷ふのだからまへが  
 死で秀つるが蘇生りでもしやアままひ了簡違ひも程がある斯れ二個が被仰るを兎や角云つて  
 の濟ませんが役僧さまに之何も蚊も存じない事若旦那ごふ考へても私と死で冥途で秀つる  
 さんに詫て俱々成佛せんれ二個どもにね情のわらは今此所を見通して覺悟の際期を遂させてと  
 留り兼たる定助を又役僧の諭すにはコレ若衆愚僧が云ふ能く聞れよ幸ひ茲に殿村の傍子息  
 さんも在ゆ死人に附いての一部始終を包み隠さず師匠の前で悪化をなさつて死るとも又存  
 命へて佛の爲に追善修行を厚くするとも師匠の差圖に任されなば二個も留められた甲斐があり  
 まへも迷ひが自然醒まい物でも無らうと流石智識に隨ひ居る役僧ゆゑに濟度する理の當然に定  
 助も其意に任せば治三郎も俱に促し墓所を立ち出て方丈の支關に通ひて役僧の音信をなん待ち  
 居たる恚て件の役僧は今墓所にてありし序次を漏す事なく師の傍坊元譽上人に語りしに然れば

是へ伴なへよと謂る、辞に役僧は玄關に扣らし兩人に由を含めて上人の二ト間の内へ導きける是より二個は上人が問る、儘に露程も隠す事なく秀つるに馴染めたりし始めより昨日に至りて定助が一時説けし偽りの誠となりて秀つるが自害に及びし今朝までを逐一懲化なせしかば上人篤と聞終り定助其方が秀つるに偽り云ひしを真とし寺院に於て自殺せしは噫痛ましき薄命なれども是も前世の宿因にて免かれ難き因縁なるべし夫は前非を悔悟して其方が跡より死すれば迎彼の秀つるが菩提の爲めにならざる計りか世の人は悉數事を知らざれば情死ならんと云ふ者あらんさすれば佛は怨るとも何しに喜ぶ譯あらんや又其方をのみ便とする妻子が嘆きも幾量ぞ彼を思ひ是を察せば死は易くとも急ぐべからず難き命を存命て佛の爲めに怠らず追善供養をなすなれば佛の極樂往生し子孫繁昌疑ふ事かは必ず短慮の振舞ひして世の胡媚ひを招くまじ又斯椿事の折柄に殿村氏は申すも愚定助男兒も秀つるに由縁の者と云ふ事を知らずば後日の障りなり去ら二個は此一事を深く秘めつ、一家なりとも決して沙汰を做さべからず今此事情を知れる者之四個の外に無きを幸ひ死骸之寺院に引取て手厚く葬ひ候へん定助其方も先刻より聞たる事の合點往きしか然れば長居は反て悪し殿村氏も定助も疾々宿へまかられヨ併是より二個とも亡き秀つるが菩提の爲めを意に留て返辭さへする事ならで俯拜みつ、漸くに二ト間を出て役僧にと殊更厚く禮を陳我家へこそい飯りける恚て寺院は法則の如く無縁の婦人が墓所に於て自殺の趣き書面にして大津の代官金藏なる石原清左衛門へ届け出しに時を移さず検視の役吏出張なして死骸を改め見るに一箇として詮穿爲まべき手掛りなければ寺院の願ひを聞届け死骸を其儘役僧へ引渡しつ、役吏は纏て夫々引取りければ其が死骸を棺に納免上人始め多くの徒弟が讀經念佛最手厚

く法の如くに葬ひける去に秀つるが非業の際期も寺院に於て秘し物から喋々人の口齒に掛らず  
 什麼又功德の餘り成べし

第十一章

材子病三神經二坐生三暗鬼一

恚て定助治三郎は計らず廣大無量なる智識の救助を得てしかば非業に果たる秀つるが始末もさせる難題なく事穩便に濟せしかと素是己が招きたる禍災なるゆゑ意の魂鬼に責られてか暫時も想ひ忘られず治三郎とも談合して七日の布施物之云ふも更なり印の石を建る料さへ金藏を吝む事なく忍びく善通寺へ送るのみか家にありては朝夕とも持佛に香華を手向つ、只管集が亡靈を吊ふ事に怠りなきを女房の松之定助が日頃に變り此程より佛の事のみ氣に爲る之變な容子と思ふも折に振て尋ねれども何時も兎や角云ひ紛らして眞は更に咄す事無く其儘日敷を過しける茲に又治三郎は何時ものやうにに雪と俱に伏床に入るや其ま、に寐りに附しが深更渉る遠寺の鐘も春淺き夜風に連れて聞ゆるを筆敷て見れば八時なりき恚る所へ誰なるか隔ての襖もの静寂に引き分ながら一ト間に進み影はの闇き行燈の向ふの隅にイみたりしを這は盜賊の忍びしならんと想ふ物から治三郎は騒げる胸を押鎮め寐入し躰にて夜着の袖より眼を据て能く觀れば盜賊ならで這は什麼此程非業に世を去り秀鶴なるにぞ驚きながら再び觀るに身体のおまは有りしに變らずされど面疲せ色青ざめ咽喉のあたりは鮮血の朱に染みつ、黒髪は乱紊て長く面相に係り付も怨恨しき皆にて添ひ寐を爲たるに雪の顔を見詰めて奇んとする勢ひの只事ならねば治三郎も強怨を忘れて起きあがり寄るを留めてコレ秀鶴にまへを非業に死したる怨は己にある物を何にも知らぬ此小雪を捕へて怨情を云はふと道理に叫ぶ執念の迷ひがあらばどのやうにも己に怨情を陳たうへまだと思ひが晴ぬとならば恨殺すともさうともして小雪を怨情

ず再び此世に迷ひ出ずに往生して呉れコレ秀鶴と聽ひて泣き入る秀鶴が苦しき呼吸音通はせて  
 さふ云ふ貴君の優しい辭が反て冥途の障りとなりさふして成佛なりままやう固より貴君を靈程  
 も怨まふす意はなほ二個かふして陸しい添寐の姿を見るに附け想ひ出さる、凡腦の迷ひと  
 序次に積れば迎解脱する日のあるべきや再び此世に生代出て貴君に仕ねん事はしも成かならぬ  
 か不知火の意尽しの甲斐こそあら免暫時の中でも厭はねば今より冥途に飯らずして小雪さんの  
 身体を借り貴君の側を放れせんと云ふかと思へば今までありし姿の消へて一團の鬼火とな  
 りつ前後も知らず熟睡なし居る小雪が夜着の襟のあたりへ行よと見えしに治三郎狼狽驚き遮り  
 留んど一生懸命秀鶴俊と呼び喚たる我どわが聲に眼覺しあたりを見れば燈火既に消んとする行  
 燈の外影も無き是を南柯の一夢なれば胸撫で御し治三郎は不思議な夢を見し物かなど意に懸れ  
 ば夫よりは再び睡る事やへならず兎角する春の夜も東雲近く遠輝けり 問話再題第四章の始  
 め丸屋定助が都の醫師大村達吉が咄しをせしは天保九年戌の冬十月頃にて藝妓秀鶴の自害は同  
 十一年二月の事なれば讀者次嗣々々の章に至り秀つるが靈魂讀經の功力にて遂に成佛するを  
 得ずして永く殿村と定助が子ども等に崇る實録の物語りなれば架空の小説なりとして必ず見捨  
 て玉ふまじ是より下には都の醫師大村と善通寺元譽上人の咄しなし餘話不題つ殿村治三郎の  
 日外夢見のわろがりしより某院の禪門にて大施餓鬼を供養なし聊か意ろを濟ませけるが此月  
 よりして妻の小雪は月の経はりを見ざりしが其の歳の暮に以たり玉のやうなる女子を分婉に治  
 左衛門夫婦は初孫なればよろこび何に譽へんやう無し名をば静江と喚びなして蝶花よと愛しみ  
 衛養育ぬる其翌年則ち天保十二丑の冬小雪は年子に女子を擧たり其美しくしき事姉の静江と二個  
 の眞珠を掌裏に並て見たらん心地知られて妹と小珠と呼びたりける慈て姉の静江の三歳小珠は

二歳になれる同く十三寅の夏又もや男子を設たるに此度は殊更喜び彌増し勢し武張た名を付け  
 て此兒が末の榮けを見んと榮太郎とは唱せしに實名の如く榮太郎の蟲氣の病ひは云ふも更なり  
 風邪をへ惹ぬ壯健に日立事さへ疾かりけり是より後殿村の家にては差て變れる事もなく幾春秋  
 と過す中治左衛門夫婦は俱に老て此世を去りし其跡を以前に變らず治三郎が家業を受嗣き勉強  
 するにぞ々々家富み榮えけるに二女一男の兒等も追々生長なし來り姉の静江は十九歳妹小珠は  
 十八の今を詠の花の顔柳の姿月の眉西施小町と競て云之んは時々に後れて妙ならず去ば遠山の  
 春の夕部霞の際に顯れし佐保姫の立舞袖に梅が香薫る風情をらんか兎にも角にも年頃の娘盛り  
 の事なれば手筋を需免其方此邊より嫁に貰はん養女にせんと謂る、事の展なれど何時も長  
 し短かして順に相談整ふべき咄し稀なる折柄に同郡志賀の小尾川にて世々郷士にて富家なる  
 川瀬が家に姉の静江を媒始者のありければ主治三郎も這り相應しき縁談ならんと想ふ物から彼  
 の方の内輪の模様を聽合すに當主の川瀬大宰と云へるは尤も温順なるがうへに眼上眼下の厄介  
 逆は只の一個も無き由なれば譬へ此娘の氣随でも差向き女夫の事なれば亭主の機嫌を取る而已  
 ゆゑさふがな辛抱するで有ふと娘もゑに迷ふは親の常去ば此度の縁談に能き幸ひの事なり迎疾  
 くも事の纏りて静江は丁度十九の春時へ安政五年の歳如月の初旬の頃川瀬が家に興入して目出  
 度婚儀を結びけり是より川瀬夫婦の身のうへに係りし種々のもの語りより遂に復讐の餘下り序  
 次を追て解分べし笹々浪や鳴の海輝る月影の明石も須廣も外ならぬ其月影を秋の夜に眞向に受  
 ける大津驛濱町通りの米屋街に商賣繁昌お得意の氣受ても丸い丸屋が身代夫婦意を一致にして  
 稼ぐに追附く貧乏あらぬに十年立かた、ぬに店をも廣げ土藏さへ二個ばかりも建増して今  
 の手管に小僧を入れて十四五名の暮しとなり以前に代つて盛んなる丸屋なれども定助は素是は恰

刑の者なれば自ら奢移とをせず殿村などへ行ばとて以前の如く勝手より始終出入をなしけるが  
子の又親にも似ざる者かな彼の定助が一兒なる定三となん云へる男兒は年まだ十にも満ぬ時か  
ら能からぬ子供の真似のみ見習ひ寺屋へあけても一文字も交はならず遊ばばかりか何時も身  
体に生疵の絶ざる程に喧嘩をなし師匠の更なり近隣にても兒のある黠い定三を悪て名をさへ呼  
ぶ者なく熊鷹小僧と恐愕けり

第十二章

狡兒去三故鄉一走東海道

却説く定助が一子定三の一年増に能からぬ業を自然に見倣ひ稍其歳も十六七に成しかば當地で  
有名の博奕師が仲間の群に交際して店の賣溜め掛先の仕切を取ては賭場に持ち往き二十一目を争  
ひて奇よ偶よと張中に偶に勝を得る緯あり其面白さに夜も無く晝さへ内に片時も尻の落据く  
日迎の無く固より商家の息子株ゆゑ破落戸者等も定三を旦那々々と達るものから日毎に渠等を  
伴ひて四の宮新町稻荷新地馬場町杯の遊里に浮れ湯水の如く金錢に糸目を付ず持散せば怒る廓  
の習ひにては壯士れ方のやうで無く旦那のふも遊びに秒間も野坊がありません粹な氣質に  
實意があつて強きは拙き弱ひのの求助て下さる俠氣達れ江戸で名高い幡隨の長兵衛さんでも揚  
卷の助六さんでも及びは無いと辨問末社が出纏の煽動に乗られ放蕩無頼は日に増し募る定三  
が所業を惡みい爲る物の獨息子の子事なれば不慮彌増す親子の情合行義の爲め迎一ト間に鎖籠め  
或の諭告或は怒憤幾度か懲し戒化れ固より性根の曲りし定三何しに異見を聞べきぞ去と一室  
内に鎖籠られては大好物の酒をさへ飲事ならぬに迷惑なし何時でも甘い母親を密と招きて空涙  
だ出もせぬ睡を摺廻し今度計りは改心して遊びや博奕は止めますから座敷圍ひの窮屈ばかりは  
だ許しなすつて下さりませと空辞陳列て母親を欺して其儘表へ飛出し五日六日も飯らぬ事が月

の中への幾度か去ば流石の定助夫婦も念の入たる悪徒に今の愛素も尽き果て渠が追々親の眼を  
忍んで盗みし金高を調べて見るに六七年にて三千兩餘に及びしゆゑ此儘にして過ぎ行ば堪へ巨  
萬の財いあるとも遂に丸屋の布障に係り商業家名の相續も出来無いやうになるのの必勝夫を  
想へば今茲で親子の縁を断てしまし不便のやうだが定三を勘當するの家の爲先那な息子の寧  
の事無いのが反つて氣樂で有らふと男親だけ定助の心を決めて松にも委細を相談なしければ氣  
の弱ひのは女の情台其腹立の無理ならず愛素の尽た奴なれをまた後前の考へも何にも無しに爲  
る堂落最二三年立たなら勘しは那兒も氣が附きましやう女狂ひや博奕はしても盗みを爲たと云  
ふでも無いから勘當するとも今一度篤り異見をしたらうへで若も意を改めなば那兒も仕合せ此方  
でも今の案じに惹換て反て嬉しふござんしやうと取直すお松が辞を打消し夫は是迄幾度か想ふ  
ゆゑに勘辨して異見をすれども糠に釘秒間も利た例が無い最勘忍も勘辨も今日が限りと量見を  
極ておまへに謂ふのだからそんな氣弱に了簡を出さず那兒で苦勞をしたのも約束ごと、觀念  
めて想ひ断のが肝心だ夫を鬼や斯ふ心配して陰でたまへが定三を構ふやうじやア何時までも決  
して意は直りませんぞと松を堅く戒めて遂に定三を勘當し手拭一ト筋着たま、にて築き放し  
ても肉身を分しものから雨に付け雪に付けても兩親は意に苦勞の絶ざりけり實や開化の今日に  
至りて觀れば病名さへ往古に異なる事多かり去ば氣病みと云へりしも實の神經病なりとか茲に  
又定助は風邪を病て夜もすがら寐られぬまゝに行末やまた越方を想ひ出て計らず胸に浮みしは  
定三が事になん染まだ幼稚かりし頃より固より獨の子供ゆゑ眼より大事に衛育て教育さへも怠  
りし覺えもなければ何時となく我等夫婦に似もやらで放蕩無頼の身となりしは生れ付きとは謂  
ひながら淺間敷事限りなし是も已が其むかし辞の綾を過つて非業に殺せし秀鶴が怨の一念此世



に止留り無念の炎燃を消さん爲め我兒定三に責續て想ひを晴す物ならんか噫恐しき執念なり今しも想ひ出して見れば彼の善通寺にて秀鶴が果しは天保十一年子の春二月の事なれば今年之(安政三辰の歳)丁度十七年過して見れば早い物だが其前の年定三が生産て今年が十八年想ひ合せば秀鶴が年忌が頻に氣に蒐る風邪でも勘し能くなつたら治三さんとも相談して年忌の法事をして遣ん杯と彼是寐もやらず考へる中鳥が音を告て其夜は明せしかど其夜よりして引續き夢現幻とも分かつたずして秀鶴が事定三が行手のことのみ暫時が程も忘る、隙のあらざるより始めは只の風邪なりと手輕く思ひし定助の病ひの序次に危篤なるにぞ松の苦勞は一ト方ならずその容体を醫師に問へは始し先は風邪の恙籠みなりしが以まゝ氣病のやうすも随分大事に致されよ爾し氣病と云ふもの之長い而已にて一命に係る程なる病氣ならねば其積りにて別段に心配するには及ばぬと聞ひて松も其外の看病の者も安堵はしつれど是なん今謂ふ神經病にて等閑ならぬ難病なりとぞ却 説定三は七生までの勘當を受けては流石の悪徒も困るであらうと思ひの外今之天窓の歴へ手が無いのは反つて天竺浪士氣樂と能いと意に喜び浮羅々々然と遊び暮し大津の宿も東海道じやア屈指と云へど鼻が問いて面白からねば此土地を高飛びなして國々の破落戸仲間を偏歴なし一六勝劣の興義を定め親分仲間に入らんと宮本無三四が六十餘州を武者執行でもする氣位で馴し大津を跡足で蹴立て路を東に取て尾張の名古屋は評判の繁花の土山ゆゑ親分の能ひのが定めしあるであらふと日市より便船にて宮(今は熱田と改まれり)へ涉つて名古屋の模様を探つて見るに尾張では博奕が大變嚴重く夫故名のある長脇差は所を代て此頃では一個も土地に居ないを聞き望みを失ひ定三はまだ大坂を知らざれば彼所で暫時遊ばんと思ひを轉じて其夕郡桑名へ涉つて伊勢參宮と出懸て山田や白子あたりの賭場を計らず月日を過し伊賀

越なして南都へ出て夫より目的の大坂へ巡々て來りしが其頃泉州堺の町にて仁に知し親分の男達にてつ釣鐘の長次と呼ぶ、俠客あれ年は四十を越ねども子分となつて隨ふ者三百餘名もあるとの事は彼の熊鷹の定助も故郷に居し其頃より名前は聞ひて知ると雖も手布羅で尋ねて往た日にやア但の小僧も同様に扱はれるのは残念ゆゑ突外な土産を携て釣鐘長次の肝玉を買て呉んと流石の悪徒頻に工風を凝せしが考へ付けたる異形の手土産夫を携へ長次が家裡を尋ねる咄しと土産の品は次章を後て見給へかし

第十 三 章 飛田松原二賊挑三小夏

押照や浪花の町の中央より東に當り長町とて呼びつたれたる一ト町あり此地之豪商問屋など幾を陳べ賑はへる繁花の街にわづらずして謂は場末の貧乏町其日稼ぎの多夥がなかに住居へ路次の奥ながら土蔵構へに雑作さへ手を尽したる一ト棟ありこれなん六字の次郎藏とて棍徒の頭を働きて其名は渠等が仲間にて轟き渡り去親分なればこれに隨ひ大坂の市中を拵了ぐ棍徒の子分も又隨がつて勘からず大零渠等が仲間にては此次郎藏が勢ひにならび立つ者あらずと云ふ去ば子分も三百餘名の多人數なるも彼の次郎藏が指揮に隨ひ立ち働くに至りては更ながら手足を使ふが如し固より是等の小賊ども時に寄り幕府の沙汰として其筋係りの役向より捕縛の探察あるときは矢庭に子分の小賊どもへ手當の金圓を遣はんで或は四國或は伊勢路と指圖をなして散乱せ去先一時に阪地をせしらせ置き稍その沙汰の薄らぎたる時を謀りて呼び返を神出鬼没の進退に渠が子分になりし徒は捕縛を程能く通る、ゆゑ彼の親分の次郎藏は彌倍悪徒の人望を得たるものから折に振ては阪地は固より接近なる兵庫堺の博徒仲間と紛議をすることありと雖も味方に多分の子分あれば敗北を取ることを稀なれば子分の中でも誰彼と呼ぼる、奴等は序次々に惡意

と慕り梓了ぐにも手荒な所業を爲るに至る最惜むべき人面 獸心始設一話茲はまた繋ける飛田の松原は晝だに往來の稀なるを増てや告る鐘の音も九ツ時の眞の闇夜眼ゆゑ確然にそれどとは分き兼ねぬれども手に取るごとく什も哀なる女の泣き聲木霊に響きて物凄き折しも遺地に來蒐りし壹個の男之年の頃廿歳の上を二ツ三ツ腰には一刀横たへし俠勇肌なるその形容は云はずと知られし長脇差固より弱きを看過して其場を遁るゝものならず強きと飽迄打戀し救ふを男と腕まへを磨く意かまつ原で叫ぶ女の聲を聞付けず、み近寄り抜き足にて容子を如何にと窺がひ居るを此方は夢にも氣に付かず最も花美き壹個の女を大の男の一個にて兩手を捕らへ足を壓へ身動ささへも成ばこそ那と姉さんそんなに泣ずと私等が實意を盡しつしたとて萬一罰もわたるめへ幾度云つてもれなじことだがあまへを見始た其日から首たけ所るか天窓まで惚たと云つたら深草の少將くらゐは疎な事だ日に幾度かあまへの表門を通るも優しいこの顔をどふか観たいと付けた日が百夜所のことぢやアないそれ程惚て通つたもれまへは存じあるめいから苦毒もはなしてさかせるのだ夫に泣きと聞へない十五平六の生娘でも斯云ふ優しい男に逢ちやア素直に自由になるのが當世夫にぬまへと彼の花柳地で指を屈るゝ姉さん株でねはくの男を迷はせて酔いも甘いも承知まなから實意があるからまつ原の草を假寐のれ座敷へ口をかけたる色情客に自由にぬまへがなつた迎そんなに罰もわたるめへせ適安公そふども一兒貴が云ふにちがひはねへ強情ばるのも程があらア疾く自由にならねへと唯で濟まて返しやアしねへ二個が散々慰さんだ仕舞之四國か中國へ解に掛てた、き售のが商賣柄も多雑作もねへが其所は色氣の詠と歌だ手荒な仕事はてへげゑなら此方も好まぬ情夫サア合點が行たならマア斯やつて秒間との間嬉しい夢を見た跡では是から後もこの様に可愛がつてと泣顔でわらつて云ふのを聞のが所望だ夫と

もアイと謂ねへけりやア斯して爲ると無罪無體泣き入る女を手籠になし既に強姦をとげんと爲る暴悪無頼の二個が振舞女も今は一生懸命力をさはめて刷んとすれど此方の二個の殊どもせず抱き驅のつ、疾や既に斯よと見ゆる其時疲く其時遅く顯はれ出し以前の矢庭に一個の惡漢が襟首取るて肩車遙にむかふへ抛けたり不意を喰つて壹個の惡漢見廻る所を拳堅を先面部を強く打しかば何かとつて堪るべき眼闇んで二足三脚多智呂危ながら尻居に動と仆れしを白眼付けたる壯士の身構何奴なるか知らぬ往來たへたる松原にて女をどらへて強姦なまは云はずと知れし無頼の惡徒其儘此地を出去ば命ばかりは補けんと呉れん愚圖一爲さは眼に物見するぞ那と小癩な青年の荒言浪華で名轟の情夫人に知られた已様方の比翼の床へ飛び籠むのゝか手籠になして無禮の小僧奴戀の邪摩する意趣晴し截断で仕舞と右左前の手際に懸もせず準備の一ト脇抜き放し切て蒐るを壯士は更に恐愕氣色もなく飛で燈に陥る夏の蟲殺すは無益な殺生なれども望みに任せて此世の暇を取して呉れんと抜き連れり一上一下と断り結ぶ烈しき太刀音雷光の闇にひらくくしのぎの光りに女は強さ怖しさに立も得去ず打俯たり恚る所へ差異る廿日餘りの月影に計らず壯士は踏み進む足場の便を得てしかばヤアと一聲蒐るや否や左に切込む惡漢の肩先掛て切付けたる刀のさへに堪るべき其儘其所へ仆れしを見るより一個は怖れを抱き切絶む切先引はずし跡を見ずして遁出を己妓其儘遁しはせじと一丁計りも退行しが跡に残りし女の事も意に係れば打捨置き基の所へ返り來て慄へながうに打俯せし女の側に進み行きコレた女中意を確定にまなせへなれまへを捕へて強姦をまやうと爲たる惡漢も一個は其所に仆れて居るし一個之命が惜しと見へて雲を霞と遁て仕舞跡には恐愕者は居ねへと聞て女の顔をあげ四隣を見れば其人の云ふに逢はず惡漢の一個は断れて仆れて居り一個は影も見へぬ物から擲しは胸

の動も静まり始りて意も落付きけん身体を改免壯士を俯拜みつ、盼けるやう執貴兄かは存じ  
ませぬと手籠になりし難義の所を救ひなされて下されし恩は辭に申されませぬが私の難義  
を救はんと爲すつて貴君に若や又も怪化があつては濟ませんと去ばつかりが今の即迄苦勞にな  
つて居まする貴君は怪化はありませぬの又私も宿へ飯れば貴君の傍で助かりし委以咄しを  
母さんにまましてね禮に参りますからさふぞ貴君の姓名を傳聞せなすつて降さし申し併ね怪  
化となつたのでね座ますかと聽を打消し壯士之想ひしよりも弱以奴等で幸ひ勘しの怪化もま  
ねへしまた是敷の事をした連態々禮に來るにやア及ばぬ夫より序次に夜も深るがね免へが全体  
其所へ往た咄しを短く聞てへもた

第十四章

壯士斷惡漢一暗結赤繩一

其れ咄し之貴君からね尋ねなくとも一ト通り申して置ねば濟ません基私は島の内で藝妓の小夏  
とすす者今日も南地の浮無瀬樓で或藏郎のね留守居さんが金主の方へ振舞ひの其れ座敷へ参し  
に兼て馴染のね客に連れられ開きになりし歸路兎角の樓で飲直し其る座敷が長くなり歸りは丁  
度九ツ過ぎ駕籠に乗られ兎角の樓を出たのも夜更の事なれば往來の人は一個もなく意細さに駕  
籠の内急げと廻る器械の難波に驚りし觀物の固屋の表を過ぎる頃頭れ出し兩個の曲者手に掌に  
氷の剣を抜き持ち前より進まし一個の者が棒に結びし灯籠を切墮したる刀の光りに怕れて其儘  
驚籠昇の二個は聲も立ずして觀世物固屋の横町へ遁てしまつて其跡はさふした物と思ふ間もな  
く泣き居る私を籠駕より惹き出し物をも謂せず猿輿宙に釣して雷闇の路を幸ひ人跡の絶し飛田  
のこの松原すんでの絆で強姦に逢んどせしを日頃から祈念を掛し妙見さまの利益なるか貴君  
の傍で危急所を助かりました夫ぢやア今の惡漢は日頃からしてね前に懸幕し口解て觀ても出

來ねへから寧ろ手疾に跡を附け手荒い仕事を仕た物か二個の者は兼てより私を知つた様なれど  
さふして私のこんな人を一十度は疎か夢にさへ顔を合した覺はないのに不慮な憂目を見せまじ  
たそふして貴君のね名前を聽れて陰す事もねへから謂て聞せもしやうがねめへの内でも過  
いので嘸かし案じて居るだらうし今から私がねまへの内まで送つて遣のり易に事だが島の内ま  
で往とすりやアけへりは明日の朝になる夫ぢやア折角夜を掛て急いだ返辭が親分に遅くなるか  
ら困つた理屈だア、さふしたら都合が能ひかど秒間案じて居たりしが姉さんねへの迷惑だらう  
が今謂ふ通り今夜の中に遅も返辭を爲る事を持って居るので今速にねめへを送つて往て見ると私  
の勝手が悪いから今夜の所へ兎も角も私の内まで一件に來なせへさふする内にやア夜も明るし  
朝になつたら私の内から確定に送つて進せまやう私は堺の濱側で釣鐘長次と男を售る其顔役  
の子分の内で柳生の幸次と云ふ者だが見掛は客氣でも親分の氣象を習ふ俠客向ふが強く出て來  
れば飽迄此方も跡へは惹ねへ弱以者なら何所までも救ふて遣るが持まへの病氣で腰を釣鐘の長  
次が子分の私が裡まで今から一先來なさいと云つた所がそんな風俗ぢやア遠いひ路は踏めねへ  
から成丈り裾を高く端折急いで跡から付ひてね在と流石は男を磨くだけ意は清き幸次の振舞強  
ひ計りか眞實が見えて實に頼母しき言の葉の露の恵もが夏卿の小夏は嬉しき面氣地して此うへ  
ながら親方さん迷惑でも明日までね世話なすつて下さいましと此時始めて月影のさへ入り  
たる意地して小夏は幸次を篤と觀れば其嚴漸く甘歳をうへ二箇三箇も越路なる雪より白き肌へ  
の色艶鼻筋通り眠目清涼く威あつて更に猛からず物の謂ひやう口唇に愛興見えて最優しく折し  
もそよ吹く明方の風かあらぬか震へる程に小夏が肌を戀風の染み渉りては遺瀨なく去さるも今ま  
で生死を氷の劍に争ひし修羅の街の場所さへも去で恚程想へばとて男に對應生芽氣し言葉が那

ど云ひ出されやうと意で心を戒めて躊躇ひ居るとい幸亦は知ずチ姉さん此様所に長居をもちやア二個が爲にも能くないばありか順序に遅くなるのが迷惑秒間疾く塚まで歸つたうへで跡の事は又相談のしやうもあるかア来なせへと小夏が掌を探り走り去らんと爲る折しも裁仆されたる一個の悪漢呼吸吹き返し穿立ちあがり命に換てつり出した眼目よりも大切其美婦に己に浚へて堪るものか切々ねく去了あが否だとぬかしやアこふして遣と深疵ながらも我武者の悪漢落たる脇差取るより疾く幸次を目掛けて切付くるを此方は速く身をかはし宙を撃せて決笑ひ已まだ往生まねへの邪摩な奴だと謂より速く腰骨礎と蹴飛ばせば何のは以て堪るべきア一辟叫喚も敢ず再び其所へ仆れしを見向もやらす塚の方へ小夏を伴なひ急ぎける怒り程に柳生の幸次は途中で彼是手間取れば頻に路次を急ぐとゆへども花柳に生長し婦女の足弱思ふやうには道はかざらず漸く塚に歸りし頃は春の夜なれば明易く早東雲を告げ洗るの濱邊も飛行ふ頃幸次の小夏を伴なひて西横町なる親分の釣鐘長次が家裡に至り昨日長次に托されし浪華の所用の返辞をなし扱這ふ飯りの遅刻せしは途中で凶事に出逢て難澁なせし婦女を救ひ其場に在りし悪漢の一個は仆し一個の奴は遁た容子を手短に咄去て小夏をト間に呼び引合しつゝ是から響はどふした物かと談らへば長次は談話を聴き盡了己は汝等が飯るのが何時に變つて遅いゆゑ向時の咄しが面倒になつたで夜前と泊るであらふと九ツ過まで侍て居たが飯りに其様狂言があらふ事とは知らなんだが平常からして假初にも腕と振ふて男を磨けばそふ云ふ場所なら踏籠で救ふて遣るのが則ち俠客能く爲て遣た汝等の働きは是から前途でも其通り義には命も惜む事なく強きを挫き弱きを救へば自分免許の兄貴でなく仲間の者に立てられて一個めへの親分には人が自然に爲る道理併し汝等が劍術は人並優れて高手から五個や七個盜賊が一度に切て掛つた迎そ

れにやア微苦ともまねへたらうが夫を自分が鼻に掛ちやア還つて出世の邪摩になるから随分とにも氣を注意て疾く麗美な男になりぬへ時に姉さん嘸かし強迫事だつたらう併し幸次が能い都合に往逢えたのでれめへの僥倖家裡ぢやア飯つて来ないのを種々案じて居るだらう今に送つて返すか何にも案する事はねへ顔ども洗つて茶積でも飽食くつて厭アの所で咄て待て居るが能ひと幸次の手柄を賞たうへ壯士者ゆゑ將來を又何となく警戒する流しは夥多の子分を持ち人に男と立られるつり鐘長次が振舞は奥床しくも想はれけり去る程に又藝妓の小夏と夜前難義を救これて其嬉しさに計らずも戀初たりし其人にどふか意の真誠をば打白したく想へども物謂ひ合せし數さへもまだ積らねば耻かしの森ならなくにこらかしの散らせし如く言の葉もたへの橋や路もなき夫のみならず今朝はしも送つて遣と親分と焦るゝぬしの謂るゝ嬉しむやうに想ひるれど別るゝの事のうち哀しき寧ろ飛田の松原で逢さへせ給ば徳迄に想はれぬ身に想ふ事彌増ものかど謂へい得に云ひずと此儘飯るとは今夜にましたる愛世ぞとかこつは戀の愚痴なりけり兎角する中準備せし駕籠さへ表に待たると報知に長次は小夏に向ひ姉さん駕籠も來居るから早く飯つて無事な顔を多衆に見て安堵させな家裡から外に付添の子分を一個遣はずからど何から何まで氣の附く親分小夏は今更せん方なく長次夫婦を始めとし幸次の取分け恩人ゆゑ巨細世話になりたりし謝禮を陳つゝ裏髪引かるゝ想を取直し表へ出るを長次の呼び留め姉さん近日幸次を伴てれ免への廓内へ遊びに往から其時緩々と飲ながら飛田の後段を咄しやまやうとやうす有氣な一言に小夏の嬉しく振反り親方確然でございませす若かお在が後れるやうなら謝禮に私が参りませよと笑顔にこぼす愛興に乗るか駕籠の裏御す籠にあける杖合棒よいかの腰の極めやら玉の緒ゆるらるゝ肩は南にあらで北道へ送りてこそい急ぎけれ

第十五章 五八 欺三次郎 藏一 蕪復 警一

駕籠を見送りつり鐘の長次は奥間へ幸次を招ぎ夜前汝等が討留た奴いせふせ宿無し盜賊ゆえ仆  
 斃たのは自業自得で心配するにやア當らねへが其顔相に覺いねへかど聽れて幸次は小首を傾け  
 秒間案じて居たりしが始先二個を敵手にして切合ふ時の眞の闇ゆゑ切先の光で受つ流しつした  
 が一個の逃て仆れた奴が再び起て向つた時の丁度輝光い月影にて顔の見えたが覺には無いが日  
 外きつぢの賭場へ来て彼是云つて盡了にやア敵歐て遁げた長町の棍徒の頭と一所に來た安どか  
 云つた野郎の面に似居るやうにやア想ひやすが夫も夜眼ゆる確乎とい知ねへそふして親分其面  
 に覺わがあればどふなりやすのた有ても無ても構いねへが若も野郎が長町の次郎の子分の小  
 賊なら一チ度は賭場で耻を受け今度は子分を己が手で爲遣見れば眞逆なんでも泣寝居にもされ  
 めへと想ふは多くの子分の奴等に腰の脱たる親分と輕蔑ちれちやア其日から平常のやうに働  
 もしねへばかりか我儘を云つて子分を離れる奴等が必ずねへとは云へねへから警喧嘩の取勝は  
 どふならふとも何時か一チ度は子分を惹て此裡へ仕掛て來るのは知れて居るそれぢやア親分次  
 郎藏が子分の仇とためめを敵手に仕掛て來ると云ひなざるか宜や奴等が仲間を煽動て幾程朝掛  
 夜討を爲るとも高のまれたる小鼠々々草賊喧嘩の起りはわつちから山來た事ゆゑ人の手を些少  
 も借にやアねよばねへ一個で敵手になつて遣るから親分そんな心配もないで様子を無口で看  
 て居やしやうコレサ幸次ヨて先へが腕には覺るもわらふが敵を餘り侮るのい必ず敗を取るもの  
 サ素より敵手の衆きを畏怖すまた小敵とて侮るべからずてめへ達でも己だどて次郎藏ぐらゐの  
 爲る事はど觀貫て居れど奴等だとして命を掛てする事ゆる油断を爲ちやア不覺の基ひ随分どもに  
 氣を附て眞逆の時に毫釐でも不覺を取ねへ準備を爲るに過たる事いねへと流石いつり鐘長次と

て衆に知れし男だて血氣に之やる幸次等がまた及ばざる後日の要心されと豪氣の満充てものに  
 動せぬ丈夫の魂とやる幸次を警戒る辞の味ひ噛分てや幸次は言葉を改免て實に親分の異見の  
 通り敵手を白痴に爲過して不覺を取ちやつアうまらぬ夫より此方は油断をせず寄て來た時泡  
 を吹かせて降参するが何より肝心親分ためへの咄しを聞ひて血氣に任せて兎や角と云ふたを  
 今更後悔しやしたそふして見れば次郎藏が内輪のやうすを探るのが先第一の事ながら平常ため  
 へもわつち等でも巾着切りや棍徒の奴等に知己がないのでこふ言ふ折のやうすを聞き出す手懸  
 りのないにやア實に困つた理究サそんなに困る事はない向ふへ入れて探索を爲るにやア人の心  
 當りが随分あるから構はねへがためへも其氣で意を注意成丈け探索するが能ひと咄す間に思ひ  
 付き長次い確と小膝を打ち彼の長町の棍徒仲間て頭立奴等は島の内を我巢の如く徘徊なし遊ぶ  
 咄しを兼てより耳にはさみし事あるにぞ幸次に向ひ出さやうてめへが手から長町のやうす  
 を聴くには屈強の手藝を思ひ當つたから一番甘く計畫見ねへか外でもねへが次郎藏始め子分の  
 中にも粒立奴は何時でも遊々廊裡の島の内から難波新地に大方浮興を据へて居るを前から聴ひ  
 て知つて居る幸ひてめへが救けた婦女は島の内でも指屈の藝妓と謂ふから那の婦女を玉に遣つ  
 て探索すりやア意外な咄しが耳に入り此方の爲めになるかも知れねへ併し女材もあるめへが救  
 けて遣りしを恩に被せ往生驅めにさせた日にやア宜んば事が分るにせよ後日になつて婦女から  
 那れいあの時私が頼まれ救けて貰つた恩報しにこふまた筈ぞと雀舌もすめへが若も世間に漏て  
 見ると那婦女の爲めにもなるめへし第一てめへは猶の事己が名までも穢す免へ物でもないから  
 探索に遣うとまても氣を付けて婦女が眞底てめへの爲めになりさへすればと想ふ程其所は悉し  
 く謂はない迎も木竹の中から産れて出た男でないから承知だらうと云ふだ咄しは分つたかと問れ

て合點く柳生の幸次其日は夜前の草臥にて我家も飯の住居に返れど固より妻子もあらぬ身ゆゑ  
 内に這ると其儘に戸棚を明けて取出す布團も四布かいつの世に洗濯さへもなさいれば垢はひか  
 りて春雨にかびの花咲く掛襟を額の際まで惹きあげつ被る布團の模様さへ此翼も仇に兩足を連  
 理にからむ獨睡の低き枕に高剛心能くぞ見にけり怒りし程に南地にて小夏の飯りを附覗ひ  
 首尾能く飛田の松原へ奔出して強姦を既になさんと謀りしは看客大略推したまはん這は長町の  
 次郎藏が子分の中で混徒を働き酒と婦女に愛身をやつす小安五八と云ふ悪者彼のつり鐘の子分  
 の幸次に安は切れて仆れしを見るより五八は朋友の爲免に敵手と戦せん義理もへちまも厭ひな  
 く其切先の尖きに所詮勝事ならざれば露命あつてのもの種と切仆されし仲間の際期を觀向きも  
 やらず一目散に尻に帆をあげ走りつゝ其夜は北の新地に至り仲間の裡に一泊し夜明を待て新地  
 を駈出し彼の長町の治郎藏が家裡へ至りて五八が扮ふやう今夜塚の飯り道飛田まで来て安公が  
 壯士男と喧嘩を始め云ひわがりから抜き合せ切り結ぶので見ても居られずわつちも安の助太刀  
 で一個に兩個が左右から打込む切先殊ともせず受けつ流しつ戦ふに敵手は中々劍術に達して居  
 るか表裡の能ひのか安は刀を受け損じ右か左か知らねども肩先深く截付けられア一と一聲叫喚  
 もあへず其儘其所へ仆れしゆる仲間の仇覺悟をまろとわつちも一生懸命で暫時奴と戦ひしがど  
 ふ謂ふ運の悪いのか向ふが一と聲轟然叫んで打込む太刀をはつしと受けたるわつちの太刀はつば  
 元から折て二本になつたので南無三寶と安が太刀を拾ふて再び戦はんと想ひのまたが向ふの奴  
 の太刀の折たを幸ひに唯一と聲と眞向に構へられたで遁るとなく四圍問ばかりも引退き仕様も  
 あらんと思ふ間もなくをのれ穢し逃せし念佛唱へて往生せよと喚る聲は雷電の耳を貫く如く  
 に聽え追て來るの疾き事彼の章駄天が鬼鹿毛に乗て走るに殊ならぬ意ばかりの矢猛にはや

雲の井

れど刀の折るし詮方なく一刀流の奥の手でこふなるうへに遁るが勝ど其場の一端遁たものも金  
 の入つたる財布を墮し其儘捨ても飯られずと取て返して松原を那方へまはり這方へ巡り以前の  
 場所へ近寄てやうす如何にと窺ふに不思議な事戦つた時の見えなぬ婦女の姿こいつの狐に違  
 いねへと先準備に唾にて眉毛を濡して見る所が豈計んや婦女の眞者側にい以前の壯士が何か密  
 く語らひ居るの定めしやうすの有事ならんならふ事なら接近て逐一咄しを聞んものと抜き足  
 ぞつし進寄り小太い松樹の幹に身を依せわつちが聞ひて居やうとい件の兩個の夢にも知らず何  
 だか婦女は夢中になつて寢言のやうな咄しをすれどたつた一と言安が聲を擧取る爲めになる事  
 は男の口から己が名を云つたを確乎に聽とつた此五八めが當座の働は是より後之十六章の始に  
 談るを聞たまへ

第十六章

情婦爲三幸次一敵探三居働

夜は深々と更涉り人離れなる飛田の松原音するものは夜嵐の梢に通ふ外にのなく夫ゆる二個が  
 咄し聲も手に取るやうに聞へしが件の男は婦女に向ひ序次に夜深になりはするし是から直に記  
 めへの家裡へ送つて遣のが當然だが譬夜明になれば迎今夜の中にさふあつても返辭をまねへで  
 ならない事を頼まれて來た返りゆゑ今夜の所は兎も角も一端已等の家裡まで來なせへ其間には  
 夜も明て明日になればさなでも速く送つて飯して遣らふ這ふ云ふ已の堺の濱側西横町で男に  
 は多く知られた顔役のつり鐘長次が子分の中で柳生の幸次と句夫ぢやア安を殺した奴とつり鐘  
 長次が子分の幸次か己見やがれ長次の野良め日外きつづの賭場へ踏み込み荒して遣んどなした  
 る時も己の傍で子分ばかりか己さへ耻辱を受けたる事威是長次が爲す業なり重ねの怨み  
 の數々皆へ長次に數百名の子分があるとも何か恐れん我にも數名の手部あり必ず堺に押寄せ

長次を始め手向ふ奴は一個もあらず死人の山を築て怨みを晴して呉れんと氣相變て南の方を白眼で齒がみをなしける次郎藏固より五八が夜前の事は己が非道は謂はずして空事のみを陳べしかば彼の次郎藏と殊更に怒りを増も理りなり去る彼等之假初にも男を磨く俠客の長次が如き義に進む者にあらねば親分と子分の中でも口から出任せ誠の稀に嘘をのこ吐は平常の事ながら長次は兼て怨みもあれば今聴く咄し一か十まで嘘とは思はぬ五八のやうすに其手配りをなさんとせざるも敵手は名に負ふつり鐘長次衆多の子分の其中には腕に覺えのある者も素より遊なからざるのみか中には柳生と呼れたる幸次が如き聖劍に秀し子分のある事は日外賭場を兼せし時篤観て覺えのある事ゆゑ無念は遣かたなけれども無暗に怒りに乗じつゝ彼所に押寄せ其時に不覺を取なば夫こそは仲間は疎世間に對し二度と再び顔出しのならぬを思へば這度こそ必ず勝利を得んやうに大事を取て仮初にも輕率みずる場合にあらざと胸に浮めば往へ無き不意を撃つこそ肝心ならんと漸やく怒りを我と我が腹に納めて五八に前ひ一事の怒りにてめへ等を惹て堺に押寄すとも萬一敵方に備へがあらば容易く勝事難ければ油断を計るにまこと無してめへは素より安が爲め先度の耻を雪かんと思ふ奴等と今日から来て堺に通つて敵方のやうすを探つて來るが必殺をふして今日ほど想ふ日に不に起つて押寄すべしてめへは何と思ふかしらぬが此の計畧にやつ附けたら警敵手に諸葛亮楠真田が智略を巡らし項王朝比奈加藤が如き勇士があらふと恐るに足す實に親分は確石なもので欺すに手無しと云ふ計畧が何よりもつて軍法の奥の手夫ぢやア親分わつち等は棍徒を掛て堺へ通ひ彼地の仲間の衆や虎にもやうすを談つて頼んでれき其吉左右を聽せやまやうにめへもサアと云ふ時に何時でも人數の揃ふやう手筈を合してたきなせへと曰が悪事は願はず還つて人に怨を結ぶ無頼の意徒が意の中こそ實に淺間敷ものな

りけれ茲に又説き出す所は淀の川面傳え瀧に乾せし網島の目も霞み行く春景色櫻の宮の花盛り一ト目千本三芳野の吉野の春にも譲らざる花を愛るにも謂ふ波那を携えてゆく人われげ又世の中を愚なりとして茶箱を提げつゝ櫻の宮より樹しく川上へ登り行き彼の清瀬の水を汲み木の芽を煎じ詩歌を吟じ萬物靜觀皆自得と濟した酢豆腐連中あり或は茶舟舫を淀川に浮べて三曲なんどの合奏ものに流石に長き春の日を短かしてきて飯り路に愚痴を陳べる美し乙女の袖に散る花びらの得もいはれざる響ばしさ恁る所に屋根船の簾を卷て櫻の宮の藩つたえに瀧ぎ下る内や床しき其の人は外人ならず柳生の幸次島に内にて奈良やと謂へる店より出し藝妓の小夏と他人入れずの差向ひ今日はひめもす櫻見の飯りはいつもの茶屋の裏川岸へ茶舟舫を横着けにあがれば設けの奥座敷暫時が中に座敷の模様もかはる屏風の比翼形一ト寝入りせし床の内咄しは漏て聞えるも小夜更たれば賑はへる花柳街なれど真とせし川邊に折々音するは送り向ひに行く船の艦の聲のみとはるれ「コレサ痛てへとな先刻から無言で寝て居るのを鼻を摘んだりつねつたりえられちやア樹も寝たりやアしねへ最そんな手荒な狂言は眞平た後生だから靜にして寝かしてくんねへな明日天満の仲間の家裡へ速くから集會する約束があるから能く寝なくちやア困るはさ(アホ、)、天満とやら新地とやらおれまへさんの仲間の人は天窓を太に結んでおはきな帯をまめて居まやうねへそふして集會たれ座敷へ出た時三線箱を持って居ますだらう其仲間の人か前さんに惚きつて命もなにも居らないと謂ふて咄合をするので夫で今夜は私の側で能く寝て置いて明日の朝から晩になつても寝なはでふかまやうと云謂ひのか糸へ夫はつありで最餘有で跡は開かないでも能ふございますよ伊夫ぢやアおれまへさん盛切り可愛そふぢやアありませんか(ハ、)、夫は大層痴ぢげへの咄だ天満の仲間が婦女ぢやアあるめへし元基夜寐ねへ

のは商法の都合にある事だから更に不思議にもあるゆへだらふ（ア、夫で夜が明たり何敷するのには怪い事も不思議な事もありませんがねへさんの商法が違ひますとアねへ（ナゼ、（ナゼと云つてもそふぢやアありませんか北の新地の姉さん達に甘い事はつゝりて謂だもんだから先では真に受け血道を分けてねまへさんの跡はつかり追廻して居るんだものを何坊はん尽の私だつても知つて居ますよ何さ夫はねめへの曲根姓と云ふものだ己だと云つて好きな婦女を自由にしてこよして一所に寐るるのに新地の藝妓の野暮なのを何しに惜い金を遣りて無様く情婦にした面白くもなんどもねへ外は兎もあれ其の事なら大丈夫だ（オヤまアねまへさんも此節は大分嘘が上手になりましたねへ人が何にも知らなかりと想つてアノまア不知くしい顔をしてそふは謂ふもの最初から氣遣る、のを承知しながら無理にこふして貰つたのも恐怖飛田の松原が私の爲めには結ぶの神妙恩送りを何時か一度またと想ひ待中にねまへさんの身の上にも係る今度の軋轢の咄しが私にとつては幸いと云へば不實に聞えるがねまへを兼ての恩報しを爲るに能いのは長町の頃の座敷に呼ばるゝゆゑと此間まで氣遣た座敷を面白可笑く勤めるも一箇は末までおまへさんに添送たいと思ふが志願ひ夜前も丁度治郎藏さんが子かたを運て阪奈津へあがつて私を掛たからもしや何ぞの手掛りを聞出す事もありはせぬかと急いで往と常例の通り悪申戯して遊ぶのを綾なす折から治郎藏さんが私の側で踊りはねたりしなざる其拍子に袂から出た書付けの手に知せず拾つて置てと聽ひて幸次は起上り（小夏ねめへは其の書付けを今でも其所に持て居るのか（ア、大事に仕舞て持て居ますがねまへさんより浮氣が過るから愚痴を云ふので忘れて居たよと云ひつゝおまへさんの中より取出し渡すを取るより行燈のあかりを直し惹き寄せ始めよりして終りまで讀下すこと二三編（ア、能いものが我手に入れた此書付けの文章では明

口翌々日の喉を限り押て來との合圖の手紙是がこつちの手にいつたか我親分の運の能いのか何に兎もあれ大事の一封小夏やうまア拾て呉れた（夫ぢやア幸ちやん此手紙が何かの爲になるどでぬすか（ム、なる所の騒ぢぎやアねへ此こと計りを聞んとして是まで辛苦をえたのだ物を爲めにならひでなるものか（ア、嬉しうと云ふ聲のみ聞えて跡は定めし又小夏は嬉しき夢や見ゆらん這等の編者が注意して聽きよく可にあらざれば看客自由に察たまひね

第十七章

天以三毒手二又殺三毒惡人

正午さへさまで賑はしからぬ春の日脚の長町裏の夜風をよ吹く真夜半に追ひつ、吼る犬を目的て手頃の小石を擲投げつ忍び寄來る一個の男顔冠にて面を包む腰には小長き一刀を横たへながら兼てより櫛子は委しく知りつらん棍徒の頭と腫物買を兼業にして世を涉る暫酷無頼の治郎藏が家裡的居動を入口の雨戸によつて窺ふこと大略半時ばかりにして打合點つく庭先へ廻りて取れば板塀圍ひ構へは厳しく唯者なれば容易に家裡へ忍ばんこと難きを伴の曲者は袂を探りて取り出す準備の鍵索手練つ、丈は九尺もあらんと想ふ板塀目懸て抛付くる手練の早業其索に傳はりながら板塀を何なく登り内庭にひらりとをりし身輕のやうすい暮待軒端にさ、蟹の糸惹きも渉るに彷彿り茲に六字の治郎藏は此夜に強く寐酒を過し年まだ壯き妾と共伏床にありて前後も覺えず熟睡なしたるひと間の内へ忍び入つたる曲者は夏猶寒き氷の劍を引提げ寄て治郎藏が枕を確と蹴飛ばすに驚きながら起きあがり兼て準備の枕刀をねつ探て抜んとするを扱かせもせず覺悟をまろと切付くるきつ先尖き太刀風に左の肩先三四寸深疵を負しが兼てより強氣の治郎藏殊ともせず何奴なるが知らねども臆病未練の欺し撃ち壁重傷を受けたりとも汝が如き盜賊に暗闘命を落さへきと無念の噴血を灑ぎ打籠む刀を曲者は叩き拂つてあざ笑ひ奴が窪んだ眼



では盜賊ならんと看ゆるか知らねぞ忍び入りしは金錢衣類を望むにあらす所望の品は波が首級  
 賞つて往から觀念して六字とあだなの念佛か又題目でも勝手なもの唱へて早く往生まろと所  
 を撰まず切付くるを受流さんと治郎藏も意はやれど最初の強傷に心神既に乱紊てや弱るを得た  
 りと曲者は踏仆しつ、治郎藏が首を何なく掻き切りて側にあり合ふ着物の片袖惹ちざりつ、首  
 級を包み立わがりたる不敵の振舞ひ實に治郎藏も積悪の天罰遂に巡り來て時運窮る故なるらん  
 か今夜に限り何時のごとく子分獨も居合せず家内にあるは婦女而已故現在家主は深疵を受け遂  
 に首級を取る、さへ見す、救ふ事を得ず這時件の曲者は始終のやうすを布團の中へむぐりて  
 聽し妾をば尻目にかけて刀を巾ひ鞘に祀さめつ首級の包みを小脇にかひ込み想つたよりも宿露  
 奴だと口中音ながら椽側の障子を足もて蹴開きつ、表へ出しが其儘に影さへ見えずなりにけり  
 什麼這の曲者は外人ならず初編の章に解き出せし大津の丸屋定助が獨子ながも放蕩にて七生  
 までの勘當をうけて故郷を逐轉せし彼の熊鷹の定三なり其定三が如何にして棍徒の頭の次郎藏  
 を撃つて首級を取つたるや夫にはやうすのある事なると尋ねて茲に解出すは第十二章に陳し如  
 く諸國を巡りて定三は遂に浪花に流れ付たな事もなく暮すうち大津にありし其時に隣に聽し  
 評判より子分も衆く賭場さへも盛んに出來たる塚の親分釣鐘長次の子分になり當分なり其大坂  
 地方に足を留んと思ひ付きしが素より長次に由縁もなく手引きを頼まん便りをも樹から墮たる  
 猿松一般取り着く術もあらぬうち此程長次と長町の六字の治郎藏が軋轢をなし既に日ならず治  
 郎藏は子分を率連れ塚へ押寄せ日頃怨みを結ひたる長次を始め粒立し子分を不殘討果し腹を癒  
 さん目論見にて準備をなすとの風説を實に蛇の道は蛇とやら諺に謂ふ早耳にて開出したる定  
 三は是我望みを遂んには這軋轢こそ僥倖ひなれやうこそあらんと奸智に富し懸慘不願の定三は

長次を便る初對面其手土産には長次を怨む彼治郎藏が生首を携へ往ば新參でも必ず白痴に扱  
 ふまじと思ひ付いたる此夜のありさす聽く者誰か定三の所業を憎まで止ざるべき問詰体題柳生  
 の幸次は小夏が手より治郎藏へ塚の棍徒の仲間より送りし手紙を得たる事天の救けとうち喜悅  
 び其夜のあくるを待かねて一報鶏の啼く音を聞や島の内より一目算に走り還つて携えし手紙  
 を長次に差出し夫この密書のやうすでは兩三日を過ぎすして必ず押寄せ來るとの文面這ふ切迫  
 になつたを知れば渠等が寄て來るを俟より彼の軍學者が教への如く先んずる時は敵を制し後  
 、時之制せらる、と去ば渠等が押て來るを手を束ねつ、待んより兼て準備のあるこそ幸ひ明日  
 とも謂はずこよひの内に逆奇なして治郎藏等が肝を碎むで遣んは如何にと雄るを長次は押留め  
 什は又てめへが血氣の勇にて反つて己が爲にはならず夫は如何にと押す時は固より長町一撥の  
 奴等が己を怨むは治郎藏が自ら來つて耻をかきまたい子分をてめへに殺され無念に思ふは理の  
 當然しかるに己で見ると時、渠等に意は受けるとも怨むる事は秒間もない夫も事此方から  
 好むに餘有無法に過ぎる併し手出しをされて見れば真逆損ても置けないから叩殺して世の爲め  
 に人の難義を救ふ了簡としてや向ふは盜賊同様夫も男を售て居る同じ仲間の者ならば又平氣で  
 も居られねへ場合もわれど盜賊を好んで敵手にせずとも能い事なんとて先へに分つたかと義理  
 分明なる長次が辞に流石の幸次も一言なく感腹して居たりけり時に幸次よ這一通いごんな理  
 屈でてめへの掌にはへあつたのか己も勘しは察して居る夫とも違ふか知らねへから咄して見ね  
 へと親分に聞れて幸次は天窓を掻き夫はれめへの察しの通り勘しも違ひはありやすめへ實は小  
 夏が夜半の事私に涉して呉れたので是が我掌に入りし事天の恵みど押頂きわれにも厚く禮を陳  
 べ夜のあけるのを待かねて飛んで飯りし今朝の始末といふのもわつち獨の正風に出來た事ち

井 雲

やアねへ矢張おめへの差圖を受け生人形の綾釣を上手に仕上げし器師其狂首の筋書も親分れめへの寸法が甘くとまつた小夏の所作事陰では何時も親分を楠真田の智恵よりも大分うへだと謂つて云やすと二個はどつと打笑ひ向も餘談に及ふ折しも表の格子戸瓦解と開き免なせへど入来る者あり其歳頃は廿三四男は左迄大風俗ならぬと一癖あるべき面構へ何やら包を携えつゝ取次に出し子分に向わつちと大津の出生にて其實名と丸屋の定三態とを訪來いたしたとこれ目にか、つて親分さんには頼みまふす一條あり唯今宿にあらまればどふの宜くお取次ぎを無闇矢鱈に辞を下り頼むを聞取り其由を主長次に取次げば名前も聴ひた事ない知らぬ者だが已にあつて頼みがあるとの口上ならぬな咄しか聞ひて見やう此方へ連れて来るが能いと云ふに子分定三を伴なひ連れてひと間にいれば長次は安苦樂の膝を直して火鉢を已が前に突出し時候の挨拶手短に陳終りつ、扱云ふやうわつち合つて頼みがあるとの事はどんな咄しの聞かせなせへと定三の問れておめたる氣色もなくわつちは先刻もやすしく生れ故郷は東海道の大津の宿の濱通り家業は米屋の仲買なれと親の子ながら小兒の時より堅氣の家業は蟲がさうひ素より氣隨に生長し其悪癖が脱やらす追て廻つて十四五の年の頃から何時となく三尺帯の遊び仲間と交際初免しが病を付きて奇よ偶よの樂みが三度の飯より好物となつちやア半日片時も家裡には尻が据り兼終にやア親の勘當を受けて天竺浪人と巨籍を換しも去年の夏大津の土地も狭いだけたまにやア親治や親類の眼に懸るのが面倒も感心せず寧ろの事に東海道を東下りを目途をら伊勢路より美濃に蒐つて岐阜さん界段に掛ても感心せず寧ろの事に東海道を東下りを目途を轉じ尾張の名古屋に巡り出て白根詰ても鯨魚の鱗の金の延金でも降ては來ねへ土地の不氣色も云ふ所ふ長居をしちやア財布の底をばたくが落と宮まで出て跡長り明暮伊勢路を大和に通ひ

此内やつと大阪に流れ付いたは能ひげれと廣い土地でも一個として知己の無いに大困り併し壁に云ふ如く住ば都府の隣にて又能い事も涌て來やうと思はず知らず滞留するうち大津に居た時親分の咄しを聞ひて親はしくどふか便りを需めたなら親分子分の盃がしてれき度との咄しは長い這等で一腹仕つらん

第十八章

俠客惡不義放逐定三

此時大津の定三は携來りし風呂敷包みを火鉢の片側長次と幸次が間合に差出し扱云ふやうわつちの願ひは外でもない子分の端へ加へて貰ひ何ぞの時には命を損ても善惡兩端の差圖を忌嫌ず這ふ中しちやア濟ねへが力になつたりなられたり夫が志願で日頃から親方れめへにわつちが胸を割てれ咄しやそふにも雁と燕の便りがねへから思ふばかりで出て來れずどふがな爲やうはなからうかと案じ煩ふ其矢先にちらりと聞ひと治郎藏と這度の軋轢は親分に對面にいもつけの幸ひと思ひ付いたる此手土産納めて願ひの叫ぶやうどふか頼みいたしやす件物の包みを押出せば長次は始終定三が語るを聞て居たりしが此時喜世留をかたへに置き先刻からして段々とれめへの咄しは聴きやしたが見蔭のねへ此長次を彼是いつて下さるのは過分の譯ゆえ思ひみの通り今日から共に力となり苦樂も一所にまやまやうが様子あり氣な土産の一品先兎も角も拜見すべしと件の包みを惹寄せて結め固き風呂敷をほごひて見れば這り何ぞに想ひ覺け無き男の生首打驚きて長次を始め幸次の固より次の間に扣へし子分も目と目を見合暫時辭もなかりけり結て長次の生首を尻眼にかけて大津の若衆念のいつたる此手土産見れば時さへ過もせぬやだ 嘆き血しほの匂ひ至てへ何所の産物で名前はなんと云ふものだと聞れて定三莞爾笑ひ死首なれと呼吸ある内は人にも些少は知れた奴親分始め義兄等もどこにか些少の見覺の漫更ないで

井 雲

もわりやすめへ併し名前は五字の治郎藏其治郎藏の死首をなんで土産に持て来たどの親方おめへ些少わづちに分りやまねへこふして隨身するからにやア恥めへの爲にならねへ奴を殺して軋の根本を断ちやア意趣も遺怨もないと云ふもの往昔で云へば侍が殿の馬前で敵を討ち又の討死するやうな手柄をなして高祿にあり付く理屈の此土産土産更忌嫌ではありやすめへと鼻を刺し高漫而長次は聞くより膝立直し無言定三てめへのやうな大悪人ひいと間に入れるも穢はしい不用の死首掻浚ひ切々其所を立去と以ての外なる長次が辞に唯の者なら驚くべきを好智の定三些小も恐れず親分何にを怒なざるのか厄害抜ひが他人の手で出来た之能はが此事が若や後日に公開になり捕分がへるるを強恐がつて折角来たを突出とは夫ぢやア男と以れめへ窮乏懐裡に入る時は獸男も是を撃ずと聖人とか變人とか云つた辭があるぢやアねへか夫に便つて来た者をすげ無く突出す了簡之罪説に聞たど大變ひなすと威してわづちが氣を惹いて見のねへ親分無口といつたに雀舌のかてめへのやうな義氣もねへ猫か鼠か知れねへ奴が子分所か風上にれくのも己は眞平だ云つて聞ずも無の事だが突出れるとて先へか云ふから其因縁を開して遣アて先へが己に隨身して來なら來るで眞を以て足引き手惹が入る物か如何でも尋て來るが能い夫になんぞや一點の怨みは素より顔さへも見た事のねへ治郎藏が寢首を搔取り知己きの土産に持て來る了簡は慙慙する犯罪人また治郎藏を殺して能けりやアて先へなんぞの手い惜ねへいつ何時で己が掌で自由に命は取て遣る軋と云ふも向ふで謂ことこつちと毫毛治郎藏に怨みとねへかから損てれくのを横合から入る世話の血祭り仕事夫ゆえ首之所望にねへのだ是まで云つたら善悪の差別の分らぬてめへにも些少は耳にへるだらう最云ふ事も聴くこともねへから疾く出て失と劍もろろの勢ひに再び辭をかはさんには素手てと還さぬ其場の模様は大膽なれど定三も

恐れをなして羽無鳥立ち端に後れ跡まより手持ち無沙汰に生首を再び包んで撥換さへそこくにして立去りける實にや長次は博徒なれども俠氣頗るあるものゆゑ義に進んでは命さへ損るを更に惜まざるも不義不實なる振舞を又憎む事甚しく去ばこそあれ定三が治郎藏殺し其首を携え來しを喜悅す還て是を退けし世にゐる偽俠の長脇差には稀なる者と云はまくの心懸て後釣鐘長次と藝妓小夏が眞心を深く賞美し自ら若干の金を散じて身受をなし己が養女に貰ひ取り更に幸次が嫁どなし自分の跡を兩個に譲りぬ道は是後日の咄しなから事の序次に記すのみ去ば長次を始め幸次小夏又治郎藏の部下正八の事もすて是より條下に話し無し前解定三は事十分になるべしと構し所作もいすかの紫と喰ひ違たる釣鐘の長次が辭に詮方なく迷るが如く立去りしが今更贅物の一ト包み持ち多量して肩先の凝ては思案にあたりざる無益の殺生去ながら途中へ此儘損もならぬに當惑なしつ路すがら提ぶら〜いつとなく急がぬ道も果敢もきて正午さがる頃大阪の道頓堀の彼方まで飯つて見れば猶更に入目の繁さに詮方無く兎やせん角と考へしが土葬にすることを面倒なれ寧ろ手疾く水葬にするのが世話のやけな理屈アわれながら道ふいふ事に氣の付かさりしは白痴なやつたと急げば廻る大川端往來少なき藏郎の川岸を巡りて包み中へ石を拾ひつ押籠では沈となして深みへさんぶり抛込みながら見返れば人の影さへ七ツまへ哀れ無情は行く水の流れも同じ人の身の果ていよとみし泡よりも果敢なく消る鳥邊山煙りにあらぬ水の音聞く人誰か定三が所業を跡に憎まざらんや是はた大津の善通寺にて父定助が偽りを眞と思ひ詰しより非業な際期を逐たりし祇園の藝妓秀鶴が無念の怨魂この世を去す思ひを晴さん其が爲めに其の一子なる定三に償々ものかと思ひる。間話休題て件の丸屋定三の望みも果さずいッ迄か茲にあらんも甲斐なき事と其夜の夜舟に浪花を出んと八軒屋より三十石に

便船なしつ其よく日京都の知己を音信で流石に故郷のなつかしさに大津の模様を尋ねるに知己の人の定三の顔を見るより無事なるを先祝しつゝ扱云ふやうなまへは何時大津を出たきり一テ度も家裡に飯らぬか夫とも今日は大津から出て来たかの尋ねられぬまへは何時大津を出たきり一テたまた東海道から伊勢大和と巡りくつて此年の春梅咲く頃に浪花の本に流れ着いて計らずも花の彌生の昨日まで滞留なしてゆふの夜舟で登つて来よゆ大津へいあれ切り飯らぬいたしやせん夫いそふだが出た跡に大津に變はありやすめへ夫ぢやアねまへの知らぬい理り變つた所か去年の暮定助さんは氣病みかこふぢ死なられたのに引き續き母も明けて正月の末であつたか長煩ひもまないで死なれて跡にくら聞こふいふ時に定三が敗心なたら何所までいも尋ねて家督を譲らふにと母は始終云ひ呉らし泣くらしつゝ死れたやうすと聞ひて左までに驚かぬ不孝の定三去ながら人のまへゆゑ名聞に打驚きたる顔色なし其れ咄じやア本眞の事かね目出度筋を書たのなら嘘を吐ても面白いが眞逆愛ひの愁嘆場を作つて咄しもなざるめへそふして見ると勘當を受た不孝を詫るにも願ひの綱の切れた定三濟ない事を致しやしたと口には云へ意ではそれが其場に居在せたらあり命道具の云ふに及ばず地面も郎も丸取に爲て遣るものを居合せぬへので是はつかりが残念千萬時に親父も母親も死でままつて其跡はさふして居るか分やせんが私だつても夫から後いめつたに大津へ往ぬゆゑ委しいやうな事は知りやせんが母が死れた其時から殿村さんといふ方が皆引受けて商賣も以前のやうに爲てござればれまへも意を人かへて返て家裡を取らせへとやうすを知らねば其人の云ひし辞に一物を胸に浮べで定三のまた近日に尋ねんと此家のあるじに暇間を告げ大津に至りて何をかする次の條下を讀みて知るべし

第十九章 聞父母死一定三歸故郷

恚て又定三の其日の 嘯刻にありけん漸く大津に飯りしかき固より我家の事なれば突然飯宅もなるべきに今は此世にあらずとも亡父母より勘當を受けしものから勘當をこけ人を屠るを殊とせす無慙ぶらゐの定三でもわれから數居が高くなりておらりとかへる譯にもゆかず詮方盡て其以前殊更親睦く交りし賭博の友の家裡を音信諸國を巡り京都まで登つて聞は亡命あとで兩親ともに冥途へ旅立ちしたとの咄しを聞ひたゆゑ飯つて来たが勘當を受けてゐるので我家でもぶらりと飯るも聞かゝるさに膝も談合三個よりて絞れば文珠の智慧もでるかと言ねて来たといふずを聞き同ト仲間のならずもの善に組せず悪ならば血に残りし骨までも残さぬ同氣の病ひ犬嘯付く事なら一ト足も跡へはさからぬ合棒にれつと承知のむかふ從醫勘當されたにしろ親が亡なりやア悴が世嗣ぎ家裡へ飯つて大の字に乘て我儘を云へば迎他人がなんとも吻唇を出して何とも謂ふ事の秒間もできるものぢやアねへてめへにも似ず勘當をされたといつて其親の居ねへとなれば了簡を違へて堅氣に新店を出し代たとして勘當を許すとしてめへに云ふ者が唯の一個もあるものは是を佛が草葉の蔭で宜や何とか思つた所が死人に口無しまかたのねへ隣併しをいらの聞ひて居るに暮から蒐て春さふく二個の親が死れてからソレ本家とたつてゐる殿村から來て萬事の世話をして居るやうすで見ると時は喧嘩をまては追目に變つて反て此蜂とらざるから思按はさふでもせずは成免へ夫なら今から思按もしてサ五椀の酒をひつ掛て其勢ひに飛び込で家裡に居いす奴等とも端から敲き出したらさふだそふした所で己がものを己が得意にするのだから故障も後生もあるめへたらふそふまた日にやア乱法で爲には反てなるめへヨ夫にてめへは知つて居るかまた委しくは知らねへやうす知らざア咄して聞えやうが二個が跡にはてめへばあり外には世嗣にするやうな子供の無ので本店始め又町内の年寄たちが種々相談したうへ

で出戻りをした殿村の妹、娘を養女にして、秘間貫兒咄しの中だが今いつた出戻りをした娘と云  
 のは小珠さんの事ぢやアねへかウムそふヨ己は細かく知ら無いが尾花川の川瀬のうちへ嫁つた  
 娘の妹だそふだ夫は去年の春の事京の四條の剣刀やで滅法命のある家理へ嫁に入つたにそふ云  
 事で返たやら夫にも咄しのある事ヨ其剣刀屋の家主といふのは二條の通りの大きな屋で徳屋  
 清兵衛とかいふ者と同じ仲居で先年から勤王との銀納とか諸藩の浪士が来るやうな入る真似  
 に意を尽し將軍様に手向ひして今は京へも出入をする事さへならぬ長州へ所の密事を探索し  
 通じたやうすを壬生の浪士後に新撰組と唱へしなりへ告た者でもあつたと見え時刻も移さず  
 壬生浪士は其かたな屋へ押籠で家主を縛つて六角の獄屋へ押籠み日にも毎日本陣の壬生の郎へ  
 志出し所所の密事を聞出した手筈はそふして需めたり迎も其方一個でへ怒る大事の謀りれど夫  
 への宮か公家方か定めし徒黨の者あるべし示のみならず長州より斯殿重なる其中へ身体を變じ  
 品を換へ探索なさん、爲に登都し者をも其方が密かに懸し居るといふ風聞確平に聞及べば今更  
 包み懸せばとて其儘事の濟へさや威在体を白状しろと或の恐喝し或は和解さ問も彼のかた  
 な屋は町人への最劣づらしき強情張にて更に白状せざりしかば終には答に打敵かれ脊筋の肉は  
 破れつゝ氣繩をすれば薬を與へ呼吸ふ返せばまた打敵けを白状せざれば其日よりして六角の  
 獄屋へ送る事を止め壬生の獄屋へ入れおきて夜ひるとなく拷問の序次に手強くなるに付け身の  
 鐵石にもあらざるゆゑ責苦の爲めにかたな屋は獄屋の内にて死果てしかば町奉行所の沙汰に  
 て家財雜具はいふも更なり有金地面屋邸まで儘も残さず刑處に逢ひ跡に残りし家内の者は十方  
 に暮て居たりしも詮方なければ親類をもへ威夫々に惹取しゆゑてめへの尋ねる其娘も片付きし  
 より問ひなければ降つて涌たるかたなやの其大變より戻つて來たを丸屋の家理の養女となしお

松さん(定三が亡母)の甥でてめへと同年ぐらゐの金助といふ男を貰ひ夫婦になして丸屋の布簾  
 を掛て家名を相續して確乎と家業を去て居る所へ滅太にてめへが飛び籠で曲見の權太を極めた  
 といつてもてめへの爲めには目上の伯父やまた殿村の旦那が居るから甘い工合に往ば能が已等  
 への迎もむづかしからふと夫ぢやア貴君の了簡でいまアそふしたから能いといふのか已には迎  
 も考へかねへから智恵を貸てくたせへ其變りには山となりまた川となり法が付けば禮はそつと  
 りしやすせへ夫と云いずと知れた咄しは無錢で文珠の智恵を貸ては鼻の頭の五重の塔七堂伽藍  
 の此口がそふして修羅がなり物ぞ夫とも手足も延さずして耳も僧衣で包んでままひ達磨大師と  
 來た日には聞ずし手足も遣い無いからね禮は本來無一物でも蘆の片葉の船ゆさんあふない事業  
 をせぬ變り已も苦勞のまない隣だか咄しを割て聞ひて見りやア万血知らぬ顔もならずだといつ  
 ても外段に工風も無いがこふして見ねへな今夜のとも遅い事ゆゑ此家へ泊つてあすの朝長脇  
 差をかくして置き家理へ往ず殿村の旦那に逢て餘の事は何とも謂はずに表向は飽迄改心した  
 やうすで私こは幼年から能くない路に迷ひ籠み兩親はじめ旦那がたにいかによ世話を掛  
 たる末終には七生の勘當まで受けて諸國を巡るうち風とした所で兩親の死だやうすを委しく聞  
 き慮これまでは不孝をしたが兩親ながら死なれたと聞ひた其時ハット想ふつて迷ひの夢が始め  
 て覺後悔すれども跡の祭りせめては墓へ參つてなりと詫をまやうと思ひましても夫さへ得手  
 に往事のならぬは此世ばかりの事か七生までも勘當を現在受けし不孝の私先非を悔しを詫状  
 に代て旦那の供をなした亡父兩親の墓まありにね連なすつて下さいましと眞のやうに旦那に頼  
 めば向ふと大家の世間をらすてめへが改心した振を甘く其場を遣りたふせばコレこそ他人の事  
 ぢやアなし親の身ふたつにして一箇とてめへに涉すの必常よしや夫程いらない所が千や二千

の遺物の金はきつとてめへが握るのは己の眼で睨でゐるからそふして見るが能からんと相談相  
 手も邪奸仲間其入れ智恵の長談義聴聞して喜悅ぶ定三其夜之更けて三井寺の鐘も潮水の浪に響  
 き早九ツと聞ゆしかば此所に泊りて白河夜舟漕ぐ之尉の音のみなり憐りし程に茲に又殿村治三  
 郎は己が親へ亡ひてまた年立たぬ其中に無二の友なる定助さへ久し敷氣病を煩ひて死る間も  
 なく其妻のお松も果敢なくなりしかば其の愁傷は方ならず固より篤實なる人も悲憫不孝を  
 他事に見過しめせず松の身元其何某を始めとし四隣の内乙町内の年寄役を諸どもに跡の事  
 ども談合するに實子之あれども無きも同じ跡目の相續する一條は彼の定三に構ふに及ばず幸ひ  
 松の甥なりける金助を跡目に直し其運合には先代より交り深き殿村氏の小珠さんは下さるな  
 らば佛は更なり我々までも是に越たる喜悅なしと一同よりの懇望では再三辭退をして見ても承  
 知すべくもあらざれば終に殿村治三郎も其意に任せ妹娘の小珠をまゐるやへ再縁させ事ようや  
 くに纏りけり

第二十章

以百圓金殿村試三曲直

恁て又定三は彼の悪友が入れ智恵に早や身代の拆半を着服なせし心地にて空嬉くてえも寐れず  
 早く此夜の明よかしと幾度となく寐反りしはたは煙草の輪を吹て圓く咄が纏まれば俄長者の  
 旦那株黄金の花を蒔散し東海道は五十三驛大津の宿の親分は此定三が喰留めて名を關東まで鳴  
 響かし世を涉らんこそ樂しけれと捕ぬ狸の皮算用に春の夜なれば明易く兎角するうち朝飯の仕  
 度も出来し厨屋のやうすに天の岩戸にあらねども布團の扉を開き出で遣ふ手水もそこへ朝  
 げを仕果て定三の小二朱ばかりの菓子折準備をなし殿村の表にイみやうすを觀るに往古に  
 かへらぬ店が、りに流石無頼の定三も今更心に憶しけん這入かねしが此儘にて止むべき事にあ

らざれば内に進みて來意の由を陳れば間なく手代の者は家主の差圖に定三を客間に誘ひ手あふ  
 りの火鉢を運び茶菓子を進む其扱ひの丁寧なるに安座もならねば詮方なく丸むきにせし膝小僧  
 雙べて眞面目な面付きをした積りでもきよ付くさまは護摩を焚れて祈禱に逢る狐つきにも彷彿  
 御り憐りし程に治三郎も今ハ年齢さへ五十に近く白髮交りの分別盛々固より温和の生質なれ  
 ば眼下の者として賤しめずまたは眼うへの者なれば迎道に逆ひし其時は憚る事なく意見を陳其曲  
 れるを直すといふ君子の風ある治三郎ゆゑ彼の定三も他の者と應接するより痛み入りまた面會  
 もせぬ中から天窓を掻き待居たる侍事大概今の時なら二十分とも覺しき頃間居の襖靜に引明  
 け立ち出でたるは外人ならず此家の主翁治三郎は片頬に笑を含みつ、一別以來の挨拶より續い  
 て定助夫婦の死去を悼みし辭を陳をばり扱定三が尋ね來しやうすを聞にぞ定三は哀れに咄しを  
 くらえんと思ふものから出もせぬ涙を出さんとして目のふちを鼻鬚にこすりて悪友に教へら  
 れたる一部始終を漏さず殘さず陳終るを幾度となく合點きて聞終たる治三郎は开も定三のやう  
 すを窺ひ此奴諸卿を喰詰めて進退きはまるゆゑをもて餘義なく這地に立版り聞ば計らず兩腕の  
 世を去りたるに引續き跡目を相續せし者母の甥にて従弟同士小珠を遣はし嫁合せしが我生れ  
 出し家と雖も無法に踏籠み財産を横領せん事容易にならずそふして觀れば下から出て咄しを付  
 けるが上分別とさは云へいまだ定三のやうすと見るに改心をしたとは云へ偽りならんさすれ  
 ば体能く最前より列へ立たる藁條も類は友なす惡漢仲間に入れ智恵飼れた其證據の兼てに似合  
 ぬ咄しの爲振併し定三なればとて人間なれば萬が一にも改心せんにも限らぬ事なり然れば故人  
 定助も夫を氣病の早死なれば若靈魂のあるものならば今定三が改心せしを見れば嘸かし喜悅な  
 らん先兎も角も云ふ如く改心せしが誠なるのまた偽りかを試すにしかと分別疾に儲けしかば

奥に入りつ、百金の包金をば持ち来るを一目見るより定三はこいつ變だと思ひしがやうすを  
 聞ぬ其中には滅太に口は利れぬ所と片唾を香で待居たる態で家主の定三の先別よりして聞ひ  
 た咄しが残らず真で改心なれば亡き兩親は云ふも及ばず第一貴様の仕合せなり示のみならず金  
 助の妻に小珠をして見れば今では私も親類の慈愛もまた慈意の格別にて貴様が心を入變て眞の人  
 となられしなら何外事に思ふべき誠に喜悅に堪ざるなり附ては親の墓参にも誘ひ往んが本意  
 なれども今日しも晝にならざる頃に本多の家老のれ出があれは直には同伴なり難し尤も貴様は  
 改心して今日と昨日の定三ならねば獨墓参をすれば迎何しに佛の怒憤べき又勘當をすればと云  
 ふて憎ふて親の暮るものならず可愛さあまつて行儀の爲或は世間の侮を防がん爲の準備なれ  
 ば私が一所に詫すとも貴様が改心したやうすを慙化をなすが反て喜び又此包みの百兩は今日よ  
 り貴様が押了のに資金がなくてと叫ぶまじと聊ながら私が寸志是を資金の土蔵として押了  
 で手際を見すべしと出されて再驚く定三は是では咄しが違つて居ると云はんとせしが治三郎が  
 退引きさせぬ金釘の辭になんとも二の句と續すまた友達に相談なして再度の仕事を持込んと想  
 ふたよりも些少金に腹はたてども茲で今下手に咄ををした時は此百兩も貰れない始末になつて  
 い是も損だと眞しやかに百兩を幾度となく押頂き退從薄陳べたて空笑ひして立ち去ける跡に  
 て殿村治三郎は此奴眞に改心せしや偽りならんか試ん爲先彼の百金を解にしてやうすを見しに  
 百兩を不足に思ふ奴が了簡案に語はず改心といふは偽り耶さまなら再び來つて親の身所を半分  
 割て貰ひたいとか資本が二千か三千も懲いぐらるの掛合に必ず來るに違ひない噫人間も定  
 三のやうになつて困たもの固より丸屋のれもひじよりも餘慶の金も動産もある身代の事ゆゑ  
 に奴が本眞に改心すれば見れば居られぬ實子の事また相談をしたうへでとふども咄しは出來る

のに見下げ果たる不所存ものと獨こちつ過すうち大概もの十日あまりも立つかたぬに或  
 日の事又定三は面會がまたいと尋ねて來りしかば始めの如く賓席に通じやうすを聞に此度は以  
 前に變りし權幕にて察しに語らず身代を實子の事ゆゑ返して呉れるか夫とも都合がわるいとな  
 らば此方も野暮は云いぬから三千兩は資本の金を貰ひ度との無法の掛合併し手數が悪るゆゑ  
 此面倒なら此足で金助夫婦に咄しを煮やうか二箇に一箇の返辭が聞たい旦那わつちのいふ事が  
 万血無理ではありませぬと巻舌交りて留ともなく編羅く得意に雀舌たつるを聞居たりしが  
 治三郎も此奴を捕へて道理を列べ開けた所が糠に釘馬耳東風の底抜け野郎素より好む事ならぬ  
 と以後の爲めゆる詮方なく威て堅く警戒めやらんと治三郎は日頃温和の顔色を換て身体を改先  
 つ、莫言定三最前よりして聞ひて居れば得意次第の強慾強談斯あるべしとは兼て知れり日外改  
 心せし杯と偽り構へて來たりし時嘘事なりとはおもひたりしが萬に一箇も曲りたる心の直りし  
 事ならばと餌に與えし百兩の金を不満の其坐の顔色夫ゆゑ今日來て強談をするのは承知の治三  
 郎貴様は親の身代を兎や角云とも定助とは親子の縁を切た宿無し其證據には貴様が名前檀那  
 寺にも代官所にも記して無いのが無宿の印夫に何ぞや人並らしく確乎に跡目相續を去てある丸  
 屋の財産に物云ひせんとは不埒の白痴者今日を限り此家裡へ立入る事と稟すに及ばず丸屋が  
 家裡へも片足でも踏込む事と決してならぬ懲断りしうへから云ふを用ひず踏込む時は不孝  
 の罪は云までもなく是迄犯せし悪事の藤々證據をあげて金藏の代官さまへ訴出で辛目見せて  
 懲して呉ん覺悟を窮めて争ふとも又は己が身を慎むとも得意にあらんと以ての外に呵懲され定三  
 も固より大津に在し時悪事を再度働きては親は更なり治三郎にも一ト形ならぬ厄害になりし事  
 さへ勘から拵は怒憤の餘り齷齪を發て告訴せられては疵持足の定三は始めの權幕とこへやら

十七 猫に睨れし鼠の如く意に強く恐れしかば俄に頭上を疊に摺付け詫る中にも金の無心を鐵面皮も云ひ出せば捨るも同じやうなれど這度限りの惠金にと又五十兩定三に異て前途を警戒する辭は耳に入れもせず胡疎くとして出て行きけり

第廿一章 寡婦解惡夫一頻驚毒計一

故も大津の宿なれど其町名と定かならずに鳴と呼ぶ寡婦あり日納高利の金を貸其生質固より貪慾なれば利にまた利をさへ加へる事を何よりそのが快樂なりと鳥ががアとなく朝より終日市中を駈まはり或は傍有徳の人の依頼をうけて圍女又は妾の媒妁をなしては謝金を貪るを家業の如くするをもて折にふれては意外の金の儲けがあれは懐は儲豊なる春氣の駒意の猿の狂ひし男の跡を慕ひて軒端をさまよふ彼の戀猫の類にあらざるといへばは鳴も口き夫に探あり氣に聽ゆるなれどは鳴と固是淫婦にして尻の締之春の雪解て結ばる事となく去き其生質強慾にて其逆の時手切れの金をいすぶり取るし事を怕れて無闇に情を施さず又何程かの金になれば男を撰まず轉び合ふ實に女の白痴者なりけり开も此寡婦の夫なりし其當地の仲坐を勧えつゝ惡漢のみ善き人をも威いためて賄賂と貪取りて之飽事なく榮耀に金を湯水の如く遣ひ損つゝ懐ろの空しくなれば惡法を考へ出しては人を痛むれ鳴も是を宜と想へば夫の爲めに惡を補けとも富貴の片端を窮むといへども天罪の免かれ難きゆゑにあらん夫の其歳三十を僅に越て天死せりとぞ因に云ふ仲坐は則ち關東にて尾引西國にては目明と呼ぶまた犬としも綽名するものなり犬とよべるも則ち故あり犬は鼻にて臭みを嗅事其生なれど窮めて妙なり彼の目明も臭さ奴則ち罪を犯せし者の潜伏居るを曝出し捕へる事を勤勉とするにぞ犬とは綽名を負せしものか固より牽強附會の説にて取には足ぬ狗の足跡尿一般なる考へなれども事の序の辨するのみ問話休題て彼の角鷹の

雲井の一

定三は慾に眼のなき考へを入智恵されて殿村へ尋ねて親の不幸より改心せしと實しやかに陳べて言ても貰た金の想ひし己が引當の十分一にも足ないので不満に想へど兎や角云へば跡の仕事の障りにもなるのとならず流浪して売財布なる今日此頃久振りにて百兩の山吹色を澤山そふに入らね〜なんぞと云ふでもないと持て歸て定三は仲間の博徒を呼び集め肴は琵琶湖の鯉を洗ひ酒は伊丹の醸をえらみ飽まで食ひ飽まで飲み酔に乗じて花街に至り前後を構えず金のあり丈遊び盡して懐中の淋しくなりて又殿村へ這度の本音を顯して掛合こんだが治三郎の怒しやうすに當事と又犢鼻輝の前からとづれやつとの事で五十兩惠みを受し其金さへ残り慙なく遣損て浮羅づく内に定三は寡婦の鳴が輕口に酒の敵手になるのを喜び明暮尋ねて來るが始めて同氣もどむる姦夫と姦婦咄しの馬と一物の馬のやうなる定三が彼の持物さへは鳴が身には丁度とまつた咄の相交つひ轉び寐の夢の間にさふ約束を堅めしならんか〜べつたり流籠と今は人眼も憚らず夫婦寢さきに暮せども彼の定三の惡徒にも似合しからず働きのなき者なればは鳴が厄害素よりあ鳴は定三よりも五箇六箇も年重にて常には強慾非道でも年じたゆゑか定三を憐れ強く煩りて賠へ金も何時となく次籠む中に塵も積れば山となる譬の如く身代も流元なる桂に似て曲り掛たるれ鳴が懐中固より寡婦の喰延し僅に高利を貪りしとて高の知れたる巾着錢に男妾も一般なる不働となる落着者を喰せて置ば重簞笥にたまひ籠たる小袖さへ一枚二枚と袖にかくし質屋通ひの多忙しく去ば始めと事變り手足と口は達者でも自由の利ぬ世帯の不廻りをふなり行けば僅の事から物云ひ喧嘩の絶まなく出て往け行くとの争ひから終には有合貪乏徳利をれ鳴の天窓へ抛付ければ是も其儘了簡せず手當り次第に皿茶碗を抛け反しつゝ噓くやしいと所をかまらず噓付くをそらはさせと横面を振拳て張仆す音は更ら板屋根を殿の打に異ならずこふ立廻

一十七



りの烈しき時だも四隣の者に日頃から憎がられたる二個の事ゆゑ取納んとて来る者なく果は喧嘩の側杖と同じ長屋の甲乙に打て蒐つて面倒なる軋轢をさへもする事あれば件の二個の振舞ひと疫病の神より怕れ入り口出しする者あらざりけり去ば喧嘩の云ひ蒐りにて別るゝ事かと思ふに似ず又いつとなく打和解きて五合の酒を二合半割て割なき水入らず火鉢を間に差向ひ酬盞の摸様ならぬ夜半は雨もそは降て忍ぶ咄しをせんには能い宵の中より飲初めほる酔ひ機嫌に廻り來たれ鳴之呑飲す盞を定三に酬扱云ふやう男と生れて働きのあつた無いの違つた者親から授かる結構な其身代を入手に盗れやつとの事で百兩と五十兩との仿金で再度と往れぬ縁切りに怕れて金のたんとある殿村さんの金の墓を掘てたのの白痴くしい毒を喰へば皿までと度胸を窮めて飽まで遺て除るが男の生根を其儘捨くたるとは度胸のないにも程があることと聞いて定三夫と其事已だといつて寶の山へ入つて空しく止て來たのも深いやうあることゆゑ金といつちやア最取れねへ併し親治と友達で今でい娘を己が家裡へよこして見れば問近ひ親類夫に不實をする殿村何ぞの時は怨みを報ひ腹癒せんと意を配り氣を付け睨つてやうすを見ても向ふの大家で落度がないゆゑ今日まで蟲を殺してゐたが坊主が憎けりやア袈裟迄憎いと聞出したのは惚領娘の嫁つた家裡尾花川の郷士の川瀬は此頃お上で嚴重に詮穿のある浪人とい味になつて長州の國へ降つて二三日まへ飯つて家裡に潜伏で居ると風とした事から曝出したが是ぢやア敵が取れねへだらうかてめへは基が目明の妻アになつて添て居たも云ふ事には馴て居るから寒冷膝でも談合すると聽ひて笑頰りた鳴は喜び夫こそ天の與えとやらまア能い種を聞て來たことまたたたまへには咄さなんだが最十日布を後の日に前の亭主の仲間うちで見眼の利吉といふ人に金藏まで逢た時わたしは戯談半分に私の内の定さんもしやうがなうて遊んで

第廿二章

節婦自殺千歳遺芳名一

居るから儲る咄しを附してれ吳と夫では一番金儲けの種をたまへに教へて遣から内のと篤苦理相談しねへ其金儲けは外ぢやアない客年の七月長州が京で戦をしてから此方幕府で嚴重く浪人と又長州へ合體をして居る者を強い御詮議者其やうなる有論な者を探索なして壬生浪士の新選組へ密告すれば褒美の金を降さると代官所まで達しがあつて仲間の者にたつた今町係りの旦那衆より云ひ渡された金儲けこふ云ふ仕事は滅太になしたまへも基は夫者の亭主に添て臭味を嗅出すことは我等よりも反上手又がき出して壬生の邸へ訴へ出るに鑑札が下つて居るから持て往きナ鑑札なしでは役所でも受付けないから念の爲め咄しておくと教へられたが迎も浪士のやうな者が此方の手効には合ないと遠夫なりに咄さなんだが今の咄しが正眞のことなら何時長州から飯て來て外にも有論な浪人が居るか否か探索して訴へ出してお遣りなと彼の雌鷄が農する辞に漏れず定三が日頃からして怨みをもる殿村一家の續き合ひ川瀬がうへを探索する江戸の敵を晴陽で討と云はるゝ了簡違ひ怨みと怨どの二道に迷ひ入りたる姦夫と姦婦其心底こそ憎ましけれ

茲に又川瀬大宰は去歲の暮に長門に降り再び故郷尾花川に飯りしかども此春は又一層に幕府より慷慨有志の云ふも更なり長州族へ加擔の志士を探索する事等閑ならねば胸に幕府の因脩を憤怒しながら正義士は時の會るを一日千秋世を忍びつゝ待居たる憊る形勢なるをもて川瀬も深く世間を憚り他行をさへもする事なく唯家裡にのみ垂籠て梅は咲出で鶯も初音を告ぐる庭の面霞は三井の鐘を包み空うう若き昨日今日ももの思ふ身へ春としも意時めく事之無く往昔の友と語るをのみ樂みとして取り以たす書籍も迄頃大坂にて梓にのばせし忠魂録文天祥が獄に下り

悲憤の餘り正氣の歌を綴しと云編に至り想はず川瀬は今の世の時勢と事の彷彿たるを讀むに懐  
 慨胸に溢れ往昔も今も倭者は榮は忠義に凝し者は捐する是天命との云ふもの、又詮術のあらざ  
 るかと獨いちつノ忠魂録を繰返しつ、讀む折しも静江之宇治の木の芽を煮て川瀬が書齋に持來  
 り茶碗に次いで差出すを採んとせしに誤つて落す茶碗は思ひきやハツと碎けて汲みし茶は左右  
 を矢庭に流れ出す是はまたりと驚く静江濟なは麓瀨と川瀬もともて其所に散りし茶碗の打碎と  
 羽箒とつてかき集む此時表裏口にて餘多の者の足音するにぞ合點行すと障子を開き見問わらせ  
 す次の間の襖をさつと押開き餘多の組子を隨へたる其頭人と覺しきは身にと鎖の襦半を着纏み  
 鉢鐵うつたる鉢巻の結び目長く脊筋にたらし笹穂の手鎗を脇狭みしと云はずと知れし新選組志  
 と見るより聲あち、げ汝こそは當家丈定めし川瀬太宰なるべし這度御不審の趣きあり組長近藤  
 勇より授けによつて捕手とし罷越したる拙者こそ新選組の隊中にてさる者ありと聞へたる熊強  
 太郎則ち是なり手撃へすれば笹穂の鎗にて只一ト突きに團子刺最早遁れぬ天の綱と覺悟を窮め  
 て索掛れ、威丈け高にぞ呼はるを川瀬は聽ひて些少も騒がず其方に膝を向直し云はる、如く川  
 瀬太宰は則ち拙者の事ながら身は覺なき不審の趣き覺ゆがなからふが恚出張をするうへから  
 の茲にてするのは無益の間答まさしく覺ゆのなき事なれば糾問所にて辨解すべし開は云はれし  
 とも承知せり索掛られよと覺悟の体はまたあるまじき大夫の魂卒迎組子は立掛り法の如くに索  
 うつたり始終のやうすを其場を去す見て居る静江の悲みと腹を斷ばかりなれども女々敷振舞  
 する時は夫の耻辱と堪あぐる涙をのくす賢女の嗜みと川瀬と静江の方を見やり身に覺えなき濡衣  
 にて恚果練の耻を受くとも近きに晴天白日の恵みを蒙り歸り來んまで留守中よろすの事に注意  
 し堅固に内外を衛るべしと謂れて拜も口の中静江が悲嘆を遣るかた無く恚りし程に張太郎と夫

ひつ立てよといふ聲に組子の川瀬を引立て正門より準備せし綱乗物に打乗せつし昇もて小關を  
 打越して都の方へぞ急ぎ行く恚て又川瀬が家への思ひ遣けなき禍津みの菟る歎きの其中にも静  
 江の夫の教へを衛り俱に兎や角云合ひて嘆き歎しむ奴婢等を諭し此凶變を静江が身元殿村始め  
 親類へ其夜の中に知らせしかば實父治三郎はいふも更なり聽者毎に打驚き其よく朝に至るまで  
 幾らず川瀬につとひ來て静江をなぐさめ跡の事共議をなしつ或は又獄屋のやうす手當の爲め彼  
 の六角の獄丁に手錠を締め金錢に厭ふことなく恚りし業に馴たる人を遣はずなんぞ其兩三日の  
 殊更に上を下への混雜の一片ならず見々にけり話談換て川瀬太宰は獄に降りし其翌日町奉行所  
 の白洲に於て只尋常の糾問受け其後の如何なるゆゑにやありけん呼び出さる、事もなければ川  
 瀬太宰は縛されし其夜よりして三度の食事唯一滴の湯水をも呑喰もせず四十日絶食をして六角  
 の獄屋の中にて従容と死果たりしを哀れなり正に行年三十九歳時元治甲子二月某の日なりと  
 ぞ静江を始め親類等も今日は飯るか明日はとて待日の長さも徒に二月の末に至りしに或日大  
 津の代官所より親類一名出頭すべしと召喚狀が川瀬の家裡へ到來せしに打驚き先取る者も取敢  
 ず心利たる奴僕を親類代りに差出しやうす如何にと待中に漸くにして奴僕は狼狽ふためき顔色  
 も色青さめて飯り來つ静江がまへに兩掌を突き調んとすれど物出云す静江之審り是仁助御用は  
 何ぞ疾聴せねと堰立られて仁助の謂ふやう役所で仰せらる、には川瀬太宰之獄中に昨夜病死  
 を去つるにより死骸を早速巻取べし又同人の犯せし罪は尤も重きゆゑをもて家録居郎而まで  
 残す没収せらる、物なり併格別の御了簡にて家財之遺族に降さる、と此書付けを下られしは  
 と聞ひて静江は氣も狂乱前後も知らず籠なす涙かき口解きては又嘆く涙の雨の晴間なく袖を絞  
 らん計りなり恚て仁助が飯り遺知せによつて駈付けし治三郎等は夫々に手分をなして京都より

太宰が遺骸を惹取りて法の如くに葬ふにも聊、彈るゆゑさへあれば萬に質素を旨として茶昆の煙りとす物、讀經施行に至りては財を吝まらず盛みつ、靜江も邸を召上られて此家に長居も恐れれば野邊をくりせし其よく日家財を一ト先實家へ預け其身の實父の運飯らんといふを靜江は暫時と止め上へ對して憚りありとも堰て七日の當日まで此家にありて亡夫の問吊ひをきたいが願ひ此事ばかりは父上にも察して止免下されなば外に望みはあらざると思ひ入つたる靜江が辭を理の當然と其意に任せ再び向ひに来ん日を約し先野邊をくりの荒増は漸く茲に果たりけり愆て靜江は六日めに多くの奴婢にあるじの遺物を殘る方なく分配し又は金圓を遣はして長の暇を出せしかば兼て斯とは知る物の又今更の心地して俱に別れを哀しむは年頃慈悲の深りし川瀬夫婦の行ひも想ひ遣れて愁傷なれ去き仁助はまた殘る川事もあれば止めねば靜江は夕方湯あみなし奥の佛間にさぢ籠り佛の謗名を通夜して唱へ稟せば妾に構はず疾く寢睡ぬ去ば逆其儘奥へ入りにけり實に人の身の行末は流るゝ水に異ならず泡沫夢幻の世の倣ひきのふり多くの奴婢もつとひし川瀬の家理の勝手さへ今日と老僕の仁取のみ例の如く疾起て竈門を焚つけ茶を沸し其所あたりの掃除を爲果て待てども靜江の起出ねばまた奥庭を掃除なきして稍日のたける頃までも例も誰より早起きのけふに限りて今頃まで寝まりたまふは此程より強く意を痛めたまひし草臥の爲先とは云ひながら餘に運ひ奥様かな不遠慮ながらも起し稟し墓詣での準備をせんと伏床に至るに影だに見えずゆふべの通夜をするよしのね咄しなれば佛間ならめと仁助は其儘佛間に入んど間の襖を開き見れば這い何道如何道如何靜江は準備の短刀にて咽喉元深く刺貫き自殺の体に仁助は驚き想はず聲をより立て奥様は何事ぞ短慮なのも程がある斯際期をなさるゝやうなら何事とて仁助に一ト辭の問談合をなされませぬと日頃忠義の仁助の事ゆゑ

播口解つし繰返し愚痴を幾度陳べても早事されし空蟬の空き殼の靜江が遺骸何しに是に答ふべき仁助の涙を打巾ひこふ謂ふ事としつたなら無理にた蘆めまふしても昨日大津の大旦那と一所に其方へれ送り稟せばこふした破目にはなるまいのに噫口惜い事をした併し時刻の移らぬうち大津の旦那に知するのが先何よりの此場急用夫に此所なる一封の手紙宛名は大津の旦那様是も席に持往けばやうすは判然分る道理そふぢや〜と打合點其所の戸締りぬかり無く尻ひつ緘げ大津をさして飛ぶが如くに走りける

第三 姉妹愛女等 咸死 劍難

愆て仁助は遺書を懐中なして大津に至り殿村治三郎に面會し靜江が自害を物語り且かきさきの一通を渡せば受取る治三郎夫婦の更なり内輪の者ども此凶變を併に聞き誰かいは是を驚ざらん重く不幸の報知に愁傷大形ならざりけり去程に治三郎の靜江が際期に殘したる件の一書を讀み降すに皇國の御爲にならんと周施せられし甲斐無く賊手の爲めに獄屋の鬼となれし意を察しては嗚御無念にねばすならん去ば怨恨を雪ぐ爲め亡夫太宰が志しを嗣んものとは想へども成し果難き女の哀しませめては未來の供して明暮仕えまつらんこそ教への道には反くとも妾の宿志止難ければ御恩は厚き父母に前立不孝の怕れはわれを兼てよりしも御心の廣きがゆるるに前立つ不孝の罪は問させたまふまじと察しまるらせ相果候附て分て雨親へた愿ひ稟す一條あり妾がいまだまゐらぬ前阪本村より側使ひにわがし女は亡夫の情を蒙り種さへ宿せしなれと其頃はまだ母親の世にのみす折柄なれば押陰し月をも充ぬ其内に宿へ下させたまひしに其兩親も優しき者にて娘の妊娠になりたるを還て喜び煩りつゝ産むとさせしは男の兒にて本年は大概十四五ならんと風の便りに聞はれば其を呼び取て川瀬の家名を嗣せたまへば血筋も末ま

で絶す斯すれば妾の死すとも此世にの想ひなく事露だになし返すくも此事は呉く願ひまゐらせ候且又妾が自殺せしを取逆したる業ならんと人の口齒に保らんには死後の遺恨に候ま、新ト筆遺しまゐらせ候尙父うへにも母うへにも妾が前立の不幸の罪は偏にゆるせにまけれかしと書残したる文章に夫婦殊更悲しみも想ひます穂のしの薄秋にはあらぬ春風も恨む嘆きの森に吹けば言葉の綾も前後なく涙の雨に村雲の晴間も分ぬ五月暗真如の月に一聲を殘して死出の山中へ往か行ずや時鳥血を吐くばかりの悲しきとは憐れをいふなるべし扱やむべきに非ればとてまた親族は嘆きの家裡に打招かる、尾花川浪もしづ江が遺骸を野邊送りをぞなしたりければ去ば静江が際期に至り意を紊さぬ遺書に誰しも是を傳に聽き貞女の鏡と取次に寄れば必ず語合ひ聞せぬ者はなかりけり茲に又川瀬が當春召捕れしも許いと云へば博奕社會の定三夫婦が褒美の金をせしめんとての悪計みに眞空縛うち混交て新選組へ訴へしより太宰橋か静江まで非業な際期を逐られた怨みはさつと外へは行じ定三夫婦も那様では疊のうへでは往生ならぬとせ末に之刀の錯と大津の宿でも評判高く開が爲免ならん定三夫婦之四隣の者に思ひ憐れは言葉を代すも責難しと更に取合ふ者さへなれば奸夫毒婦も我里ながら不義を憎みて捐られては序次に肩身も狭くなり身もあきかねし裏長屋斯なるうへは此里を離れて知らぬ所へ巢を換は替がん外いせん術なしと夫婦は疾くも了簡を窮たばかりで銀一錢時へ迎もあらざれば頻に意を痛めしが定助遂に悪計を密に想ひ付きしかば此鳴に由を語りつ、折を窺ひ居たりける憐れに米屋町なる丸屋が家裡には金助と妻の小珠は最睦しく家業を勉強奴婢等を煩り一家和合に暮しければ前代定助の盛んを時にも優りはさるども劣りなく商賣向も繁昌それは今日も精荷の都合に依り八幡在へ一ト晩泊りに旅立ちなせし其跡は殊更小珠の内外に氣を附け表と裏の戸鎖りも要慎嚴

しく云付け杯し伏床に入りて熟睡せし其夜も深く尤も過ぎ忍び入りたる壹個の曲者内輪のやうをば兼てより委しく知つたる家主の居間に窺ひ寄つ、用筆筒の錠まひ何なくこぢ明けて有合したる包金を手早く探して風呂敷に包まんとする物音に計らず小珠は起あがり見れば件の曲は風呂敷しつかり腰に付け小珠の寐床を見かへる度端類冠りせし手拭ひのはどけて互に顔と顔見れば小珠も幼稚時より見覚えのある定三ゆゑ打驚きしが女の甲斐なき恐愕に齒の根も震されば聲も得立てず奥の間へよろほひながら遁んとするを定三隙さず準備の一刀抜き放しつ、左の手にて小珠の首筋ひつ掴み金さへ盜ば此方には外に用いぬへのだが面を看られて此儘に生てれるて之後日の災ひ不便ながらも小珠さんねめへの命を貰ひやすと云ふより早く一刀にて胸のあたりに突通しえぐれば小珠は苦しさと又無念さに聲振出て己定三にもひれ汝が爲めには尾花川の兄さんばかりか姉さんも非業に因果なされたうへ妾も汝が手に死にこふ云ふ際期をするからおかん人でもなし鳥獸類にも劣た定三殺せくと云ふ聲は最も苦痛の断末魔耳にも聴けず定三は無心な戯辭突んより念佛唱へて往生しろと引退く刀を此世の餘波小珠と呼吸は絶果たり此物音に内輪の者ども驚き覺て次の間で駈付けたれど曲者が刀の尻りに誰か個進み近寄る氣勢なく腰うち扱して居たりしを定三是等に目もかけず剣を巾ひ鞘に納免此度は表の潜戸より泰然として出で行きたる其大膽こそ悪ましけれ去ば此夜の騒動を殿村へ告げ知らするにぞ彼方は阿兒の愛娘を人もわらふに定三が毒手に惹つて殺されたる不幸續きの愁傷を想ひ遣れて哀れなり憐て又治三郎は小珠を殺せし盜賊は定三なる事分明なる其趣きを書面に認め代官所へ訴へ出しに時を移さず捕吏の者を代官所より定三が住居に向て遣されしが早定三の夫婦の者は逐天なせし後

なれの捕吏は空敷飯り來つ去は是より手分けをなし二個が行衛を探索すべしと詮察等閑ならぬ

第廿四章 孝子仁助謀報父母仇

近江の國阪本村といへるは叡山の麓にあり此所に齋祭れる御神を比叡權現とは崇めたり其神官に樹下岩見となん云ふ人ありて神に使へん暇には村の小兒を集めつゝ讀書手跡の指南をなま又壯士に武藝を好み教へを乞ふ者ある時は劍術柔術を授けなごし身は唯文武の間に遊び世に誦はぬ君子なりしが日々に通ひて讀書の教へを受くる幼童の中に敬太郎といふ者あり道は百姓の兒に似氣なく讀書を好み傍には武藝を殊更執心なし授かる事の壹を聞ひては自ら方を知るに至る秀材あれば樹下石見も末頼母しく想ふ物から其愛自然に深かりけり恚りし程に敬太郎も此年(元治元甲子)既に十五歳になりたり去る年には似もやらす筋骨琢磨しく脊は高く秀眼有威の一少年唯見るものは十五とは想はねばかりの身の取做は云はでも知れし石見が教育扱此敬太郎が身のうへを委しく茲に尋ね見るに還は尾花川の川瀬が家裡へ小間使ひにとて奉公せし阪本村の百姓長作が娘が腹にやどりたる太宰がわすれ遺物にして靜江が際期の遺書にも認めれきし一子なり人は氏にぞ依るものならぬ人となりしは百姓の家にはわれと天稟の氣象の自然に備はりて漸生身をするに及び百姓業を強く厭ひ其身は武家に奉公なし名を擧げ家を興さんと意に思ひ忘るゝ暇なく母のれ留も百姓の女とは云へもの毎を能く辨へて伶俐なれば他家へ縁付薦むる者のありと雖も受け惹き只明暮に敬太郎を護育るに餘念なく送る月日も十五年寡婦の手盥で育生たる敬太郎は順孝にて母につかえて愛かなる其行ひは村人の何時も贈の種といなりぬ恚りし程に母のれ留の川瀬が家の凶變を風の便りに聞たりしかば早十五年も音信れをせぬと

の雖も能き折あらは敬太郎が生身せしを太宰に見せんと樂しみ居りし其甲斐も無く太宰は獄死續ひて妻の靜江さへ自殺をなせし其起りの大津の宿の博奕者にて定三といふ悪漢が新選組へ告訴せしより一家の滅亡開事毎にれ留は驚きせめては川瀬の名跡を立て暇をたまはる時身におまゝる程受けたりし恩義を報ひ返さんと思ふ仔細を是まての秘陰したる敬太郎へ篤と語りて聞かざるに始めて父の素性を知り且定三が悪毒なる所業を強く惡みつゝ母にも夫と告げずして亡父母の誓と知つたる彼の定三を討取りて無や無念にればすらん御靈に渠が首を備へ慰めまつらん應そふぢやと思ひ立たる孝子の魂 歳また十五の少年に之類稀なる行ひならずや話再前陳殿村には靜江が一世の頼と云ひ且は川瀬の菩提の爲め家名を兼て立んと思へと川瀬の不慮より引續き我家に使へる忠僕仁助に件の筋を合點させ阪本村へ使してやうすを巨細に探らせ見るに靜江が云ひしにつも相語すわすれ紀念の一男兒と敬太郎と名稱つゝ今年十五歳になりし事猶其母のお留といへるも操を紊さずいまだ且寡婦で居るとの事までも逐一探りて仁助より治三郎へ告げ知らせば治三郎の喜び大形ならずいふ物事の分りしうへと一日も猶豫すべきにあらざると自ら仁助に案内させ阪本村に往てお留を始其父母にも面會なして來意の序次を細に語り聞するに或は川瀬の不幸を痛む或は日影の敬太郎が世に出る事を打喜び頼に談合調ひしを此席末に連りし仁助と殊更勇み立し其若様といづれに在るか早く且那のれ目に掛んと云ふにれ留と打は笑と敬太郎其所へか出と云ふに與より立ち出るを見れば聞しに彌増て天晴なりける壯年にて禮の行ひ物の云ひざま賤しからざる振舞に治三郎は感服なし夫より良辰吉日を撰みてれ留敬太郎を我家へ惹き取り一ト棟殊なる部屋に住居せ何不足賤ひける恚て月日に關守なく慶應三年もとや過ぎて元治と改元ありし年と王政復古の戦ひに何時も同じ修羅道場敬太郎と武藝を嗜む壯

士ゆゑに官軍方に隨軍なし一臂の力を盡さんと思はざるに、いあらねども親の讐を討ずして身を果しなば親孝ならん、と誓のあり家を人にも托し我身は母の眞を告げて伊勢參宮や奈良見物、或は有馬の湯治なんどに事を儲けて兩三年一心凝て探ると雖も手荒りしてはあらざるに孝子の精誠心是に屈せず益々求仇其中に秋も半になりし頃彼の定三を讃岐國丸龜にて見しといふ者ありしかば敬太郎之是を喜び猶其やうすを開糺すに相違あるべくもあらざれば俱天戴天の父母の仇報ゆる時の至りしとはアラ難有やと喜び思へば此事に留のみに語りて猶治三郎にも秘傳つゝ密に旅行の準備をなし既に發足するに及び我輕擧にして思はざりしが警備に巡逢とも渠が面を知らざれば事速になり難し是に仁助を伴ひ往ん仁助は嚮にも定助の存生なりし其時より丸屋へ親しく出入して定三をしも知れる由聞たる事のあるを思へば讐を見認る證人には仁助に増る者のはあらじと頼に分別付きしかば母の留と此事をも談合なして何時もの如く金昆羅詣でを思ひ立しと治三郎へは告げ知らし仁助を伴ひ大津を跡に日ならず讃岐に歩り來て始めて仁助を眞を明すに其喜ぶ事大形ならず去ば是より定三の在所を探りまぬらせんと先金陵に參詣なし夫より多度津丸龜と探索する事一ト月餘り去と手係りあらざるより逢ひしと人の語りしも嘘辭なりしか然り迎此儘にして飯らんは不本意なれば今暫し滞留なして探して見んと主從互に心を屬まし雨降る夕夜も風の朝も日々に市中を徘徊なし心に疎いあらざりけり茲に又金陵の長脇差にて其名も轟く草柳燕石といふ者あり其者博徒の親分ながら博く和漢の群書に長じ詩作尤も熟練にして燕石も亦其號なりとか去ば志探も一般の博徒の及ぶ所にあらず惡を懲して善を喜ぶ其俠氣の頼母數層をいつか敬太郎も聞たる事ありしかば或日仁助に語るやう汝もともに定三を探索する事辨て見ればはや二ヶ月のうへなれど更に手係りあらざるゆゑ思ひ儲けし一策あり此所

に草柳燕石とて博徒ながらも學問ありて義氣に富たる親分あり其名は四國に高く響て小兒と雖も知らざる者なく我この咄しを丸龜の宿の家主に聽たりき夫にて思ひ合するに彼の定三も博徒なれば此地にあらば草柳に便りて聞かば知るよしあらんと稍了簡を定めしゆゑ是より件の草柳を尋ねて事實を打明し應援を乞ふと思ふがゆゑ汝の異見聞かまほしと開れて仁助は確と掌を拍遣は何よりの御妙計ちつとも早く罷るべしと夫より二個は草柳を尋ねて逐一復讐の序次を察さず打明て談れば人の噂に違はず聞事毎に草柳は感腹せずといふ事なく先第一に敬太郎が至孝なるを賞讃し次には仁助が忠義を褒め其定三とかいふ者は大津出生の女夫者にて云ゆるゝ如き人相年頃名まへは熊と呼び居しが正しく渠に相違なし此地に流れ來りし時より女房のね鳴といふ者は手重き癩毒の病ひに係り床に附く事二々歳あまり死果しより定三の熊は今では獨身なりとか子分の咄に聞たりしが實に憎べき奸物なり今同國今治の城下に漂泊するよしなれば燕石一臂の力を添へ孝子の爲めに定三を此地に惹寄せ本望を必ず果させ棄すべしと俠氣の義膽面に顯れ惡徒を憎む草柳が辭に二個は今更に天へも昇る心地して手の舞足の踏を覺ゆ喜び勇むを理りなり恠て草柳燕石は彼の定三を今治より欺き寄て金陵の麓の合の松原にて首尾能く孝子敬太郎に雙を討しめ其首を父母伯母小珠の靈魂に備へて祭り果しかば二個の仇を復せし旨を丸龜侯へ届け出で且草柳へは這度の恩義を厚く報ひて故郷へ錦を飾り飯りし之則ち明治改元の十一月の事になん茲に孝子敬太郎が敵討ちの景況を兼てと委しく綴らんと思ひ居しが計らずも紙員を多へ前章より増加せしゆゑ止を得ず只其筋のを記せしなり看客是を怒許せたまへ間話 休題つ 敬太郎等は天津に飯り父母伯母三個の仇讐なる彼の定三を金陵に討し次第を實母を始先治三郎等に物語れば喜ぶ事大形ならず先此由を届け出でしに折もこそ能き往古の聖代民部省にて敬太

郎が届出でたる書面の趣き一應讀岐の丸龜侯へ尋問ありしに相違なければ御評議のうへ強く賞され又其父の川瀬太宰は國家の爲めに死に付く其忠節を畏くも愛させ賜ふ 赦慮により先年幕府へ召しあげし川瀬家所有の田畑居邸を遺度残らず敬太郎に下し賜はるべきを大津の判事某氏より達せられしに敬太郎は夢かど計り思ふも理り是に連なる一家親類初めて思ひの眉うち開け芽出度春を向へつ今しも滋賀の尾花川に流れ之を川瀬の功し家名を興せし敬太郎は彌益家富を榮えける編者櫻雨木傳を綴り果たる折しも浸り川瀬太宰氏が往昔獄に下りし事など追悼し止まされば手向の一首を茲に記して此巻未を結ぶと云爾

○まねかれて秋もすへ野の尾花川  
かへらぬまつに名をのこしつゝ

人情 蜀魂雲井の一聲大尾

南海千鳥の音信

竹 翠 著

千鳥の音信

あきとの阿波の鳴門に還からぬその名も高き徳島と畿内に賑はふ津の國の浪花の濱の波路を  
百四十と五里をへたつれと朝な夕な入船や出船の影は數知れず分けて當時は蒸氣船帆前和船  
の差別なくかゝりて双ふ港うら津田の浦とて景色よく人戸も満ちて相應に賑ふ地故遠近の人の  
あそびの場となれば春は梅やら櫻やら夏は蛤取秋とて月の詠めよく冬は尙更雪見の磯寒も  
いつしの東風や吹かはりたる南の里花の井稻荷籬田町大門せは徳島の町家は櫛齒に立ならび  
雲に連なる家々の旗は虚空に翻へり雷ならぬ人力の車の音は西東廻る城下いと廣く區畫を  
三十六町に分けて朝から夜深さまで往來の人の通り町町の中央を横町へ越せば家居も新町の橋  
の積重より高き身代を持ちしは名に負ふ丸中と人に字を呼れたる田中屋甚平といふ大金持なる  
が續く不吉に近頃少しく店の寂れたれと流石に本が本故下婢下雅番頭手代數多を使ひ夫婦中  
よく睦ましく商事に骨を砕く内頃も安政三つの年草木も芽立つ春を経て木蔭を慕ふ六月や妻の  
ね時は此程より身重さ様子その分婉月を甚平の指折り數へて待乳山待つに月日はこゆるさの磯  
打つ波のみなもとの川てふ文字に枕橋かけて並べて渡らむとすればたつ日の早瀬川岸の立樹の  
紅葉しく秋もいつしか肌寒き師走は暮れて長閑なる春も彌生の雛の節句目出度こゝに生し雛  
にも劣ざる玉の櫛なる男子故夫婦の悦び嬉ぶるにもなく彌生の三日出生とて其子を彌三郎と  
名づけ咲く花よと愛育て四五年の月日を送る内に母は血の道の惱にてあはれ慕なく鳥邊野の煙





と消へ長き旅路の門出せしかば悔んで歸らぬ事ながら主は日も夜も暮はしく余所目を忍ぶ悲し  
 さも四十九日や百ヶ日たつ日につれて追々に忘るにあらぬを海らぎて今之家業に掛りしが何を  
 云ふても獨り身なれば物に附て不都合斗さればとて後妻を娶りて愛ゆき吾子に辛き目をさする  
 も計られず如何のせんと思案の内フト考へ付たるは甚平の弟に万吾と云ふものありて心ばへ律  
 義伶俐なるゆゑ八年以前に分家させたに於そよとふ姻那やかな一人の娘を設けしが素より  
 廣大した身代ならねば本家につれて諸事萬端不都合勝にて居るを幸ひに余は五十路を越さねど  
 彼を夫婦養子に引取り行々は彌三郎に托そよを見合せ夫婦となさば一家睦ましく再び身代も起  
 すに至らむと獨り心に點首さ善はいそげと早々万吾を呼びて此由を語せば万吾も大に喜び早速  
 相談整ひしかば遂に吉日を撰み萬吾夫婦は於そよと共に家を仕舞ふて中田屋へ引越けり

第二回

再説萬吾は中田屋の家を相續なし名を甚右衛門と改めて父甚平に孝養を盡し又彌三郎義理ある  
 子なればおそよより尙一層に愛ゆがり一家中能く暮すうち父甚平はふとした風邪が元となり墓  
 なく冥途の旅立せしかば甚右衛門の悔み云ん方なく今の義理ある彌三郎を父の片身と大切に讀  
 書算盤歌俳諧何に就に就けて抜目無く教育せしも早や十年（此際甚右衛門の身上に就種々の事  
 蹟有れ共素より此編は彌三郎の事に就て解出すを以て主意を爲せば敢てくた／＼敷此にするさ  
 す）今は二八を二ツ三ツ五ツと越さぬ花の春四方の櫻は綻びて今日は北山明日は又 明 光庵と  
 日々に人の心も何と無く長閑げき春に誘はれて陽氣に穿立つ櫻時今を感りと咲き出す頃も三月  
 中旬頃世上の陽氣に見もやらで一人幽閑裏座敷何を思案か手を供ひら溜息つゝ居たりしを知  
 るる鍋は（此家ノ下婢）次の間より障子ツワツリと引開けて「アノ若旦那さまへ留吉さんが出

なまぬましたヨ「ソチカ此方へお通し申せソレ其方に湯があるなら少とくんナ「ハイと云間  
 に留吉は勝手知りたる庭口より飛石づたひに入來り「アノ鍋さん若旦那は何處らに居出だ  
 ハイ此花園の内に居らッまやむすから直にお通し申せと仰いしました「ソチカ其れでは直ぐに  
 御免下さる「ソチカ留吉さん誠に此間はサツハハ見限り左ア此方へ「イヤこれは恐れ入りました  
 何卒お構ひ下さるますなど云つと席につき煙草吸付けて「いかゞ矢張此頃も不相變御勉強です  
 かチ「何に此頃はさつぱりサ「時に彌三さん明 光庵の今日明日が満開だと言ひやすせ「ハテ  
 まう其時分チチ實に月日の立つのは早い者チエ「イヤハヤ此れは決しからぬ其れじやア未だ  
 此頃の賑ひを存知ナイノデスチ「ソチカ此中はサツハハ外へ出なぬから「成程其れでと母公  
 さんの御心配も無理でとチエ併し彌三さんソチカ御勉強ナリナスツテハ御病氣が出ますせ古の旨  
 草だが身の有りてこそ汁も吸サ些マアお遊びも保養幸ひ今日は天氣も喜ドラデス此かららぶら  
 く出掛やしようカチ「ソチカ併し何だカ外へ出るのが太儀だから「コレサ野暮を云とないで  
 早くお用意をなさるナナニ親父さんが其處ハ拙者が香込チ折柄報る時の鐘「ソチカ今ノハまだ三  
 時ダツケチエ「其トやア同様に「ハハア漸と聞濟カチト云つと二人と打連れて明 光庵へ  
 出ゆきたり抑モ此明光庵といふ之阿波の名所の其一ツにて春の櫻は取分け賑はひ我先にと遠近  
 の老若男女うち連だち此處よ彼處ト座を占めて踊るも有れば唄ふも有り千變萬化の其様は拙さ  
 筆にて述難し「イヤ此櫻の咲き揃つたのは又別物チ「ソレ御覽なさいドウデス最早歸り  
 やせうかねハ、「イヤ留さんアノ池の廻りの茶屋は幾軒有ダロー「されば餘程有やしようチ  
 エ然してアノ軒の酸醬球燈に灯ついたら夜櫻の詠先ささぞ善御座せう折柄吹來るそよ風に櫻は  
 散りて雪を寄せば「イヤダウデス彼の散る事實に絶景ダチエト花に餘念のなき折柄兩人の前を

通り掛りし新造年増は同じ花見の様子年増は粹な意氣姿野暮には有らねど新造は美麗に装束  
 兵庫曲色もほんのり櫻色鼻筋通り口元ハ海棠の花の蕾すじき目元の愛敬には小野の小町も  
 揚貴妃も三舎を避る斗りなる未だ十七八の婀娜娘にて年増は廿四五とも思しく手を引あうて  
 チャ姉さんア美しいしやア有ませんか「アホ彼人がかへど小聲で云へば新造は顔を赤して  
 フヤ姉さん不好子ヘオキヤ彼の櫻がサと云つゝ顔を横に向け此方を詠れば彌三郎も思はず顔  
 を見合せて暫時見惚れて居たりけり其と覺れ留吉は「彌三さん一寸珍覽なさる彼の踊りはま  
 ア何様だらう彌三さんイヤ若旦那何様なすツタ「ハテナ「エ何がへとチト聲高に云へば漸氣の  
 附きたる体にて「イエ何に彼の櫻が善ト云「サ「何ガ彌三さん臆臆乎ぢやア行ませんぜ時に  
 最早何時アせう「ソフサイヤまう六時が廻つた「然ヤ歸宅りぞ致しやしようか併し誠に残り惜  
 いにナアニサと口には云へど何卒最う一度彼の顔をど心恍惚氣は有頂天本意に有ねどスエ  
 と我家をさして歸ける

第三回

間口二間の一間を細目格子に一間は格子戸入れし一圍へ軒に懸たる行燈(東京の雪銅の如し)も  
 實意を顯へし濃き色で小春と書し之留吉が日比馴染の藝者の住ひ「アハ小春さん内に居るか  
 「アヤ離れだエ「自己だヨ「留さんか何故此方へと移らないの併し差合があると思はないから  
 「アレヤア不好だヨ私きが何時そんな者を捨らへましたへ「イヤハヤ其様こられちやア眞平ダ  
 時に母公おは見ヘキヘノフア、過刻 觀音様へお参りに行つたから中々まだ歸はしないはず  
 「其じやア緩り話が出来らアホンニ自己はサツパリ忘れて居たが此間の狂言は甘クいつて彌三  
 さんが大氣辭サ「アヤツチカへ新道の小品さんも明光庵の櫻見から以前より一層血道を上げた

して手取うに最ふ可愛想だヨ「其處で自己之此方のことを少とも話さないで色々勤め込だ所ろ  
 がマア可笑いじやア子ヘカあの女が五圓や六圓で抱へられるなら明日からでも世話をして呉ろ  
 若しそふなるなら随分前にも礼を爲るし又妾宅も何處善所へ持せるから何分お頼み申しま  
 すと自己に手を合せて拜だせ「アホ、嘘ををつきなねへ「ナニ眞とうに拜ダノヨ「マサカ十四  
 や十五の小供じやア有るまゝし「マアそれは何様でも善が少とも早く此事をわの子に言つて遣  
 たら喜ぶたらふ「イエ其じやア少しも面白くないからマア私さの思ふには子わの子も悪らしひ  
 程彌三さんとかに血道を下げて居るし又彌三さんとかも小品に逆上てお出なら少トわの子に氣  
 を揉ませて遣ふと思ふんだハ「然してお前何様する積りだ「ソフサマア私さの思ふにハ「何  
 様遊ばすの「アレサ茶かしちやアいやだよ「然らば謹んで拜聴ト少し膝を直せば「アレ又其  
 様に眞目にねなりだど私さや言れないわ子「そんなに前様の様に六ヶ敷言つちやア仕方が子へ  
 「其れでもお前はんか餘り堅くるしくお成りだから「そんなら自己は少とも笑はないで聞から  
 サア言ひナ「アホ、私さやなんだッけ皆忘れてしまつたワ「ゴレサ其様ニ氣を揉せないで早ク  
 言子へ「エ、其處で子此間も又小品の母わが私きに何處ぞに宜い旦那はあるまゝかと言たから  
 何に萬更無事もないと言ておいたのサ併し私さから彌三さんの事を断しちやア面白くないから  
 前はんが何にも知らない顔で此様いふ宜旦那有るが何様ダト言たら屹トあの母カアハ怒張だ  
 から飛附に違ないヨそうすると小品ハ彌三さんに血道を揚げて居るからサア氣を揉みだすハ子  
 併し幾計氣を揉でもわの母カアのことだから是非でも壓へ附らア子其處でサアお見合せなれ  
 ば彌三さんと云ふ狂言サイヤソイツア甘ヘダカ餘は悪いお世話人だせ「ヨイハ子小マア氣を  
 揉せるのも逆上の藥ツハト話の折柄門口にて「アノ小春さんと仰いますと此方デスカ「ハイ此

方ダカ何んだへ「へエ三國屋で御坐ぬれ誂へを「イエ内では「ナニ自己が今來かけに言附て來  
 たんだ此方へ取て置子へ「ヲヤそふかへ止ば宜にと言つ、岡持より誂への肴取出し留吉の前へ  
 運び乍らアノ留さん其處の蠅脹の内に爛徳利が有るから樽の方の酒を入れて直グつけて罷呉  
 ナ私さや雨戸を締るからといそ「四邊を仕舞ふ内「サア最ふ出來た様ダゼ「其じやア紀始め  
 なさぬナ「併し今日はサツハリ魚切と見へる「アノお前はんね肴が足なア蠅脹に海苔が有か  
 らぬ出しなはいナ「ナニ前前に酌をされりやア何にも入りやアしねへ「アレ又憎らしひ「サツ  
 ト有る「ア、宜かんだ（此間杯の往來有と知るへし）何だか淋しひじやないカ少ト彈からぬ  
 なはいナト三味線片手に引寄「マア三線より前が此方へ寄ばイ、と言ッ、小春を引寄せて  
 櫻に染みし含愛類に其身の頬を磨附乍らソツト傍へに押すゆれば「アレサ止シなさぬヨオ誰  
 れか來ると悪るいから「ナニ誰か來たツテ構ふ者かそれでも何だか「其じやア止カ「其様じや  
 有ませんよチ「ソツナラ最少と此方へ寄んチへ「マアお待なさぬ煙草盆を取るから折柄開ゆる  
 隣のど「「アレサ止しヨ見られちや悪るい屏風の唐子が笑ひます「ソツレ見なさぬ「一  
 に笑はれまサア子此時門口にて「小春さん大急で蘇からアイヨ「サア早く行て思人と樂みねへ  
 ナ「それじやア私さやア惡へ行のは止ふヨト少フサグ「ナニ嘘タ何様して此子を餘所の人に  
 遣者かト小春の愛穴を一寸トツク「ヲヤ嬉しひチへ「眞トニ忘れちやいやですヨ又も門口にて  
 「小春さん早く「アイヨ少し小聲にてマア世話ひナヨ

第四回

淨瑠璃「しかも去年の櫻時植た初日の出合から逢ての後の一日も便り聞かねば氣が濟まざうつ  
 らくと夜を明かし「晝寐ぬ程に思ひ詰めたまに逢夜の嬉しさに「ト隣に唄ふ淨瑠璃を聞につ

けてもいとよなは物思ふ身の有ぞとは知らで逢夜の嬉しさを語ふ文句の情なや未だ一度の逢瀬  
 さへなさぬ此身の墓なさも何時か嬉しき新枕換のす時節もあらうかと樂んで居るゝあじさな  
 や旦那を持てとの義理ある母の強わ意見言に言はれぬ願ことか心の裏に有りぞとも知らぬ繼母  
 は青筋立「コレ小品れ前も餘程強世先刻から口が酸パクなる程釋を言つて頼むのに否とも  
 應とも返事のないア、分つた其れじやア私しの言ことが氣に喰はないのだチ「アレ何様して  
 其んナ勿体ない「其れじや旦那を持つて親に樂をさせる氣かデモ「私しは「否だど云ので  
 あらふがチマア宜う聞よ今迄此様事を言つた事はなすが子素ト前前の親さんが佐古町に居る  
 時分母が前を産落すと間も無く死で仕舞其から後に残つた親の乳兒を抱へて乳と飴よト貰  
 ふて歩行き日の稼も儘ならぬ細い煙むりのあはれさを見るに見かねて此母が不自由のなから  
 ね金を三圓と言ちや些少な様だが其時分の三圓は今時の三拾圓にも掛合ふ位の苦みサ其れを色  
 々遣繰りして手切に貰つた前前の身十七年の長の年月尿水糞取つて育た母に何時の世樂をさせ  
 る氣の餘まりに心よしも程がある否なら否だト明細言ナ返事に依ては此方も思案が有ると切迫  
 詰りし強談に身も世もあらぬ胸の中戀と恩義の兩道を示す標木の涙川神も佛も何んのその否め  
 は氣強き母親の如何なる事を仕出かすか測り難な心工さりとて一端此身を穢さば末の未迄  
 も戀しと思ふその人にとへ逢瀬があれはとて此身に愛相筑波山峯に咲たる風蘭の及ばぬ縁し  
 と明めていつそ吾身を母親の言葉に従ひ妾にと思ひ直せばいとゞ尙落る涙を押し拭ひ思案を定  
 めて完爾と「私しや此迄一圖に旦那を持のは否だと申しましたけれ共能々考へて見ると今母か  
 さんの此言の通小供時から此年迄長の月日の御養育仇れるそかな事で御座りましよう其故私し  
 の様ナ不束者でもお役に立なら妾でも何様ナ事でも致ましようと言も終らず溜涙せき來る胸を

押し鏡め笑に紛らす心根は記者も察して哀れなり母は完爾猫撫摩イヤそふに前が柔和く聞分て  
 さへ呉れれば何にも先刻の様に腹を立てはしないサア、最ふ泣かないで顔も直したり衣服も着  
 替へ今夜彼處へ往く用意をして出でナ私しやわ此から留さんに此事を言ッて来るからト言折  
 門口にて「イヤ母ア不殘此所で立開したから最チ来なくつても宜ヨ」「フヤ留さんかマア宜ッ所  
 へ来て呉れたサアマア此方へ」「ナニ自己はもふ直ぐ歸るから」「マア宜ハ手茶を一ツ」「いえ  
 もふお構でない」「マア茶より先へ小品の承知した事を旦那の方へ言て遣から遅なら手へ内  
 熊婆母の内へ遣して呉と言置てイソ」と歸り往く待つまほさなく暮合を早く報渡る六ッ  
 の鐘、留吉、熊婆さん先程も言た譯だから(始終ノ事ヲ話シタル者ト察シ給へ)今に小品房が来る  
 だろふ来たらば直ぐに二階へ上げて手其處ん處を味く道て吳子へ自己の少し他に用が有から又  
 後に来やうと歸る間も無く小品は門口より「熊婆さん今晩は「チャ小品さんかへマア大層早か  
 つた子へサア直ぐ二階へと小品を連れて登り行き「嘸旦那御滞屈その替り此子を取扱に置ます  
 から何機カ可愛がつてやつて呉なさるヨトモシ、氣を揉む小品をば無理に押し入れ引廻す  
 屏風の番にも山櫻枕のちりの積み初め立廻したる六枚のさも睦まじさうつがひ離ぬ中とな  
 るとかそハ次の回を讀みて知るべし

第五回

却説小品はまほくと熊の袖に縋りつゝ登る階子も針の山々より吹き来る風散らす此の身  
 は櫻はな何様なる事かと打まはれもじく、鬱氣く小品をば氣頓で世渡る熊ゆへ言葉少なに屏  
 風の内へ押し入れて熊と音さす段階子降り行く後は差向ひ灯り朦朧床の裏吸し煙草に面影の  
 確と夫とわ知れぬとも煙の罪れてかさ立る灯にソツト見透せばこは抑も如何に這は如何に思ふ

此間遠くで戀人と日比心焦したる彌三郎ゆゑコレハト斗り伏し沈む顔に紅葉の夕映やソツツト  
 逆上し處女氣の目に持つ泪押隠し色を含みて打鬱然姿の花のしんみりと春の柳の風俗も露けく  
 見れていとしらし「エ小品さん前何様かおじか大層鬱氣で居るじやア無かト言はれて此方は  
 赤らむ顔「イ、エと言ふも口の内對へ兼ねてを見へにける其リヤ最う其苦サ私しなんぞの様ナ  
 不氣意な變屈者だから氣に入らないのは初手から承知サ併し此れも何んぞの因縁とか因果とか  
 云ふんであらふヨ忘れもせぬ今年の春明光庵でちよい見初れたもかげが何様にも此様にも忘ら  
 れず馬鹿な様だが其口から机にもたれて戀病ヨ併し此様事を人に言つちやア男の癖にと笑ハ  
 れるようだが扱其身になつて見ると中々そふじやアないト言ふ言葉さへ情持つ男の膝に取りつ  
 いて余所目を憚る忍び涙き漸々泪押し拭くひ「ソツナニ貴君の様に私から申すことを皆仰し  
 やめませと何とも申し様座いません私しこそ去頃貴君を私見初め申しましてから何様がナシ  
 てと氣を揉め迎も及之ぬ御大家の貴君の事ゆゑ仕方なく焦れて送る月日は泡となりしが母  
 親の朝な夕な強意見面目なくも親の威で貴君の念を絶ちまして妾奉公する氣になり今晩此處  
 へ来て見れば夢かうツ、か、膝か日比焦れし貴君ゆゑ嬉しさ増して悲しくなり前後忘れし此  
 夜の始末嫁婦モノとこれ見棄なく末の松山末かけて共に白髪の前迄も不便かけて給之れと前の  
 回にありしこと殘る限なく述べれば「イヤ前がそふも氣なト頼もしひがコレモほんの當坐  
 の氣体だるふと言われて小品の少しふさぎ「アレ勿体ない何様をればこの胸の裏を見せ申  
 せ事が出来ましよう子へト思ひ詰たる泪の目元娘心の一筋に誠の見へて哀れなり「サアモヲ  
 泣ないて床へ這入ナ其處に居ると塞るからまう此様なりやア遠慮の入らねへ「ハイ難有其では  
 免ぬそぼしてト重ねし着物を脱ぎ捨てつゝ轉び込むたる夜着の中「イヤア前足の足は大層冷

先さぬじやアないか其れだから早く這人など言つたのに矢張グス／＼して居る者だからヲ、  
 冷ッコ一チャカんにんないまし「其様に其方へ寄せ無くつても宜じやないカ」其れでも其氣  
 毒です者をト言折障子の破れより風が氣轉か吹き消す行燈ヲヤ明りが消へましたアレ私しが「  
 コラ前も餘程判断が悪いのヲト額をソツト磨り寄せば「アレクスグットヲ御座いますト言つ  
 夜着を引冠り如何なる夢を結しか記者も此儀はムチウ」

第六回

新玉の年立ち歸る日より柏や乾葉實儀伊勢燈檜柿と家毎に祝ふ七五三飾りいども長閑さ春  
 風は梅が香誘ふ鳥追や夢見を縁起の寶船二日の晩の初夢と騒ぐ娘の手球唄羽衝聲や花婿取る隣  
 近所の賑ひに見向もやらで唯一人娘心の一筋に過ぎ越し方が案じられくよ／＼送る月日とて人  
 が祝ひの屠蘇酒も此身はかはす人もなふ夫と頼みし彌三郎は内外忘れし放蕩に父の機嫌も如何  
 どと中に立たるれそよの思ひ隠すとすれを顯る娘心を夫としも見てとる乳母は苦勞人「れ  
 嬢さん何故ソソナニお鬱ぎなさいますへ「イ、エ私には何にも鬱ぎはしないヨ」「ソレでも貴嬢  
 の此中御飯も餘り召上らす何マカ思召が有りそふなる顔付き何故其様に私に恥隠なさいます  
 へ「アレ又乳母が其様ヲ言ッて私し何様も爲はまないハチ「ソレ矢張貴嬢が其れだから行  
 ませんヨ幾計に隠しなすつても私しは以前から存じて居りますヨ」「ヲヤ何にを」「ヲホ、甘く  
 恥とばけなさいませぬへ憎らしひ其れじやア當てゝ見せしようか「アイ「其貴嬢が恥鬱ぎなさ  
 るゝ病根と云ふのはソレ／＼アノマア止ませせうヨ」「アノ何故「ア、ア又多けい恥鬱ぎなさるゝ  
 行なぬから、ナニ最ヲ鬱ぎはしないから言ナ「其じやアノなんでせう恥兄いさんが貴嬢の方  
 へは見向もなさらないで他へ手り行ッしやるから其れで色々苦勞をなさるんでせうト的を打

れし一言に何ト返事も泪ぐむ娘心を察しつゝ「そりやア若旦那が他へ手り入ッせやると云ノ  
 ハ貴嬢が餘り威女氣だから行ませぬのだヨ」「其れでも私しなんぞには兎でも恥兄いさんの御機  
 嫌は取れないものナ「ソレだから恥氣に入る様になさいましナ」「ソソナニ恥前の云ふ様に甘く  
 行く者か子ソシてアノ小品さんと云ふのと大層美しくつて三味線も能く弾くし又手も能く恥  
 鬱ぎだど其れだ者を何様して私しなんぞが調へも寄る者か子「ナニ其様じやア御座いません  
 ヲ貴嬢位御器量が能くつて藝事之何でも恥出来なさるんでず者ヲモヲ／＼何處も申分は御座い  
 ません唯あなたが餘り柔和し過るからいけませんノサ折柄二階にて鼠の泣聲チユウ／＼「  
 チヤ乳母アヲヤ鼠が何様して居のたろム「ヲホ、貴嬢其れだから行けませんヨあれは鼠が交  
 合聲でその子兩人「ヲホ、「ソシテ今にも若旦那が恥歸り遊したら少と愚痴を仰しやらなけり  
 や行ませんヨ」「さうして其様事が私に出来る者か「ヲヤ噂をすれば陰とやら若旦那の恥歸の機  
 ですヨト言内次の間の襖引開け入れば兩人「ヲヤ恥早う御座いました「イヤ夕邊ハ早く歸て  
 来やふと思たけれ共少し用事が有つてツイ遅くなつた「ヲヤ其様で御座いましたかアノ恥嬢さ  
 んへ私し且那の着物を繕ひかけて居りますから貴嬢どうか若旦那の着物を恥仕舞なすつて下  
 さるましヨト言はず語らず目で諭し其場を外して立て往く後に恥そよは間の悪そよに「アノ兄  
 さん恥着物を繕みませぬか「ナニ宜から打遣といて呉れ「ヲヤ私しぢやアお悪う御座いますカ  
 ソレやア早く往て小品さんに疊んで恥賃ひなさるましナヲホ、「また詰らねへ事を誰が其様コ  
 トチ言ッたナニそれの宜人から聞き升た其れ見たが宜る前も矢張善人を持つて居る癖に「ヲヤ  
 私しがいつそんな者をこさへ升たへ「ソレヲモ今其様云たじやアないか「アレ其様じやア有ま  
 せん私しが善人と云つたのはねト言つゝ揉たる紙屑を繕つければ「ソリやアお門違ひだろム」

アレソツナ可愛相ナ「ソレが真うならこふするヨ」「ソレアモ其様事をする人にも勝れずから  
「ナニ構ふ者か前と自己とは幼稚時から云合だ者ア」其でも貴君は小品さんを誘新造に其賞  
ひなさぬまじよふ「どうして此子を捨て宜者かと柳に折れしをよをばソツト此方へ引寄る  
折こそ悪けれ次の間に「若旦那チヨツト

第七回

阿漕の浦に引く綱も度重なれば顯るゝ初めの程之彌三郎も内外の首尾を繕らふて丁稚手代や兩  
親に知れざるやうに通ひしも次第に募るゝ戀の癖今と人目も親の目も小品の側を離れて一夜  
も明せぬ妹と脊の割なき中の義理合ひが積り積りて近頃は外を内ぞと出であるさ内を外ぞと居  
つかぬも初めはまゝある若者の習ひと左のみ甚右衛門も咎めせず打捨置しは兄への義理や  
一つには兼て虚弱の生れ故少しの保養と放埒も見て見ぬ振する親心機嫌氣づまも處女氣のれそ  
よの側に居やうより面白かかしき唄女や妾の膝にうたゝ寐の素人にまさりし樂まは此身も昔の  
向しと蓄の春の二度なしと三度に一度の小言さへ言ひぬも却而若もの爲にもならず世上への  
聞へも悪しと兎や角に焦すころも白梅を片手に持て立歸る彌三郎を此方へ呼び入れ様子あり  
げに甚右衛門煙管はたいて完爾りト「ナ、彌三郎か噤寒かつたで有らふサア」最少と此方へ  
寄て煖るが宜いト手燃り前に衝き出し「コレ彌三郎ヤこんな事を言たら定めしじゝむぎい爺だ  
ト思ふであらふがノれぬしも此頃之太分遊びに精が入る風だが初めの程の仲間同士の交際か折  
に之遊びも保養だも今迄竟に一言の異見もいぬ此自己が心の内の切なさの言迄もなき事なか  
らぬぬしと義理ある兄の子ゆゑ甚き異見も世の人の口には針のさせぬものソリヤこそ中田屋の  
息子は繼父の邪見に以じめられ一度の遊びも百度の小言を受る可愛さト尾に羽をつけて悪口を

聞く否さに捨置けば内外の示めしも屈かぬ故勝手も不手廻り其れもねぬしの身持さへ堅氣に  
なれば此年で苦勞をするより隠居して安堵に月日を送るなら此れに越したる樂はない併し此間  
も聞けば新道で小品とか云ふ容貌よき女ど人しれず割なき中に暮らすとか其に附けても此方の  
れそよはまた一向の乙女なり其故内に居ても面白くはあるまいが兼ねてねぬしの親の遺言に  
そよを娶合せ夫婦にして家名を續せるも呉々も遣した言葉の無にならねば足らはぬ女房も因縁  
と無理押附な事乍ら小品の手を切り會與に不便をかけて遣つて呉れ其替り折節は附合ひ杯で遊  
びにも往がよしさ若い中の事だから何でもするなでは無けれ共此頃は餘りこうじた遊び方其が  
募ると果のやけとなり身の治りがつかぬ様になる者だから三度に一度は内に居て店の用事も仕  
て呉りやれ併し此位な事は言えないでも承知して居るであらふが破れぬ前の針だから此れから  
心を入替へ生根をすへたがよいぞやと酸いも甘いも噛み別けた親味の親の異見より義理と情け  
を糾ひ難世の恩愛深き繼父が行末結ぶ異見の綱は主中梅雨松風之三ッの急所を真綿にて絞めら  
るゝより尙つらさに伏し沈み何と答へんやうも無く只もじゝと座はりたる邊りの塵を掻き集  
め紙料拾つて居たりしが斯くては果はと漸く顔を擧げ「段々との誘教訓仇ろそかには思ひ  
ません此から心を入替へて弗つり小品を思切り貴父に御苦勞かけぬ様此地をナニ此の家で堅氣  
に心棒いたし升と聞て喜ぶ甚右衛門より次に立聞くれそよの婦しさ飛立斗りに思へ共思ひ過せ  
ば又苦勞今の言葉の節々も何様やら譯の有そふな思ひ切ると父への手前若し又ひよんな事を  
して運ない事をしはせぬのど末の末迄案じつゝかこち泪に暮合ひのハや報け渡る六つの鐘「イ  
ヤ多きに長話をしたサア」部屋へ行つて休息シナ「ハイ其では又明日トすぞ」立て我部屋  
へ入りたる後の話話は次回に譲りて鳥渡一服

白銀も黄金も玉も何かせん人の資之子にぞありけり昔も今も子を思ふ親の心は皆ひとつ異見するものも愚痴にふも行末思ふからの事それを疎略に唄女や妾狂ひの遊事夢にも出来ぬといふ事は知りつゝ通ふ寒風に一度が二度の世のたどへ積り積りて降る雪も解けぬ縁しの厚氷其陸事を取無くも解かせて流がす信實の親にも増さる義理の父是非も道理も噛み別けた情けの異見に一言のいらへも無くて彌三郎其場はスッパ男氣の切るは切つたが未だ切れぬ縁にしの綱はひかされて親と恨むにわらねども二世かけ契りし戀中を仇の旭に消へんよりいつそ手に手を鳥がなくて花の東に細煙立てても二人鴛鴦の番離れず暮らすならたとへ如何程愛き事に愛きを此の身に重ね夜具親に氣兼をしやうより氣儘な手鍋で此の世をば渡るが宜いとは云ふものゝ罪なきれそよを置去に此身が家出と聞くならば嘆かして後で難くらんサへ去り乍ら此儘に親の異見に従がはば小品と縁も繋げられず繋げぬ縁を繋げなば可愛やれそよは其なりに戀死するは必定と心二つに身はひとつ如何はせんと胸の中起つたり居たり氣も頓倒様子知らねば後ろより「アノ兄さん親さんが手此れ金を山十さんに持つて行つて大きに約束を延引いたし升たいづれ明朝は愚親が参つて伊話をいたし升から先き方の方を宜敷お頼み申し升トそう言へど仰しやいましてヨ」そうかそうして此れ金は幾許程あるのだ子「ハイ私しや幾許程あるか一向存じませんヨ併し大金だから能く氣をつけて行けと仰しやいましては「ソヲカ其れでは直ぐ行つてこやうから其の羽織を取つてくんナエナイ早く取らないか何故その機に笑らふのだ其れでも又新道へ（小品の内を云）いらつしやるとお親さんに此られるから馬鹿をいへ面白くも子へ其れはそうと通くならねへ内早く行つてこやうと羽織引かけいろく」と取る者も取り敢へず飛が如くに急ぎ行く話替つて新

道の小品は織母が邪見ゆる一人の旦那で氣に入らず二人三人勤むるか彌三郎に無心をするかと朝夕小言に絶へぬども一度や二度と我慢して無心もいつたが度々は我慢に我慢の氣毒さざりとてれ金を貰らはすは立てし探も水の泡以つそ此身が淵川の藻屑と消へば慈深かき母の心もひき汐に流れん若と娘氣の心細くも只獨り何所を當とも白路の無分別にもたどり行く時刻も一度宵暗に人目の關も河岸傳ひ足を早めて向ふより來かゝる人も急ぎしか思はずはつたり往き當る拍子に見合す顔と顔「チャ貴様彌三さん」そ云ふ前は小品しやないか今時分何所へ行くのだと問はれて返事も泣く斗り涙にかきくれ詞も出ねば彌三郎は不審の雲霏れず「何様いふ様子か知らぬが何を以てふても此所之往來人目もあれば話もならず幸ひ明き家の此の茶店此所で緩くり譯を聞うト以て漸く心下をさすりながらに從ひて行く

櫻が雪と散る比も夜風の以まだ肌寒く按摩の聲や蕎麥賣の聲も遙かに初夜の鐘諸行無常と告げ渡り葉越の月の薄ぐらく離に遠慮も差し向ひ膝と膝とをつぎ合せ語る話の哀れげに小品は涙押し拭ひ今晚家出をした譯は兼て貴君も存じの母の氣性故貴君一人では氣に入らそ外に旦那と幾人も持のが否なら無心を以へて寐ても覺めても小言ゆる居るに居られず家出していつそ淵川へ身を沈めん此河岸をたどりくして思はずも貴君に於出會申したは神や佛の引合せたらぬ者も因縁と此所からぞうぞ私くしを何國へなりと暫時の内記連れなされて下さらばごん淋しひ暮しても此身は少しもいとひません其を以とふて私くしを私見察あらば望みなき此世に生きては居ませんと思ひ込みたる一言に彌三郎は手を打ち黙首きて「イヤ前がそういふ積りなら自己も大きに安堵した」そりや又何故でござんすへ「さればそれ前も知つて居る通内にとれそ

よと云娘のあるを見向もせず日毎毎前の方へ通ふのが何時の爺の耳に入り甚き異見も義理と義理のつびきさせぬ相談に前と縁を切り升と言つた時のそのつらさ其から後は兎に角に内に居るのが氣に済まずいつそ兩人で此國を脱走するが上策と想ふ矢先きに親から何様いふ譯が知らぬへが山十方へ渡せよと何已へ渡した二百圓此こそ天の賜と飛が如くに河岸傳ひ思はず出合たれぬしの始末其方もそういふ了簡なら此所から直ぐた大坂へ通ふ瀬蒸の黒煙消へて仕舞が上分別とは云もの其後で爺や母に苦勞かけ思ふ罪を作るのもこれも何ぞの報ひであらふとは云へ厚き御異見を反古にいたした不孝者お赦しなされて下さりませと合す手先を振り拂ひ小品は彼方を伏し拜み「旦那の身持の放埒も皆な私しのいたつらかられそよ様のあるぞども知らずに結女悪縁の報ひ報ひて此始末定免てにくひ女ぞと恨みあるを知り乍ら暫時の間彌三さんをお借り申して身の難義逃るゝ迄の御辛抱無理な願ひも成行と察しなされて下さりませと二人互に手を合せ詫る姿のあはれなり小品之嬉しさ悲しさに落る涙の目を押へ「私しの様よさま私しの様な虫が付可愛い貴君を取られては生て居たとて甲斐ない浮世いつそ死だが増かひと女心に若しひよつと短氣な事をなされては何様も私しが世間へ濟ぬ其より私しが今此所で命を棄てなばおだやかに浪風なしに兩人のれ身にも怪環のない故に私しは此所で死ぬ程に思出す日があつたなら其日を忌日と一篇の御回向なされて下さりませと始終涙のうるみ聲立にかゝるを引留め「コウ小品れめへ氣でも狂やしチへか「おぬしを殺す位なら自己も生きちやア居られねへそうして前に死なれたら今の苦勞も水の泡義理立するの嬉しひが却て爲にならぬから野暮をいわずに止がイ、「それでも義理が「ハテ義理も絲瓜も入る者かト云折告る時

第十回

の鐘世間もしんみり夜中過ぎ蕎麥屋按摩の聲さへも途切し程の時刻なり「イヤア今のは何時だろう「ソウデスチへ最う二時比かも知れませんヨ「ソレジャア今から仕方が無い熊の内へでも留て貰ひ何に歎の事明朝にして少とも早ふ行ふじやアへかど兩人手に手を陸しく熊の内へ急行く

彌三郎小品の兩人は熊の二階にて差向ひ憚る人もあらし吹く空も曇りて薄暗く雨は次第に懸模様浪花に通ふ蒸氣さへ絶へし日毎の雨天ゆる羽を持たずば飛ぶ事も協はぬ深き蒼海に取れれたる島國の如何に心を急るとも陸地なれば浪風の静まる日和の青空を待より外に術もなし兩人の窓より顔と顔空打ながめて嘆息つき「エ小品コウ降りが強くつては兎ても明日や明後日のコツチャあるまいノチ「ソウデスチへ人の心も知らないでホントニじれつたい様で御座いますヨ「ソウチサ實に氣の揉た話だがドチモ此斗りは仕方がチヘトハ云へ此様なり行くのも矢張不孝の罰だろウア浮世と云者はイヤ青蠅もんだのチ「サア其不孝者にさせたのも皆な私のおたづらから今更云ふてはかへらねぞ去年の櫻が媒介で思ひ懸なく相生のかはらぬ千歳世の松枝と及ばぬ戀も瀧の山登りつめて之中々に前後の路をふみ迷ひ迷ふてくらき畔路へ貴君を誘はぬ其内に思ひ切りなば今此所で悔む言葉も有馬山其本道を辨へぬ女心の淺はかに晝は幻夜に夢一心不乱に此の胸を焦す誠の感じてか思はず此家で新枕嬉しい夢も悪縁の種を蒔しか情なや世間の義理も親の目も私し風情にね親やれそよ様をも後に見て手に手を取つて家出せば人の誹や神の罰其れも此の身いとねぞ勿体ないのはれ身の上愁氣ひ悲しひ憂き事も私故になさるかと末を思へば此胸が張裂く様でござい升と膝に取つき正体もなき聲隠す忍び音に彌三郎少く



急ぎ立ち「またしても」其んな詰らない役にも立たぬ案し事欠陥するのに後々迄氣遣ふ者が有る者かト云ふのも此方の自惚か定めしれた前の心では彼様男に何時迄も引ずられては行末が思ひやれて欠落をするも云たも否になりねそよや爺をだしにして体よく離れて舞ふ氣かそふ云ふ心と知ずして今迄盡せし口惜さ心がつめては片時も側に居るのも穢らわしひト立んとするを引留むる手先を拂らふて「ハテ青蠅せへ未だ自己を化かす氣か「アレマヤ其な氣強る何で私しが其様な愛相がつきたの縁切るのど何様して貴君に云はれましようそれも私しが長舌も及詰らぬ事を云出して貴君の氣に障りたのはかへす」も不調法必らず氣に懸られず御機嫌直して下さるまじと詫る心のぬじらしわ彌三は素より眞實に腹を立てしに非ざれば完爾笑ふて脊撫てさすり「イヤ飛た事を言出して大きに氣を揉せたさわ」自己か悪かつたからモチ堪忍しなト云はれて漸く顔をあげ泪押へて泣き笑ひホントに貴君は罪ですチへ私しや何様に氣を揉たか知れやアしませんヨ「マア其れてお御機嫌が直つてお目出度ヲホ、「ハ、馬鹿をイヘト云折下にて格子戸の音々ワラ」「ワ非誰か来た様だから最少と静にしなト云内這入る二人の男にコラ母ヤ此所の二階に中田屋の若旦那居るから一寸下迄呼んで呉ンチヘト云れてお熊は胸に釘ギンクッ當つた揚弓と思つたなれど色へも出さす「イヤ誰殿か存じませんか左様な方はいでもいしじやチへかコラ自己ア番地で尋子はしねへ外で様子を聞たから其れで這入たんだ微是言はずに早く出しチへ「デモ左様な方方は「ハテ情の強い知ていりやこそ連れに来るのダ四の五の言と直動化と出かけるヨサ其れが否なら早く出しチへ「それでも「エ、じれつてヘト立にかよるを支へてもあらくれ男に老の腕如何で敬する様もなく遂に二階へ馳せ登り兩人を運

れて歸り行く

第十一回

互に愛しや愛きことを重々の雨足も今日之晴るゝか明日の夜の遅くも此地を白浪と喜ぶ甲斐も荒浪に押し流さるゝ駕籠の別れ「の和布舟顔は見合へと言葉さへ通し兼たる鳴門の瀬戸に巻るゝ拾小舟思ひぬ別れをなしてより小品の安否を尋ねんと心は矢竹逸れども動くことさへ儘ならぬ重き碇の部屋住ひ港の口を一すも漕ぎ出す術の協えねば小品の何國の何の濱に居る事か便の無き若しひよつと母の非道に憂き事や艱難辛苦をしはせぬかとそらに送る月日さへひと日も永き三秋の思ひをなせしも何時となく忘るにあらぬ海らぐ人の心の常なれば今之左程に慕としき心も止んと思ふ頃父の依頼知らねども血肉を別けし兄弟も及ばぬ深き朋友にて心伶俐く文學も彌三に劣らぬ發明者例時かはらず徒然を慰む爲に音信きたり四方の語の其内に洋學修行か議に移り今時迂遠な漢學に貴重の腦髓をつかふより寧ろ英書か佛學に心を込めて今迄の積る身持の放埒や小品の念を絶ちしならば親にも安堵をさする故後の所は兎に角に此身が万事引受ければ以つそ身は東京へ脱走するが上策ならんと勤むる言葉に彌三郎も實に尤なる事なりと喜びたり朋友もその日はそのまゝ別れて歸りぬ如斯て彌三郎は日々に東京へ出立の都合を思ふ床の裏にそよ其と白露の花の盛の山櫻咲は出ても見殺しに手折らぬ彌三の恨先しく今日と言ふか明日の夜はひとり心も辻ランア燃る思ひの不知火や慎み深きねそよゆへ少しも色へは出さねき去頃兩人で鳥が鳴いてふ東路へ家出の企なしたりしも仕途はせずして歸りしが其から後には部屋さへ儘に出られぬ禁錮に小品の事を思ふてか日々は何やら物業と案じる身より彌三居てよそに見る目のいぢらしくいつそ小品を呼び寄せて兩人で機嫌を取つたなら悪しき身持や

二つに今の苦勞も内證の父の機嫌も善かるべし今迄兎や角思ふたは女心の淺ましき心が付て一刺も早ふと胸は急れども言出し兼る娘氣の婀娜氣なきのも可愛らし去とて果し附かされば漸々心を勵まして次の換を怖はくソツト此方へ入來り「アア兄いさん早う寤で座いませカ」ナニ少し氣持が悪るから一寸横になつたのサ然して前は何か用でも有つて來たのかと問はれて何處やら羞しく言出し兼て伏し沈む姿も深き山櫻色香を含む愛敬は又一層の詠めて彌三も心に移り香の露を含みて柔和しく「アア兄いさん小品さんが居ないから嘸淋しゆ聖いませやうねへ」又詰らねへ其が何様したとへ「ナニ何様もしはしませんが子何時かの様に貴君が留守になり升と矢張私しの仕様か悪いゆる兄の身持が善くないとまかられませ故是れから何様ぞ兩人して貴君が外へ出のない様に仕合せをいたしましたなら親親りや小品さんも苦勞無く貴君の爲にも善ろしいかと不束ながら存じ升れば何様ぞ明日から小品さんを呼びなされて下さいませしとうさへなれば中能くして兩人で罷を致し升別つた様でも乙女氣の婀娜ない言葉も道理なり其様に前前の言ふ様に何様して小品が呼ばれやう其れこそ親さんが何様に小言を言ふか知れやアま子へト口には言へ心には去頃の家出に愛相もつかさず新く迄吾身を慕ふて呉れるかと思ふに付つても此度の家出明日にも此地を立退くか知れぬ此身を兎や角と察する心のいぢらしさいつそ打明け言はふかと思つたなれ共一大事若しや知れては此上に愧に辱をば重ね夜具煙草の煙にまぎらして其場は体なく六枚し屏風くるりと引寄せ口説に袖さへもびツまより汗を三ッ濡團互の胸も縞子の帯解けて嬉しき新秋かはす言葉も嬉しげに其夜と別れて歸りけり

第十二回

再説も彌三郎と小品の愛に惹かされて迷ひに暮す三歳の月日も何時しか立田川浮ひた心も銀の重き鎧につながられてれそよの色香に上羽の蝶染めて染まらぬ比翼紋をど契る間もなく復た破るひと夜の夢と氣強くも交際厚き友達の教へに去たがふ脱走は不二の高根か比馬長野の山にも登るこちしつ内外の首尾の無風の空又なき今宵の出舟こそ神の吾をや悪むらめ如何で猶豫のなるべきぞ其を兎やかう仕損せば信實深き朋友や親が世間へ顔向けのなうぬ此の身の思案にあり中々安んずる時なう一分後れば一字の醫深山の奥の環も磨けば同じ光りなり尊き玉に仕上ぐる迄暫時の間纏を解かせて廣き滄海に一先流がさせ給はれと勇々しく我家を暮合の鐘諸共に路次口より裏へ廻るも苦しむよつと人目の關守とやめやせんとまのびくの類冠り結ぶ縁しも仇し野の風に吹かれて故郷を離れしくも別れ行く此れが此世の見治めかたとへ再び歸ることも三歳四歳の春秋を越さねばならぬ身の修行子細も言はず離れなばれそよが嘸かじ恨むらん左は去りながら定めなき浮世に夢を結びしと暫時の間明らめてまた來る月日を待てかしの氣強く思へど胸の中最早別れと流石にも乱るゝ心をまのび足我家を跡に後髪引かへさるゝ心地しつたざる道さへ儘ならぬ浮世の義理や身の爲と心を勵まし歩み行く間もなく蒸氣は十二時の鐘諸共に吹き鳴らす涼笛を合圖に黒煙車の音の喧すしく船の進むに從がひて次第に離るゝ故郷の梅と櫻を振り捨つなれぬ東へ唯獨り語らふ人もなくくに硝子障子を引き開けて彼方の山の見ゆる迄伸びつ屈みつ尺蠖今は故郷の山さへも霞の浦の憂や露に姿も見えず鳴門路は物思ふてか其れなりにあはじの島と加田の浦浦邊遙かに佐野沖も波を横切る蒸氣ゆに瞬く内に浪花瀟安治川口にぞ着きにける新くて其日は座摩高津道頓堀や千日を彼方此方と南北の歩堂も此處に中の島で名代の千田川(阿波の定宿)今宵は此處で假枕旅寐の夢も唯獨過ぎ越し方や故郷のれそよ

小品の成往きを免やかう胸も水車環る時計に一寐入明る旦は浪花路を陸行く瀛車に京都迄飛が如くに嵐山祇園清水金閣寺兩門跡や東山此處よ彼處と東西の大谷名所比叡の山京の府中の見物も紙に限りの新誌ゆえ次回の春に綴るくと未だ先長き宿々は五十三驛七ヶ國路程も遠き百里餘の海山越えて東迄歩みし様の荒増を拙筆にて綴るへし

第十三回

四海波静けき伊代にあさいとの阿波の鳴門を借ぎ出で諸人集ふ浪花津の京の都の名所も此處よ彼處と見廻りて早や夕日さす華頂山花に名残りは東山々の麓を東路と急ぐ大津の走り餅今宵は此處に宿りして明る旦は近江野や琵琶の湖水に舟浮べ渡る矢橋の百千舟具帆ひく明けの出船にも月落残る石山の秋にあらぬ春の空々行く堅田の厂も群をつくりて睦しく彼方此方を飛び行くに此身は氣強く故郷の比良の雪間の梅が香を見捨てて此處に勢多の橋渡るも愁氣く渡らぬもつらき粟津の草枕々の塵の積りては情も深く三井寺の霞に響く鐘さへも身にまみくと時雨來て泪催ふす唐崎の松を遙かに見渡して渡れば名に貞ふ乳母が餅草津の驛はよしあしの品を定むる追分と昔を思ふ石部宿桂の川の水口も此處に浮名を流せしか此身も同じ土山の霞に曇る坂の下人目の關も龜山と万世かけて契りしも人にはそれとは内庄野互の盟は石藥師かはる虫いぞやかわらじと結ぶ縁しも二歳や三歳さころか早や四日市それを管無く別れては定めし後で恨み言氣には桑名と知りつゝも越さねばならぬの宮の驛熱田の神の恵みにて未は女夫に鳴海瀧必ず狭き心より池鯉鮒の池に身を捨てて人の笑や譏り言うけぬやうにと氣遣ふも深き兩人が愛情の互に思ひ思はれて心も置かね岡崎の矢矧の橋のいと長き渡る浮き世の浮き沈み所定めぬ藤川と心赤阪御油の宿今となつては故郷に梅と櫻を左右手何れを吉田の豊橋と定め難なき義理合

第十四回

に心二々川身は壹つ荒井白須賀舞阪と廻るごとさへ今やはや開化の御代の難有さ新所の宿をひと飛びに通ふ蒸瀧の逸早くはや濱松も打過て二ノ瀬に流る天龍の川の彼方は駿河路や富士を見附の嬉しさに思はず胸の袋非も糸の掛川綻びつ照す旭の日に阪に解けて流る大井川墓なき御幸(盲目あさかばか)駒澤を小夜の中山泣くく暮ふ願も金谷宿嶋田の鬚を潰せしと昔話も今と早や此身が強顔き駒澤と若しや後をは泣くく危ふき藝の藤枝を傳ふて愛きをせぬ様と心も岡部の鞠子驛勇む姿も静岡や府中江尻の浦風は千鳥わやなす帆掛け船三保の並木の音なしや原の白酒それなりに沼津に三島と思へども袖引箱根の宿引に引き留らるる湖水の富士をかさに寫せしはかくにもかけぬ箱根山八里余を朝夕に通ふ肩輿に湯本迄降れば東も程近く旅寝の憂さも今宵限明日は日出度東京と心嬉しくそくく寝る間も無くて明けの鐘湯本を立つて小田原も大磯運ぶ平塚や藤澤戸塚も何時まかに早や程ヶ谷も神奈川の七時の瀛車に川崎や波も静けき品川の沖の白帆も黒煙鳴らす涼笛に日出度も鳥が啼てふ東京の花の中なる日本橋石町邊の知るべをば尋ねて其處に辿り行く

在然程に彌三郎は一月あまりも知るべの許に居たりしが素より俳行の目的ゆえひと日も虚には送られじと芝の或る學校え入塾なし夜に日を續で勉しが効も早き二歳の月日もたぬ其内に早や英學も普通は解する様になつたるが花に木嵐月に雲其身は尙も行ひを正くなして學問も人に優れて故郷に錦を飾りて友人や親の笑顔を見せ欲しと堅氣な心も方圓の器に従ふ水心圓くなるのも方角なも交る友の善惡と昔の人の教こそ實に尤のことぞかし爰に彌三郎が入塾の始よ

り同じ 階の部屋住ひ君よ僕がど人湯や散歩の折も連れ立し小林内間と云ひけるは兼て芳町邊に馴染り折々彼所に趣きて土産は何時も怒氣ゆる彌三は舊古の坊びと青蠟く思へど仕方なしに体よく音ひなして共に搦き出す粟の餅昔は色の杵取も水氣をさうぬ比翼餅離れぬ黍の搦き立ても一度は搦んだ餅搦きと合鍵打つて搦き鳴らさ中田に(彌三郎の姓)で名物の勇みの餅を喰せたなら定めし風味も芳町と飛びつく事之必定と折に離れては勤勞しが叶々同意の氣色なく却て身持の不品行を風打たする氣色ゆる見懸にやらぬ野暮者をつふやきつゝも折々は同じ遊びに引き入んと今日も同じ打ち寄りて内間「コヲ中田君ソチ君の様に勉強計りまぢやア肺病が出るせ 小林「サア少ツト此方へ寄つて話したまへ明日は日曜日 中田「ソチカチへ僕は明後日かど 小林「イヤハヤ勉強家には驚く子へ 中「時に今日は幾日ダツケ 内「ソチサ五日だらうヨ 小「ホニニ五日といやア今日は水天宮だ子へ 中「道理こそ往來が騒がしひと思た 小林「ドラダ此れから散歩がてら往ふか 内「随分宜子へ 中田「君は水天宮へ行つたこたアあるまい 中田「イヤエまだ行つたこたアないのサ 内「ソレじやア三人で往ふか 中「併し又此馴染のトコへでも引ツ張れると困るからマヤ止ヲヨ 内「ナニ馬鹿なこと「眞實に其様なら行つてもいよのサ 内「ソレツヤア小林君行ふじや子へかト三人打ち連れ立ちて歩を行く 中「イヤ中々芝からでと遠い子へ小「車に乗るふか 中「ナニ其様に草臥もしない 内「併しぐずぐずするよりやマツそ乗つたが宜からう 小「ソナナ君達やアア緩々來給へ僕が宜車を具附て來るからト云ひすて往さしが(二人乗一人乗) 詭へ來り 小「サア中田君は其方へ乗り給へ僕は内間と此方へ乗るからと云ふ間に車は芳町の或る料理茶屋につきければ 茶屋女房「ヲヤ小林さん此間はさッパリお見限りでスネト言ふ聲聞て 彌三郎は「小林君此處へ小「ハチマア宜から此方へ來給へナヲイ母ア二階は

まかへ女「ハア能ふ座いますヨ 小「それじやア話は彼方でまやうと彌三を連れ二階へ上れば間もなく此家の下女なるか「マアチヨイト小林さん「ナンダ自己カ「ハイ誠に憚りさま(小林は縁側に出來) 何を動か子「アノ藝者衆は矢張り離吉ちゃんに兼吉さんでようご座い升カ「ソチサ子へ誰か最一技かけて呉れないか「それじや此春大阪かや來た小露さんト云ふ子は何様です中々今日日流行ます「ソチカをいつア面白ひ併し明て居ればいしが「マアひとつ掛て見ませうと云ふ内酒肴を持ち來り下女の酌にて二ツ三ツ半酔機嫌になりし比次の襦を押し開けて「皆さん今晚は下女「ヲヤ離吉ちゃんに兼吉さん旦那が先程から大層お待ち兼サア直ぐ彼方へ「ヲヤソチア誠に御みません子へ内「サア「何でも宜から早く始め子へカ 兼吉「ハイ(少々小聲ニテ)眞實に内間さんは性急だヨ 内「何ンダト兼「ナニ宜月たど云ふことサト言ツ、彌子も三下りを喧しうもを馴染で省く端歌やトツチト心の尺の都々逸で惚氣で唄ふ賑かさ(兼吉之彌三に猪口を指し乍ら) 貴君大層を静です子へ 中「ナニ蝶りたくつても田舎房だから此様處へ來ちやア少とも口とさけ子へノサ 兼「ヲヤマア甘くお仰いますヨそれいそふと小露さんは大層遅じや有りませんか 小「ソチサ餘り人を馬鹿にしていらア何ンなら他へ言つて遣るふか 下女「ナニ其内には參りますト言ふ折り下より上り來る音は儘に小露ぞと待間程なく次の間の襦を明けて這入來る明女は年も十八九廿ならぬ楊柳姿目元にこぼるし愛敬は靜御前や衣通姫の野暮で古風之言はずと知れたり如何でこれに優るべけん小露は彼方へ打ち向ひ「旦那今晚はアリ姉はんね早ふト言ツ、彌三と顔見合せ 露「ヲヤ離「ドチカおししか 露「イ、エナニ此猪口か劍つたのかと思ひ姉たのサ抑モ此女は如何なか者かそは次回を讀みて知り玉へ

再説も彌三郎は兩人の友に誘はれ水天宮に詣んと思の外に左はなくて兼て噂に漏れ聞きし彼等が馴染の芳町ゆゑつさきり良にかつた心か附ても仕方無本意にはわらぬと交際と不性く此樓へ登りしが酒も三ツ四ツ座附の唄廻る甚九や都々逸に何時か心も柔きて半醉機嫌になつたれど土地で名代の流行ッ子小露とやらんの來らねば如何はせしと待つ内に次の襖を押し開けて一座の客に會釋する顔を見れば小露と云ひしは如何に紛ふ方なき小品ゆゑこれの計り胸と胸も前も無事で含女も健康でどかわすことさへ中々に人目の關にへだてられ云ひたぬことの多けれと虫を殺して目で覺す心の中の切なさには思はず落す一ト車若しや人目と顔をむけ紛らす心を哀れなり斯くて其夜のそくく學校指して歸りしも後に心の引されて睡を破る夢に逸姿をうつす戀しさに其夜も碌々寐やらす明れば六日は休暇ゆる齋を出でたる心地で思ひくに出で行きし後に中田は唯獨り其日の暮るゝを待兼て黄昏近くなりし頃姿容もそくく芳町の某樓に急ぎ行き「母ア今晚ハ「チャ能ッマア此のね寒いに獨り入らつしやい升た「ソッソヨ「小林さんなんザア何様遊ばし升たへ「ナニ自己は他から直々廻たから「チャそふで浮座いませカ夜前はね相籠様さふか又ねこりなさらなほで何様してこりるごころか直ぐ返して來たんだ者を時に母ア夕邊來た小露とか云ふ女を何様かして遣つて呉れないか「ハイ畏り升たと言ッ、後を振向きて「アノ竹や（此家の下女）「酒が出來たら早く持て來ナそして子松（此家下女）を美濃屋（小露ヲ抱への家）へ大急ぎで遣て呉んなヨ「ハイ只今ト云ふ内酒肴を持出し女房の酌にて二ツ三ツ始る内に次の間より（下女ノ聲ニテ）アノね内儀さんチヨイト「アイヨそれじやア少し免下さるまじと立て往く階子の中央にて「チャ小露さんかハイお内儀さん今晚は旦那が先程から大層に待兼たは（少し小露にて）小露さん深くなつちやいけなヨ（ト小露ノ肩ヲ少ッ

トツツ「チホ、馬鹿らしひト言ッ、別れて登り往く小露の思はず戀人に廻り合ふては嬉しくも又悲さの彌増り何から話してよからうやら別れて後の過ぎ越方も又今更に悲さの數をそへたる女氣の胸一ぱいにせき來る涕こらへ兼てぞ次の間の障子を引開け思はずもまろび込だる一間の内彌三は見ると小品じやチホ「アイト言た計で正体も抱きついたりキリくす泣より外のこどどな兒兩人が嘆き道理なれ小品ハやうく顔をあげ「若旦那ヨウマア尋て來て下さいましたチホ（彌三は涕を押し拭ひ）サア「自己も夕邊は友達に余儀なく此處へ誘はれての交際酒言らずお前に逢ふた故夢ではないかと思ふ程なつかしうは有たれど人目もあれば話もならず余儀なく今晚出直して逢ひに來たんだが何様して此地へ登つたか定し様子があるでわらうと云はれて小品はやうく「何から話しやそやうやら二歳以前に國をば夜脱けに東へ逃れんど大事の貴君を連れ出した神のことがめが報ひ來て厭きもあかれぬ戀中を割れて貴君と別れやし其から後は兎や斯ふと兼ての母が氣質ゆゑとほく私を大坂の浪花新地へ藝子の勤先それも一ト月立ぬ内に奈良の木辻へ女に賣ると聞た故同じに金になるならば何様を奈良より東京へ此身を賣て下されと涕と共に顔しが漸々道理を開き別て東の住るになつたのも貴君が此地へ登りと風の便に聞た故若しや逢れもしやうかど其を便の此勤必ず女の淫乱と見棄す末の末迄もといひも畢ず溜涕ワット計りに泣出す小品の脊を撫で御しやうしてかばつて宜者かそうして自己が家出し九譯とかうして斯々と過にし次第を物語れば小品と涙を押し拭ひ「そういふとは露しらす定めし外に増花のありて此身に秋風の立もやせしと恨しは皆な女の淺蕙さとはいふ者のもしやまた「コウ自己を詮議するより前こそ情人をこせへたらうト云はれて小品は暗からぬ心の裏の露白を明さん者と思へども此様浮性な家業もる音別け暗さじれつたさ胸に餘し愛き事を委敷語り

明さんにも唯悲さが先立て留まかねたる涕の車はらひも敢ぬ折も折下女の折竹は次の間より  
「ハイ靴銚子を

第十六回

昨日の淵は今日の淵どのはる浮世に定なき小露は夜毎の客勤め仇な枕のかけさねを否な客も  
奉公と機嫌氣妻の藝者の愁氣さ寧そなまかながらへて憂き艱難をしようより飛鳥の藻屑と消  
へ失せば彌三への義理や二つには吾身も苦界を脱するも今日死ふか明日の夜はとわじきな  
き世を打ちかこち送る月日も半年ばかり如何なる神の恵みにや不斗思ふ戀人に廻り逢ふ瀬の嬉  
さにひと夜ふた夜と招く内透ひ燃え杭の世のたへ今は中田もあつくなり吾身を忘れて通ひし  
が素より書生の身分ゆゑ争て續く様もなく國の送金も憂絶へてしるべの許や友達も彼方此方ど  
借盡し詮方なくはなつたれを流石小露に斯くも話もならず唯獨住吉町の裏長屋靴虎の（小露が  
まゐるべの家と知るべし）二階に侍々と身の越方を打案し溜息つめてを居たりける「ホンニ小露  
も小露だ是非七時迄には来るから何様か此方へ来てくれろと先刻はがきをよこしたにまわ何様  
用が有か知らないが最九時も過ぎたに何をまて居るかまらんと小言たらしく待つ内に下の格子  
戸引開けて「靴虎さん今晚は「ヲヤ小露さんかもう先刻から大層に待かね「さうだらうと思つ  
て何様に粟を喰つて來升たろう「それでも子余り遅いから又出直してこようかと仰やつたけ  
どもね無理に止め申すのさ「チャさうそれじゃア行ても宜子へ「ア、宜ともまかり靴虎さんへ  
さい「ヲホ、有かどうと言ッ、心嬉さにいそ「二階へ上行き「靴虎待遠で去たろう子へ  
ト中田の側へ寄添へば「面白も子へ最十時だせ「イエ最少ト早くと思ひ升たけども子折悪く口  
が、つて座敷へ出た者だからツイ遅くなりましたのサそれ他なら断ッちまひ升けども魚十

だからそうもならず其上馴染の客ですものヲ何様にじれつたかつかまれませんだつたヨ  
「イヤハヤさはさいで惚氣だ子「アラそふじやア有ません「不斷最儀にまてくれる者だか  
トそんなに無氣に「つちまうと最今度から招でくれなくなりまはアチそふする「母アに小言を  
言れるから仕方なしに出るんだけども靴虎さんへそんなに腹をた立なト最これ「さう止升のら  
何様か堪忍まで下さるナエ彌三さんエト詫る中ばに段階子首をさしてを登り来る靴虎は酒肴  
を持添へて「何様も子へ今日は誠に魚切で靴氣さまをさして子小露さん用があつたらなんでも  
遠慮なくさう言て下さるヨ「ハイ有難う靴虎さん「一ツ上げましようか「イエ今日ハマアお預け  
にまままようヨだつても「ア「一ツ云ふ内下へ降りて行く後には兩人差向ひ厭つ馴へつ呑む内  
に何時か心も和ぎて前の口説も何處へやら今は兩人が寝轉んで話さへ睦むくヲヤ靴虎さん  
大層袖口が綻びました子へト言れで彌三は思はずもはろりと覆す「一車小露にそれと悟られじと  
紛らず心ざいとしけれ「アラ何様かおしのかへ「エ、イエナニ目へ塵が還入たの「サ、アレ其様に  
隠ないで話なさぬナ「ナニそふいふ譯じやア子へが自己も久しぶりでお前に廻り逢ひ一度が  
二度と數重り遂に二月三月と通よふ内國の送金も見限られ今じや友達意先借られる處は借り  
盡し衣服の素より書物迄賣代にして残つたは袖口切し此給と言ふを小露は聞き畢へサツト「子  
りに泣き沈む顔をやうく押し擧げて「中田屋の若旦那ともいはれるお身がわたし風情に斯く  
迄も憂き艱難をなさるかと思へば身も世もあらぬ靴氣それもお國に居る時分すつぱり思ひを  
絶たなら御兩親や二つにいわせよまにまにに嘆かけず貴君も御無事に居られるを何様した因果  
の報ひやら貴君と離れるが否さもある遠々を脱走と思つた事ハ水の泡消へたき思ひも待つ甲斐  
あつて不斗逢ふた嬉しさが互の胸の癢の種今の御身になつたのも皆んな私がつたづらから必ず

力及ぶ丈貴君に不自由させませぬと涙ながらに言ひければ彌三はろく／＼男涙き今に始めぬ和女の信切忘れれば置かぬ「アレマア其な勿体ないそよしてたまはんマア着物物はこれつきりですカ「ソフサ」それじやア私さきのト言ッた所が女着ゆゑト少シ考へいふんです明日の晩又此處迄来て下さるな屹とこさへてきまますから然して外にも又私話有り升からは是非来て下さるヨト其夜は別れて歸りけり

第十七回

塵塚のちりにまじとる松出も聲はすいしきものと知らずやどは塵塚於松の隙それかわらぬか知らねども小露は彌三か此身ゆゑ斯迄辛苦をなせしかと吾身の上の罪科を甚く心に痛めつゝ住吉町で或る裏家を借て彌三郎を住はせ何不自由なく暮らす内に頃しも七月下旬彌三郎病の床に臥し命も危き程なるを小露は力の及ぶ丈醫者よ薬と手に手を盡し夜の目も合さず側に居て病の伽をなさま欲しと思へども身儘にならぬ藝者の愁氣さ否な座敷も浮々ど浮々調子に客人を浮かす心も病人に引れて浮かぬ三下り咽ふに附けてと思ひ出し語るに附けては思ひ出す心の裏の心配に何時も座敷とうの空をそら言ひふてそこ／＼に仕舞の歸りは音信て病を問ふが何よりの樂き事と怠らず雨の降る夜も扇の日の中田の許に尋ねしが今日も同じく座敷のへり「彌三さん少とは心持が宜かへ「ア、今日ハ昨日から見ると餘程宜から先期迄様側へ出て遊てゐたのヨ」をうですか「ア嬉しひ子へ然して私飯は何様だへ「さうサ私晝には左程でいなかつたが夕に之兼吉さんか呉た鯛味噌でやつたから素的にいけたヨ」そりやマアよかつたがホニニ薬はへ「過期香んだからマアいゝヨそふですかト言ッ顔色を打撃め「それでも顔色の餘り善くないチへ」そふかそれでも今日は床の裏に居るよりかうして居るが宜やうだ「メツアも其様に起て

斗り居居でたと冷て悪かア有まへんかト一から十まで抜け目なく心を配る親切に思はず涙をばら／＼と膝に踏すを倍々ど小露の顔を打撃め「アラ又何か思ひのかチへト言へど何とも溜息を吐より外のとどなき彌三の素振の訝かしく小露は不審の雲晴れず「何故其様に出し抜にれ鬱氣なさいませへ「ナニし考へた事が有たからサ「アラ其様に他人じやアあるまいし隠でなくつても宜じや有まへんかと惚た女に言れては流石包むに包まれず心の裏を打ち明けて語るも哀れな物謂「實は此日前が此日比親も及ばぬ介抱を請るに附ても此様な見る蔭もない此私に斯く迄探を立るのも長の馴染の義理合が積り／＼て余義なくも運なる縁と活智なき此様男に何時迄もからんだ末は身の詰り其より寧そ今の内縁を切たら未だ若い其方の標致で何處へなと縁附く事は出来様故此迄結んだ悪縁は長ひ夢じやと明らかに明らめて否であらうが切つてくれと云ふてなまなか切れる様な和女の心に非されど迎も保たぬ此病氣見せ／＼和女が一生涯探を立るを貞女だと花も咲さず櫻木を仇に散すも此私しが惜くもあらぬ無駄花を散さぬも幾度か覺悟は志たが苦しや又後で運れなことをして共に花をば散したら益ないこと、今日迄は惜くもあらぬ玉の緒を繋ぎ留めたるも和女へ遺言必らずく／＼思はずに自己とは縁をと言ひさして後は涙に暮れにける小露ハ彌三が縁切ると聽ては身も世もわれぬ心地思はず彌三に絶りつき「如何に病の惱みとして餘りと言へば情けない此れ迄愁氣ひ辛抱も未ハこれ側で帯持つ賤の婢女になるとも厭はぬ美の心根も知らず菅無く別れてくれとは願欲な今更御身に捨られて堂して生て居られまよよう生て憂目を見るよりはいつそ私は死ぬ程に思ひ出す日があつたなら何卒葎草の花摩香南無阿彌陀佛の一言もせめては心の浮む様今はの際に此斗りた願申上ますと邊りに有あふ刺刀を持つより早く我が咽へ刺んとする手を確とたさへ「コレマア浮雲何をするのだ「何をす

とは情ない一生便りしあなたに迄振り捨られておめく〜と何んで生て居られましよう其故留  
ずと殺してと怨めしそふに齒噛して泣き入る小露を情く見て彌三は涙を押し拭ひ「イヤ自己が  
悪るかつた堪忍してくんなヨ」エ、それじやア心か解けましたか「アア解た共ト言つた  
斗りじやア合點が行くまへ」エ「サア其不審は尤だ併し此れには段々譯のある事マア一通り  
聽てくりやれ」チャン

第十八回

彌三「サア其の譯と云ふのこの間爺の許から手紙にて自己の所持の不始末を兎や斯う胸に五  
寸釘打るゝよりも尙愁氣き義理と情を糾ひませの異見の綱で科もなき和女と縁を切つた上一先  
故郷へ歸參なし妻と定めし不束なれそよと表向て祝言を濟せてくれと願ひの明日にも知れぬ  
老の身の心細くも外にはなほ獨の息子に別れて杖を取られた盲目同前それと親と思ふなら少  
しも早く歸參して安堵に老後の樂をさせるが親への孝行をた〜と不孝と知りツ〜も歸國を否め  
ば家の爲め世間の義理に勘當とのつひきさせぬ御見も更々無理とは思ふねと四歳以來辛苦し  
て繫し糸の中を絶え別れ〜になつたるも盡させぬ縁か久しふり不思議に逢ふた喜びも又悲さ  
の此病氣それも厭はぬ貞節な和女を捨て〜と何様して國へ行りやうかと云ふて別れぬ  
其時は年寄られしお兩親に老の苦勞も此身もささせねばな〜ぬ不孝の罪ざりとて此儘歸られ  
ぬ恩と義理とにからまれて詮方盡きし身の思案迎も雙方よひやうに壹つの身体で仕方なく命を  
捨て〜言ひ分けと無分別にも思ひしが能々和女の貞節を思ふて見れば大切な大恩受けしお兩親  
も捨る心になつた故是れから先はどのやうな貧ひ暮をすればとて決して見捨いせぬ程に心を確  
に持つてたもト流石に伶俐き生れでも戀には魯鈍人情況してや斯る妹背中戀路の暗に白黒さへ

第十九回

分ぬもさこそと察せらる其故世間の娘御や若き殿御は是れを見て必ず浮氣な事をして兩親に苦  
勞懸けぬ様「ホイこれはしたり飛んだわさ道〜」小露は嬉し〜さ遣る瀬なく飛び立つ斗りに思へど  
も又情々と身の上を思ひ廻せば數ならぬ妾風情に大切な親御を捨る義理立を何様して此身が受  
けらりようと思へばい〜悲くて暫時いらへもなかりしが漸々涙を押し拭ひ「殿にも足らぬ私  
しを其れ程迄に思召す冥加の程は嬉し〜も勿体ないとも言葉には盡せぬ程の志を無にする  
譯ではないけれどそれでは何様も私しおれそよ様やらお兩親に義理といふ字が立ませぬト言  
ふを打消し「コレサ手前も別らね〜じやアないか先程もあれ程いふ通り國へ歸らねば勘當だそ  
の勘當をされた日にや今日から他人も同じ事親でもなければ子でもない他人に義理が入るもの  
か「それでは餘まり「ハハ情の強いお内儀さんだ子ト言ッ、小露の股を衝く「ヲホ、マア  
氣樂な御病人タヨ「所が氣樂でないア「ヲヤナヒエ「ナセでもソレ何が有るから「ヲヤ妙なこ  
とをね言ひなはるヨサア私きが何時何處で何を何様しましたへト摺り寄る風情妍嬾氣なく雪の  
様なる袴元に梅香の香り布のかににして少し乱れし黒髪の前にか〜りし愛敬に思えずくるう煩惱  
の心の駒の留め兼ねて其儘其所に引き寄せられ小露は莞爾り打笑つ「それでも御病氣に障ると思  
いから「ナニ構ふものかと引き寄せられて嬉し氣に「ア。アレト云ふと木の頭「チョン〜夫より  
彌三郎と一月あまりも立つ内に病氣全く癒へしかば小露の喜び言はん方なくそれより座敷も  
大切に仕容を大事と勉れば日々座敷も多くなり小露〜と彼方此方か〜絶間なく出る内に或  
る日のことに座敷から口が掛つて出て見れば思掛げな〜留吉ゆゑ此れはと云り兩人は暫時言葉  
もなかりける抑も此の段落は如何なることに成り行くかそは次回を讀みて知り給へ



「イヤ小品さんじやア御座せんか」「ハイ留吉さん誠に其後はト後は涕に口をりりらへもな  
 くて伏沈む小露に向ひ留吉は「コナ小品さんじやアなかつた小露さんソナ泣いて斗りぬてはこと  
 が解く子へマア何様して此地へお出の言つても宜なら話なせト云はれて漸々顔を擧げ「余  
 りれ久振で故郷のれ人にれ目に掛ると嬉ひやら悲ひやらで序ひ御挨拶も致ませず誠に濟みませ  
 んでしたヨ」「マア御挨拶はれ互にしてれ前何様して此地へ來マシタ「サア話申も恥ぢひ  
 が此此地へ來た譯はト過にし昔を落なく語れば此方も目をしばたさ「ソリヤマア飛た事で  
 苦勞をした子へそれでもマア若旦那に逢つたから前も氣強だ「それも私のいたづらから選運  
 逢ふたが嬉さに一度が二度と數重なり果る國の送金さへ此身の爲に送らねば其から後は手一  
 ツで見繼といふのもいさすきた女の癖にどお笑ひ引くに引れぬ義理と義理それも三月と立ぬ内  
 何様した因果の報ひやら又若旦那の御病氣に非常の時と溜て置た僅のれ金や衣裳迄人參代に入  
 れ上其上愁氣ひ年季迄一年増した効能で漸どの事に御病氣は平癒たなれど未始終夫婦になられ  
 る身ではなし何様で一度は憂き思ひそれより寧ろ思ひ切り死んだが増かど幾度か思ふて見ても  
 今更に未練の綱に引されて結びまつはる悪縁の切られぬ因果な私の心の内のせつなさをお察な  
 すつて下さいと眞實守る貞節に留吉思はず手を打ちて「イヤ其心底を見るからは大きに自己も  
 安堵をた「トハ又何故に「サレハ自己が今度商用で東京へ登る時に大旦那様から呉々も兩人の  
 様子を見た上で眞底息子を思ふなら根引をなして國許へ同伴に歸えて下されどれ情深ひれ頼み  
 に東京へ登つて彼方此方と様子を探つた其上で尙も實否を糺さんとれ前を此處へ召び寄せて態  
 ど様子を開たれば噂にたがはず貞節なれ前の心底を見振た上は根引して一時も早く故郷へ歸る  
 支度をするが宜と云はれて小露は夢心でとないかと思ふ程嬉さ云はんかたもなく「エ、そり

やマア眞言で御座いますか「ナンノ嘘を言つて宜者か疑はまは此を見ナト萬右衛門より預り  
 し金子を其處へ投げ出せば小露は泪の目を押へ「留さん何んにも申しません此と云ふのも日頃  
 から念じる神の慈悲か私しは兎も角若旦那が此事をお聞なすつたら定した「歡で座いませう  
 「ナンニ若旦那といやアサツパリ忘れていた一寸此方へれ呼び中て色々積る話話をト言ツ「矢  
 立を取り出し「懐を探りながら「ホイ仕舞ツマ「アノ紙で座いませすカ紙なら此處に座いませ  
 よト帯の合より取出せば「イヤ年を取つては往生だト笑ひ乍請取さうくと嘗認めし文を前  
 に置き「これで宜だろう子「ア、よう座いませすト云ふ時下女が次の間より「ハイお銚子を  
 「姉さん誠に憚りだが此内迄鳥渡行てれ呉れな「ハイ畏まり升た「何様か大急で「ハイト言ッ  
 、立つて行く間もなく中田も出で來り是れより三人車座で積る話に更け渡る淺草寺の鐘の音「  
 ボチン「「ラヤモウ一時だ

再説留吉は自分の用もそこへに小露を抱への家に往き主婦に逢ふて云々と委細の様子を物語  
 り目出度金子三百圓にて根引をなせし當日は傍觀者や新聞知己の人を饗應て千秋樂や高砂と  
 盡きせぬ契松が枝に鶴が巢立の壽を千代に八千代に玉椿變らぬ色香降る霜に探を通す寒紅梅  
 長閑き春に誘はれて稠る運の開く日と花美やかなる宴會も流石藝者の根引丈花美に別れの  
 配り物に暇乞の濟んだれば今は自由に猿若や新富町の劇場觀明日之淺草向鳥目黒の不動比翼塚  
 此所よ彼處と連れ立ちて名残を惜む東京の觀物も此處に筑波山々を後に横濱を名残惜くも船出  
 して無事に浪花も徳嶋に目出度舟は着きければ小露は一先遠慮させ彼の留吉の内に預け置き其  
 身は留吉諸共に久し振りの對面も何やら恥て高からぬ低き敷居を踏みかねて猶豫するこそ道

理なれ留吉新くと見て取れば無理に彌三をば伴なひて「ハイ旦那様只今かへりました」「イヤこればママと一別已來の挨拶を述べた上「ホンニ此度は又飛んだ世話を掛けたさうして恩息も此同伴にと云ふを開くより彌三郎は「ハイ親父さん誠に其後は「フ、恩息かと思ふより早くばら／＼と涙に脆き老の癖「ホンニ久しく逢はねへ内見違へた様に成たノウ婆アさんと云ふ内をよりの次の間より茶盆片手に持來り「留吉さんヲヤ兄イさんも多機嫌能うと云ふもうじく口の内顔を照らす娘氣のなつかしひやら耻しく後は言葉も岩橋のいはぬはいふに彌三郎の春の柳の風俗も又一入の賑めなり此時下女が次の間より「アノ旦那様へ酒は此席に致しませうか「ソラサチへイヤ小座敷の方が暖くつてよからうから彼方へ遣るが宜「ハイ其では何卒か直ぐ「アイヨサア留さん何にも有りませんが何様か彼方へとは是より小座敷にて小露を根引せしこと又取そよと祝言のこと杯相談なし其夜は別れてかへりけり斯くて兩三日立ければ取そよと目出度三々の雌蝶雄蝶の取り遣りを首尾能く濟せし其上で小露を中田へ引取り表向の妾といひなし内々之姉妹同様姉さん妹とさも睦じき梅櫻粹と花美との鉢植を左手と右手に携へて老に事ゆる孝行は昔を恥て家業さへひと日も怠ることなく一心不乱に精出して今は堅氣に世を送り未頼母しき若者と育て上げしも慈悲深き親の教の行き渡り小露が探の顯之れて香りを運ぶ春風に梅の取そよと櫻木の小露が共に祝言はいとも目出度となりけり

南海千鳥の音信終

◎百味譚集

第三號目次

- 一 狐窟精仙著 一娘化粧挿頭紫陽花 完
- 一 櫻々堂著 櫻々餘談 完

一本誌の前金に非ざれば遞送せせ  
一 郵券代用の一割増但し一錢二錢切手に限る  
一 贈前金相切候節の御断りなく遞送を止め可  
一 申候又本誌御注文の節の御住所を封中へ階  
一 書にて御認め可被下候

● 發行日	毎月	一日	十六日
一・部	定價	金六	錢
十・部	前	金五拾四	錢
廿・部	前	金九拾八	錢
郵税	壹冊	金二	錢

明治廿四年六月一日印刷出版

編輯兼發行者

印刷者

發行所

東京市小石川區指ヶ谷町十七番地寄留 足立 庚吉  
 東京市小石川區掃除町三十三番地 小林 由造  
 東京市小石川區掃除町三十三番地 礫川出版會社  
 大阪市中心齋橋北詰 競争屋書店

古今小説 名著集

發行日 毎月五日 廿日

本誌の前金に非ざれば遞送せし前金御送りの節に可成大阪市順慶町郵便局へ御振込の程願上候

郵券代用の一割増但し一錢二錢切手に限る又本誌御注文の節に御住所を封中へ附書にて御認め可被下候

郵部	十部	計部	計部
前金	四十五錢	前金	八十五錢
重冊	金貳錢	重冊	金貳錢

廣告料四十字詰 一行二付前金之事

●第一卷目次

復月氷奇縁 曲亭馬琴著完  
小警花廻島臺 松亭金水著完  
治兵衛

●第四卷目次

淺間面影草紙 柳亭種彦著全  
夕霧書替文章 栗枝亭鬼卯著完  
怪談雨夜の鐘 十返舎一九著完  
後篇逢州執着譚 柳亭種彦著完

●第二卷目次

碗久柳巻話説 曲亭馬琴著完  
大津吃又平名畫助刀 式亭三馬著完  
土産

●第五卷目次

艶廓通覧 洞蘿山人著完  
三勝園の花 爲永春水著完  
半七

●第三卷目次

吾妻雙蝶記 山東京傳著全  
餘五郎

●第六卷目次

小夜石言遺響 曲亭馬琴著完  
中山恩愛二葉草 鼻山人著完

●第七卷目次

飛彈匠物語 六樹園著完  
郡部語近江の巻 柳亭種彦著完  
國物語 付出羽の巻  
全大和の巻 同 八著完

●第七卷號外

脚算用 井原西鶴著完

大晦日の一曰千金

發行所 礫川出版會社

發賣所 競爭屋書房

ななはかた集

目録

天 朋 苦 有 阿 引 一 小 美  
目 馬 馬 の 紀 琴 行 花 翠 山 完 完 完 完 完  
西 長 本 樟 渡 岡 扶 筒 田  
村 野 吉 廻 野 桑 井 口  
天 圭 欠 合 主 震 半 春 年 年 信  
圓 四 伸 人 亭 牧 香 峰

「ななはかた」の浪花文學會より生れたる浪花文學會の浪花文學の中興を以て自ら任む  
本誌の一冊讀切毎月一回發兌一部の定價金拾錢郵稅金貳錢郵券代用一割増  
發行所 大阪北久太郎町四丁目 圖書出版會社

賣捌所 大阪平井新聞鋪 岡崎支店 中村 峯雄 日本新聞會社 神戸元町船井 新聞鋪

# ○元和三勇士

洋綴美本全壹册  
定價金貳拾五錢

紙數三百四十ページ

此書の戸田新八郎田宮左金吾石川門彌の三勇士が一生の傳記を編りたるものにして其の酸辛艱苦の狀其の困難苦辛の様或の他の嫉みを受けて身を殺んとするあり或の奸黨の計に陥りて命を石半に墮さんとするあり又或時の猛獸を山野に討て衆民の困厄を救ひ武を他郷に練りて素望を遂んとするなど能く百難を排して大丈夫の志を全ふし三士毎に心を一にして遂に以て其素懷を達したる永物語りなり特に行文の彼の速記体なれば恰かも居ながらにして軍書講談を聴くの快味を覺へその武勇劇烈さ段に至りての轉た其場に臨むの面白さを感ぜる近來希なる傑書なれば諸君一本を御購求あらんことを冀かふになん

大阪心齋橋北詰

專賣所

競 爭 屋

# ◎香小史譯述 玉 手 箱

美製本三百八十頁餘  
定價廿四錢

一、西洋の小説は餘り結局に頓着せざる故終に至り立消とな  
る人物多し從來小史の成べく斯る人物を削去り從つて趣向に  
も多少の増減を加へたれど斯る原書に趣する人物もあり多少繁  
り此度の爾る増減を加へざれば管に屬する人物もあり多少繁  
雜なる所もあらんかなれども原書の趣さ其方が能く知らる  
一、小史が尊崇する懐動派の小説のなるべく短き月日の中に  
なるべく多くの事件を集るを自慢とする故一日の記事に於て  
數回の紙面に跨るも多し之に挿繪を入りて笠園主人の云  
る通り餘り目先が變らぬ故其時々様子を由り繪無しとす  
る事も多からん去れど挿繪の新聞紙の花にして殊に國峯子の  
丹青の讀者の大に愛玩する所なり

大阪南區心齋橋北詰北へ入

專賣所

競 爭 屋 書 店

涙香小史譯述

◎ 決闘の果

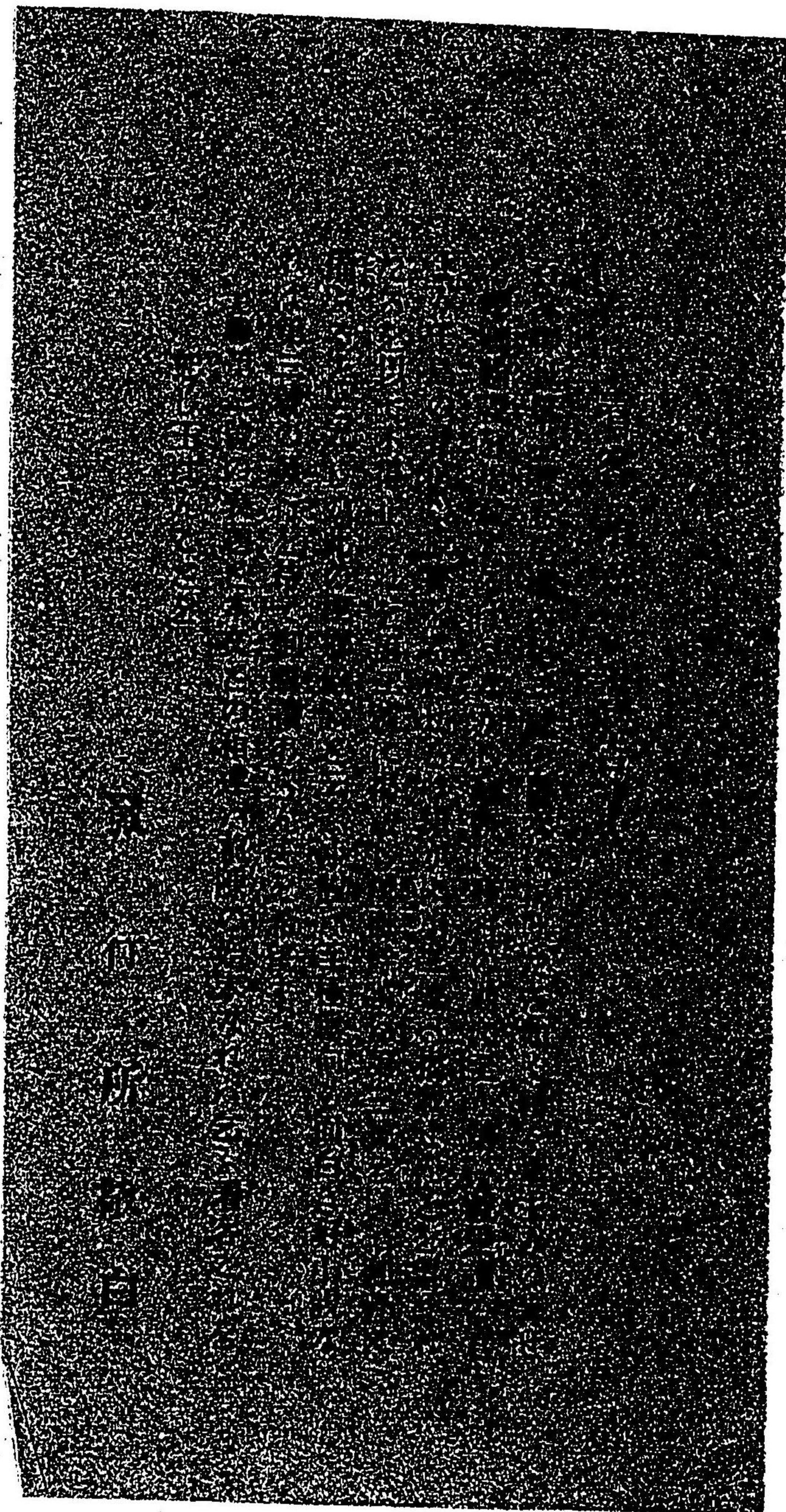
美製本二百六十頁餘  
定價十九錢

情つららさいらい在來の日本小説を見るに甲あつを通じ乙おつを通じ其趣向しゆかうの凡庸ほんよう通常つうじょうなる殆ほとんど千篇せん一律りつの感かんあり讀よで其半かたに及およべば以もつて全篇ぜんぺんの結構けつこうを曉さとるべく一擲いつてきを嘗なめて全鼎ぜんていの味あじはひを知るもの實じつに是れなり此局きよく促せまたる小説せうせつに安やすじ他たに幾多いくたの好小説こうせうせつあるを知らざりし我日本われにっぽんの文壇ぶんだんに破天荒はてなの奇想きそうを以もつて新あらたに旗幟しきしを樹たて疾風しつぷうの枯葉こはふを捲まさ去いるの勢いきほひを揮ふるつて舊來きうらいの馱た小説せうせつを驅逐くさくするものを西洋小説せいようせうせつとなす而して蟹行かいかうの書しよに眼まなこある者世其人よそのひとに乏なげしからせと雖も多數たすうの看客くわんかく尽ことごとく之を解かいする能あたりを爰こゝに於おて涙香小史なみかこうしの筆ふであり其奇きを探たづみ珍うんを求め孜々しし之を譯出やくしゆつして世よに公こにし世人よそのひと之を據よりて西洋小説せいようせうせつの真味まじを解かいし得えるに至いたりて其奇きに驚おどろき妙めうに驚おどろき手にせる幾多いくたの馱た小説せうせつを抛なち争あつて之を得えるに急いそはし洛陽らくやうの紙價しや爲なに貴たつとく百家案頭ひゃくかあんとう必かならずを一部いぶの翻譯ほんやく小説せうせつなくんばあらせ是れ實じつに其趣向しゆかうの絶倫ぜつりんなるに由よるの讀者よめの既すでに信しんじて疑うたがはざる所ところなり此決闘このけつとうの果はてなる一篇いっぺん亦また小史せうしの警筆けいひつを煩わづらはして世よに顯あるものなり

大阪南區心齋橋北詰北へ入

專賣所

競爭屋書店



淚香小史譯述

◎ 決闘の果

美製本二百六十頁餘  
定價十九錢

情ら在來の日本小説を見るに甲を通じ乙を通じ其趣向の凡庸通常なる殆ど千篇一律の感あり讀で其半に及べば以て全篇の結構を曉るべく一掃を嘗めて全鼎の味を知るもの實に是れなり此局促たる小説に安じ他に幾多の好小説あるを知らざりし我日本の文壇に破天荒の奇想を以て新に旗幟を樹て疾風の枯葉を捲き去るの勢を揮て舊來の駄小説を驅逐するものを西洋小説となす而して蟹行の書に眼ある者世其人に乏しからせと雖も多數の看客尽く之を解する能の毫髪に於て淚香小史の筆あり其奇を探り珍を求め孜孜之を譯出して世に公にし世人之に據りて西洋小説の眞味を解し得るに至りて其奇に驚き妙に驚き手にせる幾多の駄小説を抛ち争て之を得るに急はし洛陽の紙價爲に貴く百家案頭必せ一部の翻譯小説なくんばあらせ是れ實に其趣向の絶倫なるに由るの讀者の既に信じて疑はざる所なり此決闘の果なる一篇亦小史の警筆を煩はして世に顯ゆるものなり

專賣所

大阪南區心齋橋北詰北へ入  
競爭屋書店

看客諸君に謹告す

百味集第一號巻尾欄内第二號の目次に掲げたる如く轉々堂主人の著せる櫻郷餘談を掲載するはづなりし既に發行の期に至り第一號愛讀の君より千鳥の音儀の原書を寄送せられ頻りに第二號へ掲載せんとを望まれたるを以て不得止これを第二號に掲載し櫻郷餘談の第三號を以て御覽に備ふるとなしぬ此の櫻郷餘談と云ふ小説の至極趣向の面白き好小説なれば第三號の發行を待て御購讀あらんことを希望す  
●第二號の表題と本文との相違の前陳の始末なれば乞ふ看客これを恕し玉はんことを

發行所敬白

1950

091364-000-9

913.6-M355h

蜀魂雲井の一声・南海千鳥の音信

競争屋

M24

DBN-2262

